

グローバル時代における日韓の重要性



2007年度

第4回日韓大学生国際交流セミナー報告書

主催 お茶の水女子大学国際教育センター
お茶の水女子大学グローバル文化学環
同徳女子大学校外国語学部日本語学科



浴衣・韓服体験（8月3日）



研究発表（8月6日）



歓迎会（8月2日）

目 次

第4回日韓大学生国際交流セミナー概要

(森 山 新) 1

講演会「グローバル時代における日韓の重要性」

国際交流と他文化の理解 (金 榮 敏) 6

東アジアと日韓両国の課題解決に向けて

(森 山 新) 9

日韓文化体験

民族衣装体験 (国際教育センター) 12

茶道裏千家 (裏千家茶道部) 13

狂 言 (狂言研究会) 14

韓国歌曲 (李 昭 靜) 16

日本舞踊 (日本舞踊研究班) 17

研究発表

韓国の大学生文化について (盧惠爛・李イェニ・任蓮周) 18

日本の大学生の遊びと文化 (浦野希美・嘉指久美子) 21

韓国人の結婚観について (金知恩・金志惠・許召暎) 24

日本女性の結婚観 (佐々木里紗・田村あゆみ・陳敏・横内裕子) 29

韓国の伝統文化 (權頌恩・金義暻・羅香善・李善英) 35

日本の伝統音楽について (吉野まゆみ・上田彩子) 39

韓国のドラマが持つ特徴 (鄭詠喜・李知恩・李漢暻・張承喜) 43

日本人の笑いについて (長澤美波・庭山飛鳥・黒川日南子) 46

レポート

日韓の民族衣装の着用頻度の違い (磯 部 美 奈) 51

日韓の人間関係とコミュニケーションの相違

(田 中 結 依) 53

日韓の感情表現の違い	(柳 田 麻 衣) ……………	55
日韓の文化伝達の違い	(天 野 真由子) ……………	58
日韓の食に対する考え方の違い	(羽 賀 ゆかり) ……………	60
日韓文化比較	(篠 崎 ゆ い) ……………	62
似ているからこそ異なる日韓	(鄭 銀 貞) ……………	65
日韓の言語習慣の違い	(金 井 友里恵) ……………	68
日韓における互いの文化の広がり	(吉 井 南美子) ……………	70
日韓の人間関係の距離の違い	(林 瑛) ……………	72
恋愛間の違いについて	(成 定 優) ……………	74

総 括

国際交流の様相と今後の方向性	(申 恩 浄) ……………	76
日韓の交流が我々に教えてくれたこと	(森 山 新) ……………	81

【概要】

第4回日韓大学生国際交流セミナー

森山 新（お茶の水女子大学）

1. セミナー概要

主催 お茶の水女子大学国際教育センター、グローバル文化学環

同徳女子大学校外国語学部日本語学科

場所 お茶の水女子大学（東京都文京区大塚2-1-1）

日程 2007年8月2日（木）～10日（金）

今回で第4回、日本での開催は2回目を数える。今までの経験を踏まえ、今回は研究発表に加え、お互いの民族衣装体験や、本学の日本文化系の部・サークルの出演など、より深く日本文化を理解するための工夫を凝らした。

また本年度からはグローバル文化学環の実習といった意味合いが加わり、本学側の主催も今までの国際教育センターに加え、グローバル文化学環も加わった。そのため単なる国際交流、異文化理解の場であるとともに、講演会を通じて、グローバル時代の日韓の重要性についても考える場が持たれた。

日本側の参加者は、「多文化交流実習3、4」「異文化交流演習1」の受講者で、日韓の交流を通じ、国際交流や異文化理解について学ぶ機会を得た。韓国側の参加者は多数の応募者の中から選ばれた学生たちで、専攻であり、第二外国語でもある日本語で研究成果を発表した。

<2日（木）>来日、歓迎会

13時55分羽田着日航機で韓国学生一行が到着した。バスで直接国際学生宿舎に向かう。16時に到着し、入寮のオリエンテーションを行った。18時、浦野さんの司会で歓迎会が始まった。日韓の教員の挨拶、学生の自己紹介の後、それぞれのテーブルに分かれて親睦のひと時を持った。

<3日（金）>開講式、講演会、日韓文化体験、実習ミーティング

10時からセミナーが始まった。まず大学及びグローバル文化学環を代表し三浦副学長、国際教育センターを代表し佐々木センター長が挨拶を行い、そのあと記念品贈呈、記念撮影を行った。

10時20分から森さんを司会とし、「グローバル時代における日韓の重要性」と題し講演会を行った。最初に同徳女子大の金榮敏先生が、韓国における日本語教育と日流について講演を行い、続いて森山が、自身の韓国との出会いについて触れたあと、グローバル化はまず、自身の心の中から行うべきであることなどを語った。9日間にわたるセミナーを開始するにあたり、動機づけを深める考察の場となった。

昼食をはさみ、午後は長澤さんを司会に日韓文化体験の時間を持った。まずは浴衣と韓服の交換試着。それぞれが持ち寄った浴衣と着物をお互いに着せあいながら、互いの文化を味わった。

続いて、いくつかの日本文化系サークルによる友情出演。今回から始めた企画で、裏千家茶

道部、狂言研究会、箏曲部、日本舞踊研究班の4つの部、サークルが快く応じてくれた。また韓国文化としては、同徳の卒業生で、現在本学で学ぶ李昭静さんが韓国歌曲を披露してくれた。

一連の友情出演は、同じ大学生による企画であることがお互いの文化を身近に感じさせてくれた。出演して下さった学生たちも逆にこのような機会を与えられたことに感謝の意を示してくださり、一つの交流形態としてとてもよいと思った。裏千家茶道では、実際にお茶を体験し、狂言では、初めて出会う狂言に笑い、箏曲ではなじみのある「涙そうそう」などの歌に耳を傾け、韓国歌曲では初めて耳にする韓国の音色に聞き入り、日本舞踊では二つの舞踊を鑑賞したあと、振付の意味などの説明を受けた。わずか半日という限られた時間の中で、日韓の学生がお互いの文化について多くのことを学ぶことができ、有意義な時間であった。また李さんは来日した後輩を前に韓国の歌を披露してくれたが、感無量で思わず涙がでてしまったと言っていた。夕方グループごとに実習について打ち合わせをした。

<4日(土)、5日(日)>テーマ別野外実習

4日、5日は台風一過の暑い日で東京は35度にも達したが、学生たちはそれぞれのテーマに分かれて野外実習に出た。また夜は各地で花火大会があり、それを見学に行ったグループもあった。

<6日(月)>研究発表会

これまでの研究と2日間の野外実習を総合した研究発表会を開催した。司会は留学生の鄭さん。若者文化、結婚にあらわれたジェンダー、芸能・音楽、笑いのツボの4つのテーマに分かれて、韓日双方から発表があった。研究発表あり、体験演奏あり、VTRの上演ありと、多彩な内容で聞いていておもしろく、今までの発表会に比べてもおもしろかった。韓国の学生たちも、来日して日数がたっており、日本語の使用に慣れてきたようで、発表する日本語も聞きやすかった。日本側の学生たちは2か月間の研究や練習の成果が披露されるとともに、実演やVTRなどによる体験コーナーも設けられ、工夫がこらされ、おもしろかった。

<7日(火)>文化探訪(箱根)、送別会

セミナー最終日、親睦をかねて、箱根へ日帰りバスツアー。9時に大学へ集合、箱根へ向かった。11時45分に箱根町に到着、解散となった。各自、閑所跡、恩賜公園、美術館、芦ノ湖海賊船乗船、ロープウエー、大涌谷観光などを楽しんだ。15時40分に集合、19時15分に大学前のインド料理店に到着、送別会を行った。おしゃべりだけでなく、プレゼントの交換、記念写真撮影、住所交換などが自然発生的に行われた。各グループから日韓1名ずつ感想を話してもらったが、日本側からは、今すぐにも韓国に行きたいとか、韓国語を習いたい、来年の実習では韓国に行きたいなどといった感想があった。みんな別れがたそうだったが、時間も遅くなっていたため、21時に解散となった。

韓国側一行は、8日(水)、9日(木)に鎌倉・東京観光を行い日本文化についてさらに触れ、10日(金)退寮し、帰国の途へついた。

2. スケジュール

7月27日	金	最終打ち合わせ
8月2日	木	<セミナー1日目>来日
		13:55 羽田着 バスで出迎え
		16:00 入寮オリエンテーション (国際学生宿舎多目的室)
		18:00 歓迎会 (国際学生宿舎多目的室)
8月3日	金	<セミナー2日目> (文教1号館、第一会議室)
		10:00 開講式 (司会: 森亜紀菜) 主催者挨拶 三浦徹 (お茶の水女子大学副学長) 佐々木泰子 (お茶の水女子大学国際教育センター長) 記念品贈呈、記念撮影
		10:30 講演会「グローバル時代における日韓の重要性」 (司会: 森亜紀菜) 講演1 国際交流と他文化の理解 金榮敏 (同徳女子大学校) 講演2 東アジアと日韓両国の課題解決に向けて 森山新 (お茶の水女子大学)
		13:00 日韓文化体験学習 (司会: 長澤美波) 日韓民族衣装 (浴衣&韓服) 茶道 (裏千家茶道部) 狂言 (狂言研究会) 箏曲 (箏曲部) 韓国歌曲 (博士後期課程 李昭静) 日本舞踊 (日本舞踊研究班)
		16:00 実習の打ち合わせ
8月4日	土	<セミナー3日目>グループ別実習
8月5日	日	<セミナー4日目>グループ別実習と研究発表準備
8月6日	月	<セミナー5日目>グループ研究発表会 (文教1号館、第一会議室)
		10:00 <若者>グループ発表会
		11:30 <結婚>グループ
		13:50 <舞踊・音楽>グループ
		15:20 <笑い>グループ
16:40 総評 金榮敏・森山新		
8月7日	火	<セミナー6日目>箱根観光・送別会
		09:00 大学集合
		11:45 箱根着・昼食・関所・芦ノ湖遊覧船・ロープウエー・大涌谷見学
		15:40 大涌谷発
19:15 送別会 (大学前インド料理店)		
8月8日	水	<セミナー7日目>同徳企画 (鎌倉観光)
8月9日	木	<セミナー8日目>同徳企画 (東京観光)
8月10日	金	<セミナー9日目>退寮、帰国の途へ

3. セミナー参加者

(1) スタッフ

日本	森山新	お茶の水女子大学グローバル文化学環（教員）	セミナー実行委員長
	申恩浄	お茶の水女子大学大学院（研究生） 同徳女子大学校大学院（博士後期）	TA
	森 亜紀菜	お茶の水女子大学大学院（博士前期）	ボランティア
	石井佐智子	お茶の水女子大学大学院（博士後期）	ボランティア
	金美延	お茶の水女子大学（日研生）	ボランティア
韓国	金 榮敏	同徳女子大学校日本語学部（教員）	韓国側指導教員

(2) 日本側参加者（23名）

班	氏名	所属	学年	履修科目
若者	浦野 希美	文教育学部・グローバル文化学環	3	3、4
	嘉指久美子	文教育学部・グローバル文化学環	3	3、4
	天野真由子	文教育学部・グローバル文化学環	2	4
	小山 景子	文教育学部・人文科学科（歴史）	2	4
	金井ゆりえ	文教育学部・グローバル文化学環	2	4
	田中 結依	文教育学部・グローバル文化学環	2	4
結婚	田村あゆみ	文教育学部・グローバル文化学環	3	3、4
	佐々木里紗	文教育学部・グローバル文化学環	3	3、4
	横内 裕子	文教育学部・グローバル文化学環	2	3、4
	陳 敏	文教育学部・グローバル文化学環	2	3、4
	柳田 麻衣	文教育学部・グローバル文化学環	3	4
	成定 優	文教育学部・グローバル文化学環	3	4
	鄭 銀貞	日研生		4
	羽賀ゆかり	文教育学部・グローバル文化学環	2	4
音楽	吉野まゆみ	文教育学部・グローバル文化学環	3	3、4
	上田 彩子	文教育学部・グローバル文化学環	2	3、4
	篠崎 ゆい	文教育学部・グローバル文化学環	2	4
	磯部 美奈	生活科学部・人間生活学科（生活文化学）	1	4
笑い	長澤 美波	文教育学部・グローバル文化学環	3	3、4
	庭山 飛鳥	文教育学部・グローバル文化学環	3	3、4
	黒川日南子	文教育学部・言語文化学科（英文）	2	3、4
	林 瑛	文教育学部・人文科学科	1	1
	吉井南美子	文教育学部・グローバル文化学環	3	4

注) 履修 1：異文化交流演習1、3：多文化交流実習3、4：多文化交流実習4

(3) 韓国側参加者 (14名)

組	氏名	所属	学年
若者	盧 惠爛 (Nor Hye Ran)	日本語学科	3
	李 イェニ (Lee Ye Ni)	日本語学科	3
	任 蓮周 (Lim Yeon Joo)	日本語学科	3
結婚	金 知恩 (Kim Ji Eun)	日本語学科	3
	金 志惠 (Kim Ji Hye)	日本語学科	3
	許 召暎 (Huh So Young)	日本語学科	3
舞踊	權 頌恩 (Kwon Song Eun)	日本語学科	3
	金 義暎 (Kim Eui Kyung)	日本語学科	3
	羅 香善 (Na Hyang Sun)	日本語学科	3
	李 善英 (Lee Sun Young)	日本語学科	3
笑い	李 知恩 (Lee Ji Eun)	日本語学科	3
	李 漢暎 (Lee Han Kyoung)	日本語学科	3
	張 承喜 (Jang Seung Hee)	日本語学科	3
	鄭 詠喜 (Jeong Yeong Hee)	日本語学科	4



【講演会】

国際交流と他文化の理解

金 榮敏（同徳女子大）

グローバル時代といわれる今日、国境を越えての交流は国家と国家をはじめ、企業と企業、個人と個人など様々なレベルで活発に行われている。今や週末をお隣の国で過ごしてくるといいうのもよくある話だ。このような国際交流を通して我々は難なく外国の文化に触れることができ、必要に応じて受け入れるようになった。それでは、そのような交流が他文化に対する本当の理解にまでつながっているだろうか。

数年前から日本で「韓流」という名の韓国ブームが巻き起こっている。韓国ドラマが興行に成功したことから始まった韓流は、初めは韓国ドラマ、映画、歌への関心であり、韓国の俳優、歌手などへの関心でもあった。今や韓流が時には韓国への観光熱風、しかもドラマの撮影地や有名俳優と関係のある聖地(?)探訪、時には韓国語の学習熱風、韓国料理への関心などにまで至っている。韓流ブームが起こる前の日本人の韓国に対する認識に比べると驚くべき変化であるといえよう。韓流以前の韓国は、日本の大衆にはおそらく少ない費用で焼肉とエステ、そしてショッピングを楽しめるお隣の国といった程度にしか認識されていなかったのであろう。実際に 1990 年代後半、日本の各放送局で競い合って放映していた韓国関連の番組というのは、日本の有名な俳優が韓国に行き、有名な飲食店を訪ねて韓国料理を食べ、韓国風のエステ、サウナを楽しみ、締めくくりは免税店でショッピングを楽しむといった内容で組まれていた。当時、日本に留学していた筆者は外国で母国を紹介する番組に接する嬉しさを覚えたが、それと同時に少なからずの惜しさを感じたりしたものだった。その時期に比べると、今の韓流ブームは本当に大きな変化であるといえる。

韓国内でも日本の文化が次第に拡散している。「韓流」に対して「日流」という言葉ができたくらいだ。1990 年代後半から始まった日本の大衆文化の開放とともに以前とは比べ物にならないほどの日本の大衆文化が韓国に紹介されてきている。日本の映画やドラマをはじめ、小説、歌謡、漫画、アニメなどをオンラインやオフラインで容易く接することができ、日本原作の韓国ドラマも放映している。

しかし、このような両国の交流が必ずしも相手に対する真の理解につながるというわけではないようだ。韓国を訪れる日本人の多くが文化体験を目的としているわけではなく、単なる観光に興味を持っており、韓国内での日本の大衆文化の人気も日本文化の理解に基づいたものではなく、単なる好奇心と楽しみの追求によるものであるようだからだ。勿論、他文化に対する理解がこういった経験の積み重ねによって実現されるということは確かだ。しかし、これからはそれ以上の相手に対する真の理解が求められるのではないか。最近、韓国のある放送局の人気番組である日本人が食器を手にとって食事をする日本の食習慣の観点から、食器をお膳に置いたまま少し頭をさげて食事をする格好を日本でどのように表現するかを紹介して物議を醸したという記事を読んだことがある。日本ではこれを「犬食い」という。文字通り、犬がえさを食べる時の格好にそっくりだということらしい。だからといって、韓国人がかつとなることはないだろう。あくまでも、それは日本の食文化にすぎないからである。反対の例をあげてみよう。韓日の喫煙文化の違いの中で、多くの韓国人が驚くであろう（はずの）事実がある。日本では父親の前でも息子が遠慮せずにタバコを吸う。いっしょに吸ったりもする。先生の前でも

かまわない。韓国でなら許されない行為だ。日本の父親はむしろそれを息子の成長の証でもあるかのように内心喜んだりするという。このような文化的違いは違いとして受けとめて理解すればいい。そうすることによって交流も一層深まることができよう。もう一つの例を挙げてみよう。最近、韓流の影響もあって、様々な韓国料理が日本人の興味を引いている。その中の一つがビビンバだ。日本に専門のチェーン店ができたほどであり、日本内の焼肉屋では石焼ビビンバが人気メニューの一つだ。このビビンバの流行が持つ文化的意味は大きい。なぜなら、日本の食文化ではごはんと具を混ぜて食べるという習慣はないからだ。いや、想像すらできないことだ。カツ丼や牛丼といった丼物ですら、ごはんを具と混ぜるという事はしない。箸でごはんを上手にとって食べる。カレーも例外ではない。全部混ぜてから食べるはじめる韓国の習慣とは違って、箸のかわりにスプーンでごはんをカレーを少しずつ混ぜながら食べていく。このような混ぜない食文化を持っている日本人が混ぜるのが当たり前、そして混ぜることによって一層おいしくなるビビンバを受け入れて楽しんでいるというのだ。韓国の食文化を日本の食文化に合わせようとせず、そのままを受け入れることによって真の味を味わうことができたのだと思う。これこそ、他文化に対する真の理解の始まりではないだろうか。

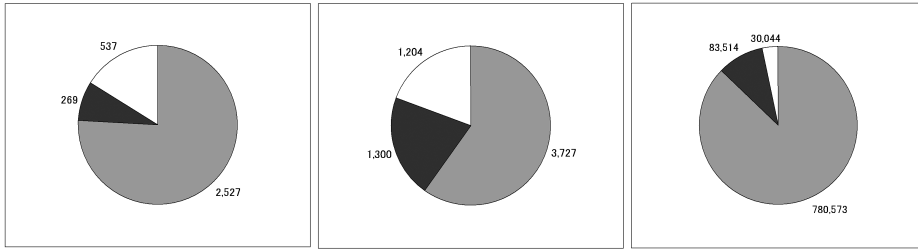
外国語教育の分野においても、交流を通じた外国語学習の重要性が強調されている。外国の文化への理解は効果的な外国語学習にもつながるからだ。実際、同徳女子大学校でも外国語教育における交流の重要性を認識し、交換学生制度や海外語学研修など、いろいろな国際化プログラムを実施している。我が日本語科でも毎年多様な国際交流行事を実施している。毎年夏に行われる日本のお茶の水女子大学との共同セミナーもその一つだ。交互に相手国を訪ねて開催するこの共同セミナーが、昨年は同徳女子大学校で開かれた。その準備は3か月前から始まり、参加学生の選抜からチーム別主題発表の準備、日本語での発表及び討論の練習に至るまで多大な努力が注がれた。いよいよ共同セミナーが始まり、主題発表、野外実習、報告会、文化体験などで組まれた日程の中で、二日目の主題発表の時間が訪れた。その間の準備と努力が報われるはずの時間であったが、同徳の学生たちの表情は明るくなかった。日本語だけで進められる中、多少自分たちの日本語能力にもどかしさを感じているようだった。ところが、わずか2、3日後の学生たちの表情からはそのような様子はまるで見当たらなかった。短い期間を通してではあるが、日本人学生との交流が彼女たちに外国人とのコミュニケーションに自信を持たせたのだろうと思った。おもしろいことはそのような自信が学生たちの日本語能力に効果的に働いたということだ。最終報告会の時の同徳の学生たちの日本語での発表は立派なものだった。これぞまさに互いを理解しようとする純粋な努力が生んだすばらしい効果ではないかと思う。

このように、交流は他文化に対する誠実な理解に基づいて行われるべきだ。他文化に対する些細な理解の積み重ねを通してのみ、真の意味での交流も可能になるだろう。今、我々は量的な交流から質的な交流へと方向転換を行うべき時期を迎えているのだ。

注)

1) 自分の文化と異なる文化のことを一般的に「異文化」と呼んでいるが、「異文化」と言ってしまうと異質的な面が強調されるような気がして、今回はあえて「他文化」という用語を使うことにした。

2) また韓国での日本語学習者や日本語教育機関の数を見ると日本語や日本への関心が高いことが窺える。参考までに日本国際交流基金の「2003年海外日本語教育機関調査結果」から、韓国における日本語学習者、日本語教育機関及び日本語教師の数に関する資料を引用しておく。



■ 初·中等教育 ■ 高等教育 □ 学校教育以外

グローバル時代における日韓の重要性

東アジアと日韓両国の課題解決に向けて

森山 新（お茶の水女子大）

1. 韓国との出会い

私が大学生の頃、2か月かけて世界を一回りしたことがあります。その時、私は欧米よりアジアに親しみと暖かさを感じましたが、中でも韓国は暖かさを通り越して熱さを感じました。同時に日本と韓国との間には悲しい歴史があり、日本には解決すべき課題が残されていることを再認識し、私たちの世代でそれを解決したいと思うようになりました。それで日本語教師となって韓国へ行ったのですが、日本語教師という仕事は毎日が国境を越えた出会いの連続で、日々教室で繰り返される出会いはいつしか私を本気にさせ、再度大学院で日本語教育を学び、韓国の大学で教鞭をとるようになりました。

2. 日韓の重要性

日本と韓国の間には二つの課題が残されていると思います。一つは既に述べた歴史的課題、いわゆる過去史というもので、もう一つは現代的課題です。EU に代表されるように、世界は今、それぞれの地域で国という枠組みを越えグループを形成しつつありますが、東アジアではまだそのような共同体は想像すらできないというのが今日の情勢です。これは東アジアの国々が未だ国というもの、ナショナリズムというものを越えられていないということの意味していると思います。EU では多言語政策がとられ、多言語社会が実現していますが、東アジアで、特に日本で、英語に加え近隣の言語を話せる人はまだごく少数に過ぎません。

東アジアが国を越えて何らかの連携をなすとすれば、やはり言語的には英語に加え、韓日中のうちの少なくとも1か国語は話せるのが当然といった状況を作ることが求められると思っています。グローバル文化学環が東アジア諸語の習得を奨励しているのも一つにはそのような背景があると思います。

3. 異文化を理解する

しかしグローバル化を阻むのは言語の問題ばかりではなく、文化の問題も大きな問題です。異文化理解は容易なことではありません。異文化を理解するとは単に「自分は自分、相手は相手」と他を許容するというものではありません。もちろんそれは共存のための最低限のルールになるかもしれませんが、一度互いが何らかのかかわりを持ち始めると、これでは誤解や軽蔑、対立といったものが生まれます。それは許容が無関心と変わりがないためです。無関心から一歩進んで相手を知り、理解しようとする行為が必要です。

異文化に接するとだれしもそこに異質感を感じると思います。それはそれぞれが長い時代の中で大切に守り続けてきたものが異なっているということです。何ゆえこの人たちはその文化に価値を見出し、大切に守り続けてきたのか、その背景について知ることができれば、知ることとは理解となり、昨年のセミナーで同徳の李先生がおっしゃっていたリスペクト（尊敬）にいたることができると思います。

一例を挙げれば、韓国の食器を持たない食べ方は食器を持つことをマナーとする日本人には「犬食い」に見えます。しかし食器を持つか持たないかの背景には日本が箸を選択し、韓国が

匙（スプーン）を選択したことが密接に関わっており、匙を選択した背景に儒教精神から来る敬老の精神があるといえます。同様に韓国の何でも混ぜる食べ方は、見ることも味わいの一部と考える日本人には「汚らしい」感じがします。しかしこれも、穀物に様々なものを混ぜる背景に、お年寄りの栄養を考える敬老の精神があるといえます。こうした背景を知れば、韓国の食べ方を軽蔑することはなくなり、むしろ尊敬の気持ちすらわいてくるのではないのでしょうか。

ただし、ここで一つ付け加えておきたいのは、守り続けてきた文化がすべて必ずしもよいものであるとはかぎらず、様々な問題を内包している可能性もありますので、それについてはそれぞれで検討し、自省を促し、質を高めていく努力も必要だと思います。

もう一点、1990年代に私が韓国で日本語教師をしていましたが、当時はまだ反日感情がかなり残っており、日本語学習にそれがかなり影響を及ぼしていました。そのとき私が日本語教師として努力したことは、私が一人の日本人として韓国の学生たち一人一人に愛情を持って接するというものでした。それを通じ、学生たちの日本と日本人のマイナスイメージが取り払われ、日本語を学ぶことの壁が取り払われ、動機づけが積極的なものへ変わっていきました。歴史で習ったあのイメージが払拭されていくわけです。そのような経験から言えることは、ただ漠然とその国の人を見つめて、愛したり、尊敬したりすることは難しいということです。まずは目の前にいる田中さん、金さんを見つめて愛し、尊敬することが、その国やその文化を尊敬することの重要な一歩となると思っています。

4. 心のグローバル化

私は昨年度のグローバル文化学総論の最後の授業で、グローバル化は自身の心の問題で、心のグローバル化が何よりも必要だということを言いました。グローバル化にはよい部分だけでなく、弊害もあるのは事実ですが、少なくとも心のグローバル化は今日を生きる私たちに不可欠なことだと思います。

ではどうしたら心のグローバル化ができるのでしょうか。例えば兄弟喧嘩は親の目から見れば、どちらが悪いとは言い切れない部分があります。夫婦喧嘩もそうです。兄弟喧嘩や夫婦喧嘩を解決するのは、お互い相手の立場に立つてものを考えられるかということが重要です。つまり高い視点に立つか、多角的な視点の持ち主になることが重要です。その意味で、私たちは国の次元を越え、まずはアジアという視点に立つ必要があると思っています。

アメリカで日韓の留学生とても親しくなるという話をよく聞きます。より広い視野に立ったとき、日韓の違いは些細な問題となるからだと思います。

昨年同徳女子大学の孫総長が本学を訪れた際に、「韓国民は寛大さ、日本国民は謙虚さを」というお話をされました。まさしくこれがより高い次元に立った考え方ということです。

日本は明治以来、ひたすら脱亜入欧に走り、その結果いち早く発展を遂げることができましたが、同時にアジアの同胞を蔑視し、傷つける結果となりました。韓国は過去史に対する心の傷を今も有しています。より高い次元に立ち、「韓国民は寛大さ、日本国民は謙虚さ」を実践したときに、解決の糸口が見つかるのではないかと思います。

日本と韓国がお互いに交流し、理解し、尊敬できるようになることは、心のグローバル化の重要な一歩となると思っています。日本と韓国はともに、世界の中ではかなり単一「的」な民族、文化、言語的環境を有してきました（単一「的」と言ったのは、厳密には決して単一ではないことを意味しています）。しかしそうした環境は、世界的に見るとマイノリティであるわけです。世界の多くは複数の民族が共に住み、日常的に言語と文化を共有しながら生きています。その意味で日本や韓国は、「国」の次元を越え、グローバルな心を持ち、多文化、多言語に生き

るのがだれよりも難しいのだと思います。世界の中で日本や韓国の TOEFL の点数が低いのも、単に英語と日韓両語の言語間距離が大きいという理由だけでなく、こうした言語的・文化的環境が原因になっていると思っています。

5. グローバル時代を生きる皆さんに望むこと

グローバル時代に生きる皆さんには、いち早く世界を経験し、グローバルな心を持つようになってほしいと思っています。そのために皆さんに三つのことをお願いしたいと思っています。第一にできるだけ若く感受性の豊かなうちに世界に出てみてほしいということです。そして第二に、自分の国を外側から見てみてください。第三に、外国の地で自身をマイノリティの立場に置いてみてください。そういった経験が、より高く、広く、多角的な視点に立ったグローバルな心をはぐくんでくれると思っています。

かなり大きな話をしてしまいましたが、この日韓セミナーでその全てを体験することは不可能なことは言うまでもありません。しかしその最初の一步になることはできると思います。

【日韓文化体験】

浴衣・韓服体験

會田祐子、梅澤香代子、徳間望（国際教育センター教務補佐）
森山 新（国際教育センター、グローバル文化学環）

1. 国際教育センターとは

センターでは、①学部・大学院などで学ぶ留学生に対する日本語・日本文化教育、②留学生の教育研究の指導や社会生活上の悩みに対する助言など、受入れから帰国までの一貫した教育指導援助、③日本人学生との相互交流体制の構築などを行っています。

この他に日本文化教育の一環として、着付け教室・書道教室・生け花教室を年2回、歌舞伎勉強会を年1回行っています。また、今年度から折り紙教室（年2回）も行っています。

2. 文化体験の内容

私たちが実際に浴衣を着ながら説明し、韓国の学生に浴衣を自分で着てもらう形にしました。日本人学生には説明を聞きながら補助的な役割をしてもらいました。今回の目的は、実際に浴衣の着付けをしながら、浴衣の構造を理解してもらうことでした。浴衣を着る際、わきの下に開いてある穴（身八つ口）から手を入れたり、背中の縫い目（背中心）を引っ張ったりしながら形を整えていきます。このような動作を通して、浴衣の構造は大変実用的だという事を体感してもらえたのではないのでしょうか。

帯は半幅帯の最も基本的な結び方である文庫結びに挑戦してもらいました。最後に、浴衣の歴史と文庫結びの結び方を紹介したプリントを配布し、終了しました。

その後、韓国側が持参した韓服（チマチョゴリ）の試着も体験し、日韓交じり合っの記念撮影が行われました。

3. 感想

初めての着付けはだれでも大変だと感じますが、特に韓国の学生にとってはより難しく感じたことでしょう。しかし着付けをしている最中は戸惑った表情をうかべながらも、積極的に参加してくださいました。浴衣の着付けが終わると、皆さんとても嬉しそうに写真撮影をしていたのが印象的です。



裏千家茶道部

齊藤 花衣（生活科学部人間生活学科・3年）
中島万祐子（文教育学部言語文化学科・3年）
柳澤佳奈子（文教育学部人間社会科学科・3年）
迫 史 織（理学部数学科・2年）

1. 裏千家茶道部とは

裏千家茶道部では毎週2日間、日本の伝統文化である茶道のお稽古を中心に活動しています。部員によって催されるお茶会が1年間に数回あり、文化祭でも微音祭茶会を催しています。

2. 裏千家茶道紹介

茶道は安土桃山時代、千利休によって完成されました。千利休は貴族社会をはじめ、当時の武士や町人に至るまで、地位や身分を越えて茶道を広めていきました。千利休の死後、千利休の孫にあたる宗旦によって千家茶道の基礎が築かれ、宗旦の子、宗室によって裏千家が確立されました。

茶道の精神は千利休が唱えた「和敬清寂」という言葉に集約されています。「和」とは仲良くすることが平和な社会の基礎となることを表し、「敬」とは自分を取り巻くすべてのものに敬いの心を持って接するべきであることを表します。「清」とは自分自身の心を清めようという素直な心を持つことが大切であることを示し、「寂」とはどんなときにも動じない心をつくっておくことを示します。

3. 文化体験の内容

まず始めに、茶道とはどのようなものか韓国の学生に知ってもらうために、茶道の基礎となる盆略というお点前を紹介しました。盆略のお点前をする中でお茶を点てるまでの過程、そしてお茶の飲み方を説明しながら進めていきました。

次に実際にお茶を点てる体験をしてもらいました。お茶とともに、茶道では欠かせないお菓子を食べてもらいました。今回は薄茶を体験してもらったので、干菓子を用意しました。韓国の学生に四つのグループにわかれてもらい、裏千家茶道部の部員が各グループに入り、茶道についての話やお茶やお菓子について話しながら、韓国の学生に学生同士で点てたお茶を楽しみながら飲んでもらいました。

4. 感想

はじめは茶道の楽しさをどうしたら伝えられるだろうかと紹介する内容について悩みました。限られた時間の中で、実際に韓国の学生にお茶を点てて、飲んでもらう体験をしてもらうことができ、「おいしい」という感想を聞いたことがとてもうれしかったです。今回の出演は日本の文化をほかの国の方に紹介する、という貴重な体験でした。ほかの国の方に紹介することによって改めて茶道のよさ、素晴らしさを確認することができました。



狂言研究会

本田 絵美（文教育学部人文科学科・3年）
田嶋明日香（文教育学部言語文化学科・3年）
伊 藤 鮎（文教育学部人文科学科・1年）

1. 狂言研究会とは

私達狂言研究会は和泉流万作家に狂言を教わっています。能・狂言の観賞、研究だけではなく実際に狂言を演じています。春には能舞台、秋には徹音祭で狂言の発表を行っています。

2. 狂言紹介

狂言は歴史的には能とともに歩んできました。現在では、能と狂言を合わせて能楽と呼び習わしていますが、そう称されるようになったのは明治時代以降のことで、徳川時代以前には申楽と呼ばれていました。能楽は日本固有の神楽系の歌舞と7-8世紀にアジアから伝わった散楽が混じった猿楽と、農耕神事に発する田楽が交流熟成されて出来ました。能と狂言は鎌倉時代に演劇として確立され、室町時代に完成しました。狂言には独立して演じられる本狂言と、能の前場と後場の間に演じられる間狂言があります。狂言は、能が描かない人間の愚かしさ、滑稽さ、喜劇性に焦点をあてています。人間が引き起こす様々な失敗を、大らかな目で面白く描きます。

3. 文化体験の内容

狂言「盆山」小舞「暁」「風車」

盆山が欲しくてたまらない男が、何某に頼み込んで山ほどもっているうちの一つを貰おうとするがすげなく断られてしまいます。そこで男は庭の裏手から忍び込んで盆山を一つ二つ失敬しようとしみます。垣根をのこぎりで壊して忍び込むまでは良かったものの、あえなく見つかり小さな盆山の影にかくれます。そこへやってきた何某は盆山に隠れきれない男を見付けて少々いたぶってやろうと、犬がいる、いや猿だといってからかいます。仕方なく鳴き真似をする男をみて溜飲をさげますが、最後には鳴くはずのない鯛がいると言われてしまいます。狂言らしい動物の鳴きまねや、写実的な動きが見ものの狂言です。

4. 感想

狂言の言葉は現代の日本人でも難しいものがあります。韓国の皆さんに理解してもらえるか、楽しんでもらえるか、はじめは不安でした。しかし暖かな反応を頂けて、狂言の面白さを少しでも伝えられたのではないかと思います。是非今度は能楽堂で、プロの能楽師の能・狂言を見ていただきたいです。



箏曲部

遊佐 珠江（文教育学部言語文化学科・3年）
中山和香菜（文教育学部言語文化学科・3年）
藤本 慎子（理学部化学科・3年）
遠藤 朝美（文教育学部人間社会学科・2年）

1. 箏曲部紹介

お茶の水女子大学箏曲部は、学内の学部生・院生により構成され、毎週一回、講師の先生をお招きしてレッスンを受けています。

発表の機会としては、文化祭でのミニコンサートの他、年一回の定期演奏会を行っています。流派は山田流で、久本玄智先生の曲を中心に、日々練習に励んでいます。

2. 箏曲紹介

箏曲は、大きく生田流・山田流の二つに分かれています。元々は生田流で、後にできたのが山田流とされています。大きな違いは爪の形で、それによって弾き方なども変わっています。楽器は13絃のものが普通ですが、低い音が出る17絃や、20絃・25絃といった広い音域をカバーできるものなど、一口に箏と言っても様々です。このような楽器のバリエーションにより、しみじみとした古典曲から華やかで壮大な現代曲まで、色々な曲を演奏することができます。

本来、古典的なものというイメージが強い箏曲ですが、それも時代とともに変わってきていると言えます。

3. 文化体験の内容

『涙そうそう』

沖縄の曲として、また夏川りみさんが歌ったことでも有名な曲。日常的にあまり親しみがないと思われる箏曲を紹介するにあたって、まずは広く知られる曲で箏の音を味わっていただこうと思ひ、この曲を選びました。

『陽光讃歌』

私たちがいつも練習している久本玄智先生の曲の一つです。明るく華やかな雰囲気なので、曲を知らなくても楽しんでいただけたらと思います。

箏という伝統、古いイメージがあるかと思いますが、それ以上の可能性があることも知っていただきたく、今回はあえて現代的な曲を演奏しました。

4. 感想

今回はこのような貴重な機会に参加させていただき、とても良い経験になったと思っています。限られた練習時間と短い発表の中で、韓国の方に箏曲の魅力を最大限に伝えられるよう、私たちなりに工夫してみました。拙い演奏だったかと思いますが、楽しんで聞いていただけたなら光栄です。



韓国歌曲

李昭靜（大学院人間文化研究科博士後期課程・3年）

1. 韓国歌曲紹介

韓国歌曲は西洋音楽が導入された1892年、讚美歌の発刊とともに歴史は始まります。数多くの歌曲が作曲されましたが、この場でご紹介したいのは韓国の伝統音楽の要素を含む曲です。その要素はリズムや装飾音、揺れ動く音、折れ曲がる音、和声などの諸要素から表現できます。「新アリラン」、「山有花」、「麦笛」などはその体系的な曲ですが、西洋手法で作曲されたとしても、韓国のエスプリを感じさせる曲です。

2. 文化体験の内容

- ・「彼が来るのか」（韓国歌曲）：月の光が照らす道を眺めて、恋人が来るのを待ち望んでいる心を表した歌。
- ・「山」（韓国歌曲）：谷を越えて行く雲を見て悲しく泣いているのは寂しげな顔をしている鹿の私です。
- ・「夢金浦打令」（民謡）：黄海道民謡。夢金浦の風景や生活を歌う。
- ・「新高山打令」（民謡）：ハムギョン道民謡。乙女への思いや新しい文明にたいしての心を表現。
- ・「懐夫歌」（ドラマ『チャングムの誓い』より）：オノラ（来て下さい）から歌詞が始まるこの曲は夫を愛する所以での複雑な心を表現。
- ・「最初から今まで」（ドラマ『冬のソナタ』より）：どんなに忘れようとしても、そうさせないのはユジン、あなたです。
- ・「マイメモリー」（ドラマ『冬のソナタ』より）：全ての瞬間を覚えています。また会えるなんて... 愛しています。

3. 感想

同徳女子大学の学生さんとひと時をご一緒させていただきありがとうございました。私も同徳女子大学の卒業生でしたので、皆さんとの時間は少し興奮気味でした。これからもたくさんの経験を積み上げ、実りが多くなりますことを応援したいです。



日本舞踊研究班

栢沼 愛 (大学院人間文化創成科学研究科博士後期・1年)

手島 華子 (大学院人間文化研究科博士前期・2年)

廣田 知子 (理学部情報科学科・4年)

佐藤 舞 (文教育学部言語文化学科・4年)

1. 日本舞踊研究班とは

週一回、坂東流の先生にお稽古をつけていただきます。部員のほとんどは初心者から始めました。踊りだけでなく、作法や着付けの仕方なども学ぶことができます。また、文化祭では、着付けの先生や卒業生の方にお手伝いしていただきながら、「秋の温習会」を催しています。

2. 日本舞踊紹介

「おどり」そのものの歴史は、神話の時代に遡ります。天の岩屋戸に閉じこもったアマテラスオオミカミを、他の神たちが踊れや踊れの祭り騒ぎで誘い出し、世界に光明が戻った、というお話です。

「日本舞踊」は、歌舞伎から派生しました。元来踊りが主体の歌舞伎は、時代とともに演劇中心となっていきましたが、江戸時代になると、踊りの部分が独立して上演されるようになりました。これが日本舞踊としての始まりと言われています。歌舞伎役者や歌舞伎舞踊の振付師たちがそれぞれに流派を立て、発展していきました。現在、120を超える流派があります。私たち日舞班が習っている坂東流の家元は、十世坂東三津五郎さんです。

3. 文化体験の内容

「さくら」: 春に咲き誇る桜をイメージした曲です。若い娘が美しい桜の花を楽しむ様子、蝶の舞う様子などを表現しています。

「紅葉の橋」: 秋の季節にふさわしく、紅葉の広がる美しい情景を思い浮かべながら、軽快なリズムを楽しんでいただけます。

○扇子の役割: 日本舞踊において、扇子は様々なものを表現します。今回は、普段私たちのお稽古でもよく使われる、「花」「雪」「波」をお見せしました。「雪」「花」「波」の順に扇子の動かし方は大きくなります。「花」はひらひらと散る様子を、「雪」はしんしんと降る様子を、「波」は岸に打ち寄せる様子を表現します。

○要返し: 扇子の要部分を人差し指と中指で支え、扇子を回転させます。要返しの後、上にかざしたり、握って動かしたりします。



4. 感想

外国の学生の方に踊りを披露することは、めったにない機会であり貴重な体験となりました。韓国舞踊についてお話を伺うと、扇子の装飾が異なっていたり、日本舞踊では歯を見せずに踊るところを、韓国舞踊ではにこやかな笑顔で踊っていたりと、とても興味深いものでした。楽しい時間を過ごすと共に、もっと他の文化について知りたいという気持ちを深められました。主催者の方、韓国の学生の皆さん、関係者の方々にお礼申し上げます。

【研究発表】

韓国の大学生文化について

盧惠爛・李イエニ・任蓮周（同徳女子大）

1. はじめに

国ごとに経済、文化などが違うのでその国の人々に重要に思われる価値も違うと思う。とくに大学生または二十代の若者はその時代の流行をよく受け入れるので韓国の大学生文化を理解すると、今の韓国の文化も理解しやすいと思う。韓国と日本は隣国として相当な部分が似ているがその中でも大学生の消費文化、日常文化そして遊び文化を中心に調べることで両国の若者達の文化を比べてみる。

2. 消費文化

今の大学生がお金をどこにつかっているのか、つまり、何に興味があつて、普段何をして時間を過ごしているのかを知るために大学生を対象としてアンケートをとり、三つの特徴を見出した。

- (1) 韓国の男はどこにお金を使っているのか
- (2) 女子大生の場合、消費の二重性が見えるのはなぜか
- (3) 男性と女性の違い

以下、説明していく。

2.1 韓国の男はどこにお金を使っているのか。

韓国の男は趣味生活にかかる費用が一番多かった。趣味生活としてはビリヤードやネットカフェに行つて遊ぶという意見が多かった。この場所に行く理由としては多分ほとんどの韓国人が勝負事好きだからと考えられる。そのような文化のせいか韓国ではスタークラフトを中心にしたオンラインゲームの市場が発達し、イースポーツもとても人気がある。

2.2 女子大生の場合、消費の二重性が見えるのはなぜ

次に、女子大生の場合で、一番お金を使っているところは食費、つぎは買い物だった。統計では分かりにくいと思うが、女子大生の場合、消費の二重性が見える。

消費の二重性というのはたとえば、1000ウォンぐらい安い服を買うため、いろいろな店を歩き回つて疲れると4000ウォンぐらいのコーヒーを飲みながら休むというもの。二十代の女性はクーポン券を使うなど、つつましい消費をするが、値段が高くてもそれに見合った価値があると思うと迷わずすぐ買う傾向がある。

2.3 男性と女性の違い

女性よりも男性のほうがもっとデートの時にお金がかかり、よく後輩に食事やお酒をおごる傾向がある。女性どうし食事をするときには割り勘で出すのが一般的だが、男性は一人が全部おごるという文化もある。

3. 韓国の大学生の日常文化

韓国と日本は隣国として相当な部分が似ているがその中でも大学生の文化を中心に調べることで両国の若者達の文化を比べてみる。

①食事配達文化

②校内新聞

③インターネット文化

以下、説明していく。

3.1 食事配達文化

日本にはあまり見当たらない韓国だけの特別な食事配達文化を調べてみる。韓国の大学生は授業が続いていて食事をする時間があまりないとき、授業が終わる時間に合わせて食事を配達させておく。ほとんどの食事が配達できて学生たちは便利に利用する。

3.2 校内新聞

月曜日ごとに発刊され、無料で配られる大学新聞は大学生活を送ることに必要なチップや、芸能人のインタビュー及びインターンの案内などを扱っている。

3.3 インターネット文化

今韓国で盛るあがっているミニホームページについて調べてみる。

ほとんどの大学生がやっているミニホームページの中で一番有名なのが「サイワールド」で、自分の日常的な姿を撮った写真や文などを扱っている。大部分の学生たちは暇な時間に校内のインターネット室を利用して自分のホームページを飾る。

4. 遊び文化

①韓国の大学生の合コン

②韓国の大学の文化祭

③韓国の大学生のお酒文化

以下、説明していく。

4.1 韓国の大学生の合コン

高校の時は勉強等で自由な恋愛ができないと思われる。そこで大学にはいるとみんな色々な方法で自分の恋愛相手を探す。ここでは韓国の大学生が良くする方法を2つ、合コンと紹介について説明したいと思う。

4.1.1 合コン

3対3、4対4の団体で行われる。みんなでお酒を飲みながらゲームをして楽しい時間を過ごす。本当に自分の恋愛相手を探すというよりただ楽しい時間を過ごすのにもっと大きい意味を持つ。たまにここであって付き合ったりすることもあるが、大体友だちの範囲を越えない。

4.1.2 紹介

1対1で行われる。合コンよりは自分の恋愛相手を探したいという意味が強いので二人で話しながらかお互いのことを知っていく。もしこの二人がうまく行けば、紹介してくれた人にお礼として傲るのが慣例である。

4.2 韓国の大学の文化祭

韓国の大学では1年に1回文化祭を開く。学生たちが全てを自分の力で準備して一緒に楽しむ文化祭、その特性と楽しい様子を紹介したい。

4.2.1 酒店

学科、又は部活で酒店を開く。お酒はもちろん、学生自身がおつまみを準備することが一番の楽しめる場所である。金銭的に少し高い感じもするが、友だち同士でお互いに売り上げを助けるために飲みに行くのが慣例である。

4.2.2 ゲーム。

人の顔に水の入った風船を投げるゲーム、ボーリングみたいにボールでピンを倒すゲームな

ど色々なゲームを準備する。安い値段で楽しめるこのゲームはお昼の楽しみになっている。

4.2.3 コンサート

ゲームがお昼の楽しみなら、コンサートは夜の楽しみである。学校のバンド部や演劇部が準備した公演も見られるし、歌手を呼んで芸能人を直接見ることもできる。文化祭の花と言えるほど一番盛り上がる。

4.3 韓国の大学生のお酒文化

高校を卒業して大学に入るということは年齢的に一人前の大人になった意味でもある。大人になってまず法律的に許されることがお酒だ。そのためか、大学にはいるとお酒を飲む機会が多くなる。歓迎会等で色々お酒を飲まなければならない状況にあうことがある。私はここで韓国の大学生のお酒文化について良いと思われることから改善した方がよいと思われることなどを説明したいと思う。

4.3.1 最初みんなで一気に一杯

最初はお酒をよく飲める人かそうでない人か関係なくみんな一緒に一気にお酒を飲むのが慣例である。

4.3.2 ゲーム、そして罰酒

お酒を場で抜けられないのがこのゲーム。本当に色々な種類のゲームがある。そして負けた人は罰としてお酒を飲む。

4.3.3 代わりに飲む

だれかが罰等で飲まなければならない時にはだれかが代わりに飲んであげる。大体、異性が飲んであげる。そのとき、そのお酒を代わりに飲んでもらった人は飲んでくれた人のお願いを一つ叶えてあげないといけない。

4.3.4 混ぜて飲む

これはかなりお酒の強い人たちが早く酔って盛り上がった雰囲気にするための方法で、2つ以上のお酒を混ぜて飲むこと。

5. 考察

以上、韓国の大学生文化について説明してきた。個人差は人それぞれだと思うが、私たちが思う大学生の遊びを中心に調べた結果である。男女中での差もおもしろく感じられた。勉強やバイト等でたまるストレスをお金で何かを買ったり、出会いの機会と異性との会話を楽しんだり、お酒を飲んだりして解消するのはいいと思うが、それがただの一瞬の快樂だけを求めているだけではいけないと思う一方、これは若者の特権ではないかとも思う。

<実習について>

実習の目的：日韓の大学生の生活を体験してみる。

4日 14:00-19:00 渋谷に見学に行く

19:30-21:00 居酒屋に行って日本のお酒文化を体験してみる。

5日 報告会準備

日本の大学生の遊びと文化

－雑誌から－

浦野希美・嘉指久美子（お茶の水女子大）

1. はじめに

日本の大学生は、一体どんなことに興味を抱いているのだろうか。

日本では、多くの大学生が日常的に雑誌を読んでいる。それらの雑誌には、現役大学生の実際の声が多く掲載されている。また編集する側は、より多くの読者を獲得するためにも、読者の興味のある内容をより多く盛り込もうとしているだろう。つまり雑誌を見れば、今、大学生がどんなことに興味を持っているのかが見えてくるのではないだろうか。よって私たちは、雑誌を見ることによって大学生が興味のある生活や遊びを見ていくことにする。

2. 日本の雑誌

全体としては、男性誌・女性誌ともに実利的な異性受け（「モテ」と称される）するファッションを重視する傾向が強まっている。（参考：フリー百貨事典『ウィキペディア（Wikipedia）』）実際に雑誌の目次を見てみると、「モテ服」「モテ顔メイク」「モテ可愛ヘア」などをキーワードとして特集が組まれている様子が見られた。

3. 参考統計と研究対象雑誌

具体的にどの雑誌を中心に研究するかを決定する際に、東京 FM が行う『若者ライフスタイル分析』の「2004 - 2005 年メディア関連購読雑誌 女子大学生部門」から、以下のランキング結果を参考にした。

1 位: non-no

1 位: CanCam

3 位: MORE

この統計をもとに、研究対象雑誌を「non-no」「mina」「MORE」「With」「CanCam」の5冊に定める。なお、「mina」「With」はそれぞれ「non-no」「MORE」と同系であると判断した。

4. 雑誌別紹介

以下、フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』より抜粋。

・ non-no

時代、時代によって編集方針はその都度、若干変えられてきたが 2005 年頃より、大学生から少し上の年齢層もターゲットにするようになったらしい。

（注:我々が見たところ、カジュアルファッションが中心で、読者層としては、中学生から大学生やそれと同世代の若者までと考えられる。）

・ mina

おしゃれピープルのための、新定番マガジン。自分スタイルが見つかる、ベーシック&カジュアルなファッションテイストを提案。メイクやアクセの最新ニュースはもちろん、インテリアやクッキングの情報も充実！

・ MORE

20代～30代のOLを中心とした女性向けファッション雑誌。

- ・ With

20代～30代女性向けファッション雑誌。『MORE』（集英社）とは同じ世代を対象としており、発行部数も互角となっている。

- ・ CanCam

10代から40代まで幅広い支持を集めている。発行部数は約70万部であり、数ある女性ファッション誌の中でも1位である。

5. 内容分析

これらの雑誌が対象としている読者の系統は様々であるが、内容は似通っている。つまり、読者が興味を持っているテーマは共通しているということである。

以下、テーマ別に見ていく。

5.1 ファッション

どの雑誌にも共通して挙げられるキーワードは、「着まわし」「着やせ」「プチプライス」「街角SNAP」水着や浴衣などの「シーズンもの」である。それに対して、CanCamでは『彼のハートを揺さぶる～』とあるように、男性の視線を気にした特集が組まれている。これは、日本の雑誌に見られる、実利的な異性受けを反映した特集ともいえる。また、モテ特集の他に、ハイブランドの新作を紹介するページも見られた。

5.2 ビューティー

ビューティー面で共通したキーワードは、「ヘアメイク」「コスメ」「ダイエット」である。このキーワード内にも異性受けを気にする部分が見られる。

5.3 ライフスタイル

ライフスタイル欄では、読者のアンケートや体験談をもとに書かれたものが多い。具体的な内容としては『「話せる女のこ」の基礎知識 255』『恋と人間関係のお悩み 100問 100答』といったものだ。人間関係を社会別、恋愛別などシチュエーションに分けて特集している。この場合、読者の意見が女性だけでなく、男性の意見も取り入れている事が多い。

6. 韓国雑誌との比較

そして、私たちは実際に韓国側に研究対象の5冊を見てもらい、日本の雑誌をどのように感じたかを聞いてみた。

6.1 共通点

全体的に見て、雑誌のページ構成などは日韓ともに似ていると言える。その具体例として、雑誌モデルの地位である。日本の雑誌では俳優や女優を表紙にすることもあるが、雑誌モデルがそれぞれの雑誌に専属モデルとして表紙を飾り、雑誌の中で徐々にその地位を確立していき、モデルという枠だけではなくTVや他社の雑誌にモデルとして活躍していくというスタイルは日韓ともに同様だと言える。他にも、雑誌の後半に行くにしたがって、整形やダイエット薬品の広告が多く掲載されていることや、最後のページには占いがあること、こうした共通点があった。

6.2 相違点

だが、特集を詳しく見ていくと、日本雑誌はよりヘア特集が多くて詳しい、コーディネートが多い、読者の参加コーナーが多い、芸能情報が少ない、そして韓国雑誌には雑誌掲載店舗リストがない、といった違いがあった。

6.3 まとめ

日本はティーン雑誌、大学生と OL 雑誌、マダム雑誌など各世代に分かれた雑誌が発行されているのに対し、韓国は雑誌が世代別に細かく分かれていない。唯一分かれているのはティーン雑誌であり、日本の大学生向け雑誌に多く見られるモテ特集を韓国ではティーン雑誌に掲載するようだ。また、日本の雑誌にはライフスタイル欄などでのアニメーションが多く使用されているが、韓国人には幼稚に映る。そして、色彩的にも白と黒などを基調とするため、日本の雑誌はカラフルで見えて面白い、と彼女たちは感想を述べてくれた。モノトーンで落ち着いた韓国の雑誌を見慣れていると、「ageHa」のような日本のギャル向けの雑誌はより珍しく映ったのではないかな。

7. おわりに

今回、日韓の雑誌は全体的に見ても、ページの構成など大きな違いは無いようだ。だが、韓国雑誌に比べ、日本の雑誌は、ライフスタイル欄が多くファッション欄でも場所別、タイプ別といった細かなコーディネートがされている。こういった点から、日本人がどのようなファッションをしているか？だけではなく、一般的にどのようなライフスタイルをしているのか？という事を日本人がとても気にかけている事が分かるのではないかな。韓国の雑誌はコーディネートが少なく、洋服のブランド・値段は掲載されているだけで、洋服もモノトーンなものが多く、ヘアースタイルも奇抜なものはあまり見かけない。これは一見周囲の反応を気にしているように見えるが、日本雑誌では場所を細かく設定することや、読者による読者のための意見を集めたライフスタイル欄が多いことなどから、むしろ日本人が周囲はどのようなファッションを身にまとい、どういったライフスタイルをおくっているか周囲を気にしているといえるだろう。今回日韓のファッション雑誌を比較してみて、日本の雑誌からだけでは分からなかった日本の大学生の興味の所在が分かったのではないかな。

<セミナー参加状況>

- | | | |
|----|-------------|-----------------------------|
| 2日 | 16:00-18:00 | 歓迎会準備 |
| | 18:00-20:00 | 歓迎会参加 |
| 3日 | 10:00-16:00 | 講演会、文化体験に参加 |
| 4日 | 14:00-18:30 | 若者が多く集まる街として、渋谷・原宿を散策 |
| | 18:30-21:30 | 韓国生の希望で居酒屋で夕食。飲み放題や割り勘の文化体験 |
| 5日 | 12:00-22:30 | 報告会準備 |
| 6日 | 9:30-17:00 | 発表会参加 |
| 7日 | 9:00-20:00 | バスツアー、送別会参加 |

韓国人の結婚観について

－男女の認識の差を中心に－

金知恩・金志恵・許召暎（同徳女子大）

1. はじめに

人生の中で結婚は男にとっても女にとっても、大事なことである。結婚をする際は相手の結婚観を知ることが何より重要だと思う。そのために近年の結婚観の変化に注意を向ける必要がある。今回のセミナーを切っ掛けに韓国人の結婚に対する変化のありさまはどのようなものか、また、日本に比べてどのような違いがあるかについて考えていく。

2. 結婚観の変化の背景

結婚観の変化の背景には社会、経済、文化的な要素が複合的に適用されている。社会的に女性の進出が活発になり、これによって経済力が高まった。それからもう結婚は必須条件ではなく、選択条件だと思う文化になったと言える。他にも高い教育の水準や個人の意識の成長、離婚率の増加などが結婚観の変化に影響を及ぼしていると思う。

3. 変化している結婚観

最近、結婚に対する韓国人の考えは昔に比べて一変した。昔は年頃になったら、結婚は当然すべきことと考えられた。しかしこの頃には結婚が必須的なものではなく、選択的なものとなった。また、昔は両親が選んでくれた通り政略結婚をした。ところが、この頃は自分の意志で結婚相手を選ぶことはもちろん、親の反対を押し切って結婚する場合もたくさんある。これは自分の人生において大きな部分の結婚を他人の考えではなく、自分の考えがいちばん重要だという認識が広まっているからだと思う。

このような結婚観の変化によって家庭内での性役割も変わっている。昔の韓国には男尊女卑の思想が家庭にそのまま反映されて妻は夫によく仕えていたが、夫は妻をつまらなく思った。しかし、現代に入って夫と妻がお互いを尊重するようになった。なお、夫と妻の役割が逆になる場合もある。これはこの頃のドラマやシチュエーション・コメディなどでもよく見ることができる。

4. 結婚観の変化による社会現象

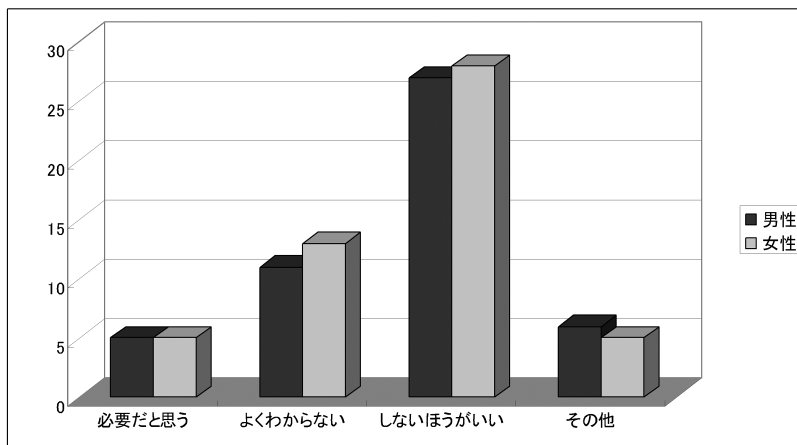
前言のように結婚観の変化には社会・経済・文化などの様々な要素が複雑に繋がっており、時代の変化につれて韓国人の結婚に関する考えも変わっている。結婚観が変わるにつれて様々な社会現象が起こっており、男と女の認識にも違いがあると思われる。

私たちは今年の6月27日に10代から60代以上の男性50名、女性50名、総100名を対象にして結婚観に関するアンケートを行った。アンケートは高校生から大学の教授に至るまで各界各層の方々に協力してもらった。

- (1) 同棲
- (2) 独身

4.1 同棲

最初に結婚観の変化による社会現象に同棲がある。同棲とは、結婚届を出さずに一緒に暮らしている事実上の夫婦関係をいう。

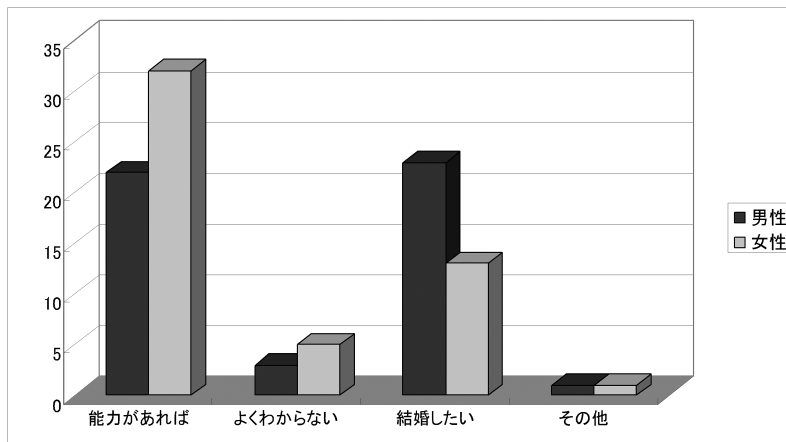


私たちが行ったアンケートの結果によると、大勢の人が同棲について否定的な考えなのがわかる。とくに男性よりも女性の方が同棲について否定的な考えを持っている。

同棲に対して大勢の人が否定的な考えを持っているとはいえ、実際には若者を中心に同棲が広がっている状況である。独身専用のインターネットサイト「ミスーアンドミスターズネット」で今年の2月に同棲生活をしている男女、約200名を対象にして行ったアンケートの結果によると、同棲をしているもっとも大きな理由として「結婚の前にお互いについてもっと理解できること」だと答えた人が多かった。逆に、同棲のいちばん大きな短所としては「結婚意思のないカップルの場合、予想外の妊娠によってむしろ二人の関係が複雑になること」だと答えた人が多かった。

4.2 独身

続いて結婚観の変化によって生まれた社会現象に独身もある。独身という言葉にはいろいろな意味があるが、ここで扱うのは結婚せずに独り暮らしをしている未婚の男女をいう。



このグラフの結果によると、男性より女性の方が独身について肯定的な考えを持っているのがわかる。これは最近女性の社会進出が増えていることと関わりがあると考えられる。

韓国では女性の社会進出もしくは結婚に関する価値観の変化によって、結婚せずに独り暮らしをしている独身者が増えている状況である。最近、韓国には「ゴールドミス (Gold Miss)」という新しい言葉ができた。ゴールドミスとは、大卒以上の学歴で高い給料をもらい、自己啓発の欲求の強い30代半ば以上の未婚の女性をいう。ゴールドミスは豊かな経済力に基づいて新しい文化を創ると同時に消費者であるので、彼女らの影響は出版・旅行・外食・保険などの分野で頭角を現している。

このような流れの中で「シングル・マーケティング」という新しいマーケティングが多くの分野で独身者を目指して行われており、消費の姿も変わっている。全ての家財道具が備えられている独身専用の住宅をはじめ、小型の電気製品や家具、独身者保険などが代表的なシングル・マーケティングである。

5. 配偶者相

私たちは今年の6月27日に10代から60代以上の男女、約100名を対象にして韓国人が望む配偶者相に関するアンケートを行った。10代、20～30代、40代以上の三つに分けた後、各年齢帯の配偶者相の条件ベスト3を調べ、それに相応する芸能人を一緒に考えてみた。

<10代の男女が望む配偶者相ベスト3>

男性	順位	女性
性格	1位	性格
外貌	2位	外貌
職業	3位	年俸

10代が望む配偶者相は10代らしく外貌を重視しているのがわかる。10代の配偶者相に近い韓国の芸能人では10代の男性はドラマ「フル・ハウス」のソ・ンヘギョである。ドラマの中で彼女が引き受けた配役のように男性は小さくて可愛いスタイルで、性格はいつも明るくて自分の主張がしっかり出来る女性が好きだと答えた人が多かった。それから10代の女性はドラマ「私の名前はキム・サンスン」のヒョンビンが引き受けた役割のように、ハンサムな外貌でユーモアもあって彼女のことだけを思ってくれる男性が好きだと答えた人が多かった。

<20～30代の男女が望む配偶者相ベスト3>

男性	順位	女性
性格	1位	性格
外貌	2位	職業
職業	3位	外貌

20～30代の男女は10代に比べて外貌より性格や職業をもっとも重要だと思う人が多かった。

20～30代の配偶者相に近い芸能人では男性は日本でも有名なドラマ「冬のソナタ」の主人公チェ・ジウで、外貌は長いストレートの髪で清純なスタイル、いつも楽天的な性格の女性が好きだと答えた人が多かった。20～30代の女性は最近韓流スターで有名な歌手ビーのように背が高く性格がよくて、自分の仕事に熱心な男性が好きだと答えた人が多かった。

＜40代以上の男女が望む配偶者相ベスト3＞

男性	順位	女性
性格	1位	性格
家柄	2位	職業
職業	3位	家柄

40代以上の男女が望む配偶者相の順位を見ると、10代や20～30代に比べて外貌よりも性格や家柄、職業のような条件を重要だと思う人が多かった。40代以上の男性はドラマ「ジャングムの誓い」のイ・ヨンエのようにしとやかで伝統的な女人相の外貌で、おとなしくて大人を敬う女性が好きだと答えた人が多かった。それから40代以上の女性はドラマ「冬のソナタ」のペ・ヨンジュンのように、優しい印象で多情多感なスタイルの男性が好きだと答えた人が多かった。

6. 考察

今まで韓国人の結婚に関する考えや韓国の男女が望む配偶者相、そして結婚観の変化によって生まれた社会現象を見てきた。時代の変化によって人の考えも変わっていくように、結婚に関する人の考えも時代の流れに影響を受けて変わっていると思う。結婚は人生で大事なことであり、自分の配偶者相や結婚観に対して真剣に考えてみる必要があると思う。

＜参考URL＞

ミスーアンドミスターズネット <http://www.missn.com/>

＜実習について＞

実習の目的：日本の結婚式スポット訪れ、体験する。

- 4日 10:00-11:00 渋谷で買い物
 11:00-15:00 表参道で最近若者に人気のある結婚式場を見学
 食事の後、明治神宮で日本の伝統的な結婚式を見学
 15:00-17:00 原宿でショッピング
 17:00-21:00 川口で花火大会を見る
- 5日 11:00-15:00 代官山で食事した後、ショッピング
 15:00-17:00 お茶の水女子大学で研究発表の準備をする



渋谷にて



明治神宮で結婚式を見学

日本女性の結婚観

佐々木里紗・田村あゆみ・陳敏・横内裕子（お茶の水女子大）

1. はじめに

現在の日本では少子高齢化、パラサイト・シングル、晩婚化などが社会問題となっている。私たちは、このような社会情勢の中で実際に最近の若い女性は結婚することや子どもを持つことについてどう考えているのか、また結婚するとしたらどのような点を重用視するのだろうかという点に関心を持ち、日本の若い女性の結婚観を調べることにした。

調査方法としては、20～39歳の一般女性へのアンケート調査（インターネット調査会社のマクロミル実施、2006年7月）と同内容の質問をお茶大生にも行った。アンケート調査の内容としては、結婚するときに重視するもの、結婚のメリット・デメリット、子どもが欲しいかどうかなどの項目があり、それらの回答を比較・検討した。また、実際に結婚している日本人女性にもインタビューを行った。

2. 結婚観に関するインタビュー

グループのメンバーが討論した結果、私たちは主に結婚する時、日本人女性が何を重視するのかについて調査した。アンケート、文献、雑誌、インターネットを通じて調査をするにしていたが、実際に調査を始めると、アンケート以外に相応しい文献は少なかった。そこで、アンケート調査だけでは足りないと考え、結婚した日本人女性にインタビューを行い、私たちと同年代の女性に対して行なったアンケートと同じ「結婚相手に重視するもの」や「理想の結婚年齢」などの質問以外にも、「主人との出会い」「今家庭内での状況」などについて尋ねることにした。

まず、理想の結婚年齢は、事実婚を主義とするCさん以外は30歳前だったが、実際に調査対象者のうち20代で結婚したのはAさんだけだった。結婚相手に対して重視するものは、結婚する前は「性格」「健康」だと思っていたと答える人が多かった。そして結婚してからは、相手の「向上心」や「生活習慣」と「相手は自分の仕事を支えるかどうか」が大切であるという答えも出てきた。「結婚観」についていえば、インタビューした4人と、その周りの女性たちの中には「婚姻は女性にとって一番重要なことで、結婚してから専業主婦になるべきだ」というような伝統的な考え方を持つ人もいる一方、結婚が必ずしも必要なものと考えない人もいるという。一番多かったのは、夫婦が、経済面でも精神面でもお互いを支える関係が良いと考える人だった。そしてこの「結婚観」は、人の体験や周りの環境によって変わりうるようだ。

このインタビューをやって、「結婚観」とは未婚である人たちの結婚、家庭に対する観念であって、本当の結婚や家庭生活はもっと複雑なものだということを痛感した。

3. 結婚で重視すること

私たちは、20～39歳の一般女性へのアンケート（インターネット調査会社のマクロミル実施、2006年7月）と同じ質問をお茶大生にも行い、両者の比較を通して現代の若い女性の結婚観について考察した。項目は以下のグラフ（図1）の通りであり、数字は「非常に重視する」「重視する」の合計である。

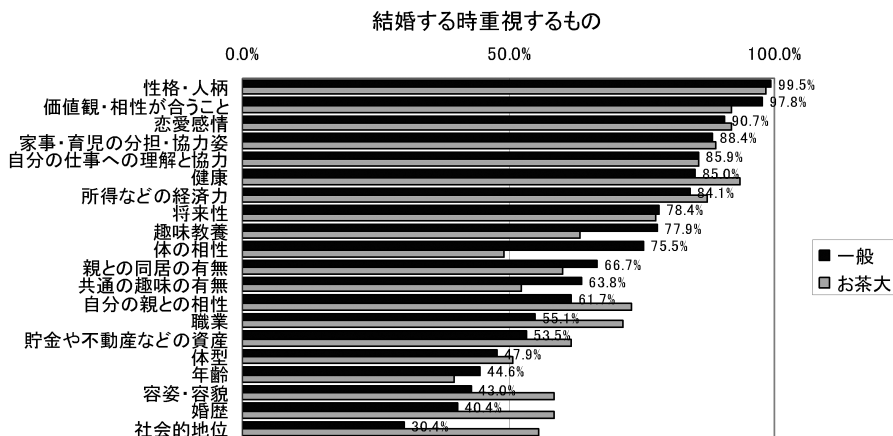


図 1

3.1 お茶大生の傾向

まず、一般女性とお茶大生の重視度の差が大きかったものを挙げ、お茶大生の傾向について考える。重視度の差が大きかったものとしては、「体の相性」「社会的地位」「婚歴」「職業」「容姿・容貌」が挙げられ、「体の相性」以外の4つはお茶大生の方がより重視するという結果になった¹。このアンケート結果からお茶大生の特色として、一般の若い女性に比べ、社会的地位や婚歴、職業など社会的ステータスを気にする傾向が見受けられた。

3.2 現代の若い女性の結婚観

続いて、結婚するとき重視するものの上位5つを取り上げ、現代の女性が結婚で重視するものを調べていく。上位5つはそれぞれ1位から順に、一般女性は「性格・人柄」「価値観・相性が合うこと」「恋愛感情」「家事・育児の分担・協力姿勢」「自分の仕事への理解と協力」、お茶大生は「性格・人柄」「健康」「価値観・相性が合うこと」「恋愛感情」「家事・育児の分担・協力姿勢」という結果になった。さらにアンケート調査では、結婚相手に求める条件として両者とも「性格・人柄」「価値観・相性が合うこと」「恋愛感情」が9割を超える高い結果となった。そして、結婚相手に求める条件は「経済力」よりも「家事・育児への協力」「仕事への理解」の方が高い順位になった。

このことから、現代の若い女性は結婚に「社会的」「経済的」「実利的」なメリットを求めるより、「精神的」「情緒的」なメリットを希求していることがわかる。つまり、結婚で重視することの上位は一般の若い女性とお茶大生でほぼ同じ結果になり、結婚の条件としては精神面でのメリットをより重要視する傾向があるといえる。

3.3 ミスマッチな現状

上記で記したように、女性は経済面よりも精神面での理解を求める傾向があることがわかったが、ここでは男性も同じように考えているのかどうかを考えていく。

25～29歳の男性に対して行われたアンケート調査（With 6月号 p.170 参照）によると、男性が結婚相手に求めるものの上位には「リラックスできる」「家庭的」「価値観が合う」「明るい」

¹ 但し、「体の相性」については無回答も多く、あまり信頼できる数字ではないので参考程度に留める。

「愛情を表現してくれる」「ルックスがいい」「仕事に理解がある」などが挙げられ、価値観が合うといった要素が重要視されていることがわかる。

このように、男女の結婚相手に重視することの上位には男女ともに共通して「性格・パーソナリティ」と「価値観・相性」に関するものが挙がっている。逆に、男女の結婚相手に重視することが大きく食い違うのは、男性が求める「容姿・容貌」と女性が求める「相手の収入・経済力」についてである。女性の傾向として精神面でのメリットをより重要視するのは事実であるが、経済面を全く気にしないわけではなく、結婚の時に重視するものについてのアンケート調査でも約85%の人が経済面も重視すると答えている。つまり、精神面での理解の他に、女性は安定した家庭生活を維持するのに必要な男性の所得水準や経済力も求める傾向があるといえる。しかしこの傾向は、現在の日本の男性は1人で妻・子どもを余裕で養えるほどの収入のある人が少ないため、「経済面が心配で結婚しにくい」「自分で稼いで好きなように使える方が裕福に暮らせる」「少ないお金で子どもを育てるのは大変」などと女性が考えることにも繋がり、現在日本で社会問題になっている少子化、晩婚化、パラサイト・シングルなどの問題にも関わっている。

4. 結婚のメリット・デメリット

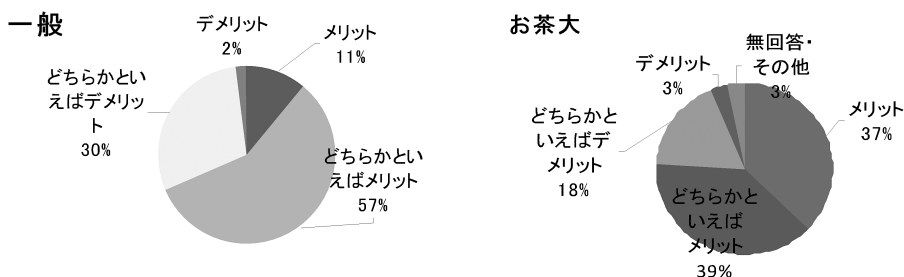


図 2

結婚に関するメリットとデメリットについて、20～39歳の一般女性へのアンケートとお茶大生に行なったアンケートを比較した。「メリット」「どちらかといえばメリット」と答えた人は、一般女性で合わせて68%、お茶大生では76%であった。一方、「どちらかといえばデメリット」「デメリット」と答えた人は一般女性で32%、お茶大生で21%であった。

4.1 結婚のメリット

結婚に対する意識に対して調査したところ、結婚をメリットと考える女性が約7割いた。これは、一般女性・お茶大生ともにいえる結果であった(参照 図2)。

結婚をメリットと考える理由となっているもので、一番多くあげられたものが、「身内や家族が増える」ことであった。この、家族が増えるという理由には子どもができる、安心感が生まれる、収入が増えるなども含まれていた。次に挙げられたのが、「幸せ感」である。愛する人とずっと一緒にいられる、支えてくれる人ができるという幸福感が結婚をメリットと考えるようだ。

私たちは、実際に結婚した女性から結婚前に考えていたメリットと結婚後に気づいたメリットについて聞いてみた。結婚前に考えていたメリットは、アンケートと同じような「毎日一緒にいられる」、「いつでも相手に会える」、「経済的余裕」などがあつた。他にも、「親から独立で

きる」、「妻というポジションへの憧れ」、「相手との生活拠点が一つになる」などがある。そして、結婚後に気づいたメリットについてはやはりアンケートでは見られなかったものが多かった。例えば、「社会的信用が得られる」、「子ども好きになれる」、「生活リズムができる」、「家族があるという意識の改善」、「親のありがたみを知る」などだ。

4.2 結婚のデメリット

次に、デメリットのほうが大きいと感じる理由を見てみる。

まず一般女性、お茶大生ともに挙げられた理由としては、「仕事へ支障が出る」「行動や時間的な束縛があったり、自由時間が減る」「生活などを相手に合わせなければならない」などであった。また、一般女性に多かったのは「家事の負担が大変」「お金、時間、物の考え方などが自分の思う通りにならない」「今の生活が十分快適だから」で、お茶大生の主な意見としては、「生活水準が下がる」「責任が求められる」「ストレスがたまる」「苗字が変わるのが嫌」などがあり、一生結婚したくないという人の中には、「他人の家族と一緒にいる感覚が理解できない」という人もいた。

ではなぜ、結婚に対してこのように感じる人がいるのだろうか。実際に結婚した女性たちの現状を見てみたいと思う。川橋（1998）によれば、日本の女性が一日の中で家事をする時間の平均は、女性が4時間19分なのに対し、男性は36分で、女性が家事をするほうが圧倒的に多いことが分かる。また、厚生労働省（2004）によれば、働く女性の割合が、30～34歳、つまり女性がちょうど結婚や出産をする頃、25～29歳の74%から12.6ポイントも下がった61.4%となっていることは、結婚や出産をした女性が仕事を続けにくくなっていることを表している。

4.3 結婚のタイミング

人が結婚に踏み切るには、ある程度のタイミングが重要である。そこで、結婚をするタイミングについて調査した。一番スタンダードといわれるのは、もちろんお互いが結婚を望んでいるときである。仕事上である立場についてときや、やはり子どもができたときも、結婚へ踏み切るタイミングであるという。他にはどちらかが転勤になったときや、実家から独立したとき、あるいは引越したときであるという。これまでの傾向としては、「できちゃった婚」という、子どもができたから結婚というカップルが多かった。しかし近年では、互いに結婚へ踏み切れずなんとなく結婚しないままにいるカップルにみられる傾向として、子どもができたから結婚という「できたら婚」が多く見受けられるという。

5. 日本の子ども事情

子どもが欲しいと思うかどうかの質問には、欲しいと答えた人が一般女性で75%、お茶大生で87%とかなり高く、どちらも8割前後の人が、子どもが欲しいと思っているようだ。

子どもを欲しいと答えた人に、いつまでに産みたいかと訪ねたところ、子どもは30歳～35歳までに産みたいと言う人が多く、特にお茶大生は30歳、一般女性は35歳が飛びぬけて多くなっている。だが、40歳を過ぎても産もうという人もいて、人によって様々な価値観があることが分かる。

一方で、子どもを欲しくない人に理由をきいたところ、一般女性では「子どもを育てる自信がない」「現在の社会状況の中で子どもを育てることが不安」「仕事と子育てを両立するのが困難」など、子育てに対して不安を感じている人が多い。一方、お茶大生では「仕事と子育てを両立するのが困難」「子どもが好きではない」「子育てにお金がかかる」など、自分の感情や生活に基づいて考えている人が多いことが感じられる。

ここで、子育て夫婦の実際を見てみる。内閣府（2005）によれば、子育てにかかる費用は、

1人あたり平均で約1300万円だという。そして、子どもがいる夫婦は映画やスポーツ、旅行などの娯楽に時間をかけにくく、特に2人とも仕事をしている夫婦は、子育てと仕事で自由な時間が持てない「時間貧乏」の状態に陥っていることなども、子どもを持つことをためらう原因となっているようだ。

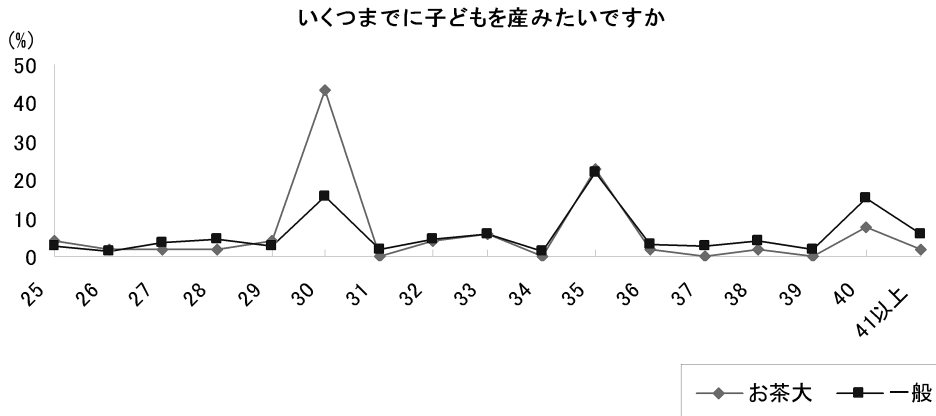


図 3

6. 結婚したいタレント

最後に、結婚したいと思うタレントについて調べた（オリコンモニターリサーチ参照、2007年5月に20代と30代の男女各200人ずつ、合計800人に実施）。

結婚したいと思うタレントについて調べたのは、上位に選ばれたタレントが、現代の若者の結婚観を反映していると考えられるからである。20代の男性に聞いた結婚したいと思う女性タレントは1位からそれぞれ長澤まさみ、眞鍋かをり、相武紗季であった。これらの女性が選ばれた理由としては、「さわやかさ」「人柄のよさ」に惹かれるといったものが多く、これは結婚の時に重視するものの1位が「性格・人柄」であることを裏付ける結果であるといえる。続いて、20代の女性に聞いた結婚したいと思う男性タレントは1位からそれぞれ福山雅治、堂本光一、玉木宏であった。これらの男性が選ばれた理由としては、「飾らないところがいい」「家族を大切にしよう」など内面・外面両面の良さを挙げる意見が多く、ここでも結婚したい理由に「性格・人柄」の要素がみられる。

7. まとめ

一般の若い女性に実施されたアンケート調査と同内容のアンケートをお茶大生にも実施し、比較することによって、経済的要素は女性が結婚のメリット・デメリット、子どもが欲しいかどうかなどを考える際の重要な指標であるということがわかった。しかしアンケートのデータや私たちの調査から、現代の若い女性の結婚観として、経済的要素以上に「性格・人柄」「価値観・相性が合うこと」を重要視する傾向があるという結論に達した。

<参考文献>

インターネット調査会社マクロミル『公開調査データ 未婚女性1000人に聞いた結婚観』
http://www.macromill.com/client/r_data/20060803marry/index.html

吉岡久美子編,2007,『with 6月号』講談社,170-171

厚生労働省『平成 13 年版 働く女性の実情』

<http://www.hakusyō.mhlw.go.jp/wpdocs/hpwj200101/b0024.html>

川橋幸子著,1998,『わかりやすい男女共同参画政策と女性のエンパワーメント』労働教育センター

内閣府国民生活局『国民生活白書 平成 17 年版 子育て世代の意識と生活』

http://www5.cao.go.jp/seikatsu/whitepaper/h17/10_pdf/03_youshi/pdf/yo500.pdf

eltha oricon beauty & healthy 『発表！2007 年結婚したいと思うタレントランキング』

<http://beauty.oricon.co.jp/news/45376/#rk>

ORICON STYLE 『ウェディングソング特集』

http://www.oricon.co.jp/music/special/070606_01.html

<セミナー参加状況>

- 2日 16:00-18:00 歓迎会準備
- 18:00-20:00 歓迎会参加
- 3日 9:30-16:00 講演会、文化体験に参加
- 4日 10:30-12:00 渋谷で集合した後、電車で表参道へ。表参道を散策
- 12:00-13:00 表参道ヒルズ近くの新潟名産店内のレストランでそばを体験
- 13:00-14:00 結婚式場、表参道ヒルズを見学
- 14:30-16:00 明治神宮および敷地内の結婚総合案内所を見学
- 16:00-17:00 原宿、竹下通りを見学
- 17:00-21:00 川口市内へ移動。荒川の河原で花火大会を見る
- 5日 11:00-14:00 代官山を見学
- 14:30-18:00 報告会準備
- 6日 9:30-17:00 発表会参加
- 7日 9:00-20:00 バスツアー、送別会参加



明治神宮結婚総合案内所前にて

韓国の伝統文化－タルとタルチュムについて－

權頌恩・金義暎・羅香善・李善英（同徳女子大）

1. はじめに

ある国を分かり合うためにはその国の伝統文化を知るべきだ。私たちはタルとタルチュムを通じて韓国の伝統文化を紹介したいと思う。タルとタルチュムは韓国の伝統文化の中でも庶民的で、諧謔的だ。タルとタルチュムを通じて韓国の文化を知り、国民性を調べてみよう。そしてタルとタルチュムと似ている日本の文化を調べてみよう。

2. タル

- (1) タルの意味
- (2) タルの機能
- (3) タルの特徴
- (4) タルの分類

2.1 タルの意味

タルは漢字で仮面と書いてその意味は「偽りの顔」という意味である。タルにはもう一つの意味があるが、それは「突然起きた悪いこと」や、「病」などの意味である。この二つ目の意味のせいか昔から人々はタルを身の周りに置いておくことを避けてきた。村の守護神であるタルを村から離れた場所に安置しておいたり、タルで遊んだ後には必ずタルを燃やしてきた。

2.2 タルの機能

タルにはいろいろな機能がある。それは仮装、護身、呪術の機能である。タルはただ自分の顔を隠すためのものではなく、人や動物、また神を表す仮装の機能がある。そして自分の命を守るための護身の機能がある。タルのもっとも重要な機能は呪術的機能である。昔から人々はタルには不思議な力が秘めていると信じタルを通して人間自ら解決できなかったことを解決してみようと思ったのである。例えば、悪鬼を追い払うため、病を完治させるためにタルを利用してきたのである。

2.3 タルの特徴

韓国のタルの特徴を一言で言えば滑稽と言える。韓国のタルは普通笑っている顔をしているのでより人間的な感じがして面白い。特に芸能に使われるタルには人の特徴が歪めて表現されていたり、誇張して表現されているのでとても面白い。

2.4 タルの分類

タルはその機能や目的によっていろいろと分類されるが、韓国では普通信仰タルと演劇タルに分類される。信仰タルはさらに神聖タルと驅難（グナ）タルに分けられる。神聖タルは特定の場所に安置しておいて祭るためのタルで、驅難（グナ）タルは悪鬼を追い払うために使われたタルのことである。芸能タルもまた演劇タルや、舞踊タルに分けられる。これらは文字通り演劇や舞踊の時使われたタルのことである。

3. 面の由来、歴史

仮面を使ったのは原始時代からだと思われる。最初は原始人たちが動物に近づくための偽装面だった。その後には死んだ動物の靈魂を慰めたり、その呪術力を体を持つための呪術的

な目的からしだいに宗教的な意識として発展した。韓国の仮面の始めは新石器時代だと思われる。仮面の形を備えた最初の遺物は新羅時代の「木心漆面」だと思われる。6世紀頃のものだと推定されているこの面は死んだ人を守るための物であって、古代の新羅時代から葬式の時に使われた。韓国の面の紀元は少なくとも三国時代からずっと前だと思われる。朝鮮後期に入る時には庶民意識の向上とともにヤンバン社会に対する批判が一層強調されている。

- (1) 百濟
- (2) 新羅
- (3) 朝鮮

3.1 百濟

百濟時代のタルの遺産は韓国より日本の方に多く残っている。つまり、この時代に百濟のタル文化が日本に伝えられたと思われる。日本の伎樂はおどけた踊りと身振りで演出し、漫談がない面遊びの形だ。これは韓国で傳承されている山臺遊びと同じ系統だと思われる。

3.2 新羅

新羅樂は中国の影響を受けたと思われる。代表的な物は劍舞、處容歌五伎などがある。劍舞は単純な劍術妙技にとどまらず、タルをかぶって、演劇する、面遊だ。そして、新羅時代に伝えられた處容説話から始まった處容舞は韓国の土着信仰と関連がある話を含めている。新羅の人達は處容の形象を作って、大門の上に掛けて悪いお化けを追い出したと言う。この様に處容タルは信仰的な物として、重んじることになった。

3.3 朝鮮

朝鮮時代にはだんだん宗教的な意味がうすくなった。朝鮮時代の山臺遊びの廣大たちは彼らが住んでいる所を中心として、いくつかの遊び仲間をつくったんですが、これは今まで傳承されている。新羅時代の處容舞は最初は赤いタルと黒い服を着て踊ったが、その後には中国の影響を受けて変化し、歌舞劇化になったと思われる。この様に處容舞は朝鮮時代に入っても表的な仮面踊りだった。

4. タルチュム

- (1) タルチュムとは
- (2) タルチュムの特徴
- (3) タルチュムの分類

4.1 タルチュムとは

タルチュムとはタルをかぶって行う韓国の伝統舞踊である。韓国人でもタルチュムといったら朝鮮時代の庶民の文化だと思い浮かぶ人が多いと思うが、その始まりは原始時代の宗教儀式と関わっている。原始時代のタルチュムは神に祈ることが目的の宗教儀式であったが、時代の変化によって朝鮮時代には民俗舞踊として芸術活動に使われるようになった。こういうタルチュムの内容は庶民達の現実的な生活において感じている反抗意識や当時の特権階級に対する批判などが多い。

4.2 タルチュムの特徴

タルチュムの特徴は簡単に三つにまとめられる。

まず、タルチュムは庶民の生活に関する内容が多いので、心理的葛藤や感情の変化、状況などを現実的に描いている。

それから、タルチュムに使われる音楽は劇中に効果的に使われている。音楽を通して人々の喜び、悲しみなどの感情を表していて劇の完成度を高めている。

最後に観客との距離が近く、観客もタルチュムに参加したりする。公演が終わってからは役者と観客がいっしょに踊りながらみんなひとつになる。これはまた、共同体内部の結束をかためることになる。

4.3 タルチュムの分類

まず、山臺都監劇(サンデドガムグック)とって、朝鮮の宮中の山臺(サンデ)という舞台上演されたことから由来するタルチュムがあるが、これは娯楽中心の民俗劇に変わってきた。よく知られているのは韓国で大ヒットした映画「王の男」にも鳳山(ボンサン)タルチュムなどがある。主な内容は庶民の苦情、権力階級に対する批判の内容が多い。

次は、民俗劇としてのタルチュムであるが、これは町の宗教儀式、通過儀礼と深く関わっている。安洞(アンドン)地方に伝わる河回別神(ハフェビョルシン)グッタルノリなどは一般にもよく知られている。

最後に五広大(オグァンデ)とって、五人のグァンデという役者がタルをかぶって踊るタルチュムである。五人の役者が出て公演は普通、5幕に構成されているので、五広大(オグァンデ)という。これはまた地域によって分類されているので、五広大(オグァンデ)といっても地域によって地域色を出しているのが特徴である。

5. 「タルマダン」見学

このたびは「タル」と「タルチュム」についての発表を前にして、「タルマダン」と言う所を見学に行ってきた。

- (1) 「タルマダン」紹介
- (2) 見学内容
- (3) 見学感想

5.1 「タルマダン」紹介

「マダン」とは、何かをもよおす場所と言う意味だ。「タルマダン」は、おじさんが一人で「タル」を作っている所だった。それから、おじさんの奥さんは飲食店をしていて、そのお店にはおじさんがつくられたタルが沢山おいてあった。

5.2 見学内容

作業室に行ってみた。そこは本当に小さい空間で何とも言えない雰囲気で包まれていた。木の臭いと、暖かい日差しによって神秘的な雰囲気を醸し出していた。私たちは作業台に座ってみたり、タルをつけてみたりした。

タルの磁石など、タルに関した物を作って売っていました。

5.3 見学感想

私達が訪ねた所の方は今は「タル」を作ってもあまりお金にはならない、でも自分の手でいろいろな顔をしている「タル」を作ることを心から誇りに思っていると言っていた。そしてその「タル」を被った人々の「タルチュム」を見る時には限りなく幸せだと言っていた。

メディアを通してしか見るのでできなかったタルを直接さわって、見ることできたい機会だった。特に、作業室が印象深く、いつも出来上がった姿だけを見ていた伝統の違う一面を見ることができた。

6. 考察

タルは他の伝統文化みたいにたくさんの遺産を持っていながら現在ちゃんと伝承されていない。タルチュムを演じる人々も伝授教育を通してやっと今まで受け継がれている。タルとタル

チュムの原型だけにこだわってはいけない。急激に変わっていく時代とリズムに合わせて変化していくべきだ。

<参考文献>

参考サイト：<http://myhome.naver.com/greenwinter/>

<実習について>

実習の目的：日本の伝統文化を経験する。

4日 13:00-18:00 銀座のあちこちを見学

18:00-12:00 歌舞伎座で「あまてらす」という公演を観覧

5日 18:00-21:00 浴衣を着て祭りを体験



歌舞伎座にて

日本の伝統音楽について

吉野まゆみ・上田彩子（お茶の水女子大）

1. はじめに

音楽の文化を持たない民族はいない。それほど音楽は人間生活に欠かせないものであり、それ故その土地固有の文化が大いに表れている。今回は日本の伝統的な音楽はどのようなものであるかを実演も交えつつ韓国側に紹介し、また体験も取り入れることで、机上ではなく肌で日韓文化の相互理解を深めていくことができたらと思う。

2. 日本の伝統音楽

2.1 邦楽

古代、大和朝廷より室町時代前期の千年間に現れ、様々なジャンルが相互に交じり合うことで多くの邦楽が形成された。この期間に生まれた音楽は現代まで継承されているものも多い。

2.2 邦楽のジャンル

2.2.1 雅楽

本来は祭祀用楽舞を指したが、後には饗宴用雅楽も含めての宮廷の楽舞の総称。国風歌舞（くぶりのうたまい）、外来楽舞、歌物（うたいもの）に大別される。

国風歌舞 日本古来の皇室系・神道系の祭祀用歌舞。神楽（かぐら）、東遊（あずまあそび）、久米舞（くめまい）などがある。

外来楽舞 唐楽（とうがく）、高麗楽（こまがく）から成る宮廷の饗宴用楽舞で、平安初期までに伝来した楽舞に基づく。狭義の雅楽は外来歌舞を指す。

歌物 平安中期ごろの成立の饗宴用の声楽曲。催馬楽（さいばら）と朗詠（ろうえい）。

2.2.2 能楽

能と狂言との総称。能とは平安時代以来の猿楽から発展した歌舞劇である。猿楽とは平安時代の芸能で、滑稽な物まねや言葉芸などを相撲御覧の際などに演じた。それに対して狂言は猿楽本来の笑いを主とする演技のことであり、両者は同じ猿楽の演目として併演されてきたが、明治になって猿楽の名称が好まれなくなり能楽の名に置き換えられた。

2.2.3 仏教音楽

仏教で用いられる音楽。僧の唱える声名（しょうみょう）がその中心だが、他に一般信者の唱える御詠歌・念仏や、儀式に添える管弦・舞楽などがある。

2.2.4 浄瑠璃

室町時代末期に始まった三味線伴奏の語り物音楽の一つ。初めは無伴奏で語られた「浄瑠璃姫物語」が広まり、他の物語を同じ様式で語るものも浄瑠璃と呼ぶようになった。江戸時代の直前、三味線が伴奏楽器として定着し、同じころに人形芝居や、のちには歌舞伎とも結合。江戸時代初期以降、上方でも江戸でも庶民的娯楽として流行した。

2.2.5 唄もの

歌を主体とした曲。語り物や器楽音楽に対していう。盲人音楽家が専門的に創作、伝承した三味線歌である地歌（地唄）等がある。琴と合奏することが多いため琴曲とも呼ばれる。

2.2.6 俗曲・民謡

三味線などに合わせて歌う通俗的な歌曲を俗曲という。民謡とは、庶民の集団生活の場で生

まれた民衆の歌曲のことであり、生活感情や地域性などを反映している。

2.2.7 吟詠

詩歌をつくり、それを声に出して歌ったもの。

2.2.8 その他

祭礼音楽や落語の出囃子などがある。

2.3 邦楽において使われる主な和楽器

次に、邦楽においてよく使われる楽器を紹介する。尚、琴については3で詳しく触れるため、ここでは省略する。

2.3.1 尺八

長さ一尺八寸（約54.5センチメートル）を標準とする簧（した）のない竹製の縦笛。簧とは楽器に装置する板状の薄片で、それを振動させることによって音を発する。

いずれも指孔は前面四孔、背面一孔。指面の半開などにより、音の高さを微妙に変化させる。

2.3.2 三味線

日本の弦楽器の一つ。棹の長さは三尺二寸（約97センチメートル）前後のものが一般的である。胴は少し膨らみのある四角形で、桑などで作られ、その両面に猫（または犬）の皮を張る。棹の下端部は胴を貫き、先端の中子先（なかごさき）と呼ばれる部分に根緒をかける。上部は乳袋（ちぶくら）を経て上駒（かみごま）に至り、その頭部に海老尾を設ける。三弦で、一の糸は太くて調低く、三の糸は細くて調高い。二の糸はその中間。胴皮と糸との間に駒を挿み、左手指先で棹上の勘所を弦で押さえて音高を決め、右手に持った撥（ばち）でならず。棹の太さや駒や撥の種類によって音色や音量にかなりの差が生じる。

2.3.3 胡弓

三味線をやや小型化した形で全長約70センチメートル。中子先が長く、駒を胴の上方にかけると点が三味線と異なる。

2.3.4 一弦琴（いちげんきん）

長さ三尺六寸（約1.1メートル）の桐、杉材などの胴に一本の弦を張った琴。

2.3.5 二弦琴（にげんきん）

二弦を張った琴の総称。八雲琴（やぐもごと）および東流（あずまりゅう）二弦琴が有名。

2.3.6 琵琶

中国、朝鮮、日本に伝わる弦楽器。木製の胴体の上部に短い頸があり、四弦または五弦、長さは60～106センチメートル。中国、朝鮮では爪で弾くが、日本では主に撥で弾かれる。起源はペルシア、アラビアとされ、インドや中国を経て、奈良時代に日本に伝来した。時代、用法、形状などによっていくつか種類がある。

2.3.7 和太鼓

木製の胴の両面または片面に革を張り、桴（ばち）で打ち鳴らす打楽器。猿楽や歌舞伎囃子で多く使われる締太鼓や、能や長唄などで使われる大鼓（おおづつみ）、小鼓（こつづみ）など種類が多く、また用途も幅広い。

3. 琴について

今回の発表では上記の和楽器のうち、特に琴に焦点を当てた。琴を選んだ理由はその和的な音に魅力を感じ以前から興味を持っていたため、また大学に箏曲部があり実際に演奏をするにあたり練習や楽器の提供などの協力いただけたためである。では、琴という楽器についてみていく。

3.1 琴

琴には13本の弦(糸)があり、手前側にくるにしたがって高音になる。右下から琴に向かって座り、演奏する。弦は「一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、斗(と)、為(い)、巾(きん)」と呼ぶ。弦にはさみ、弦の音程を調節するものを「柱(じ)」と呼ぶ。現在では象牙のものより、プラスチック製のものが主流になった。琴はギターなどと違い、弦(糸)の太さは全て同じなので、この「柱」を動かすことで糸それぞれの音の高さを変える。「柱」の並びにより「調子」を変えて、さまざまな楽曲に対応する。

3.2 二つの流派

琴には生田流と山田流という二つの流派が存在する。まず、生田流は生田の「田」の字からわかるように四角いツメを使う。楽器に対して少し斜め向きに座り、演奏する。もう一つの山田流は山田の「山」の字からわかるように山形のツメを使う。先が少し丸い。楽器の真正面を向いて座り、演奏する。譜面は、一般にドレミではなく漢数字で表記されている。

3.3 実演と体験

私たちは、先に述べたように箏曲部の協力を得て、日本の代表歌である「さくらさくら」を演奏した。この曲は幕末、江戸で子供用の箏の手ほどき曲として作られたもので、作者不明である。その優美なメロディから明治以降、歌として一般に広まり、現在の歌詞が付けられた。13小節目以降の違いで3通り有る。日本の代表的な歌として国際的な場面で歌われることも多く、一部の論者には「君が代ではなく、この『さくらさくら』を日本の国歌とすべきだ」と言う者もいるほどである。

演奏した後、韓国の4人の方に琴の体験をしてもらった。初めて触れる日本の伝統楽器に、とても興味津々で、楽しそうに弾いてもらえて嬉しかった。

4. 韓国の音楽と日本のリズムの違い

日本、中国、東南アジアには二拍子系リズムが広まった。二拍子系リズムとは一小節または一拍を二分割するリズム系である。これは水田農耕民族の拍節であり、水田を「イチニ、イチニ」と歩くリズムである。日本音楽においては『表間』『裏間』と呼ばれ、裏間をリズム的緊張が支配し、それが表間になったところで弛緩する。

一方、朝鮮半島、モンゴル、中央アジアには三拍子系リズムが広まった。三拍子系リズムとは一小節または一拍を三分割するリズム系のことである。これは遊牧、狩猟、騎馬民族の拍節であり、馬が「パカパッカパッ」と走るリズムを想像すると分かりやすい。このリズムは不安定な躍動感、上下動の拍節で、『強一弱』の動きとして捉えられる。

5. 考察

以上、邦楽のジャンル、和楽器(特に琴)、また日韓のリズム体系の違いについてみてきた。日本にしかない楽器があったり、楽器は共通していても日韓で演奏方法が違ったりと、両国の音楽文化には思っていたよりも多くの差異があった。しばしば日本と韓国は「近くて遠い国」であると言われる。隣国であり、似ている部分も多いが違いも多い。それは音楽文化にも言えることであることがわかり、その似て非なる部分に更なる魅力を感じた。

また、今回こうして調べたことは、韓国の学生に日本の伝統音楽について知ってもらった機会になったと同時に、日頃の生活の中で邦楽を聴く機会のない私たち自身にとっても日本の文化を改めて知るいい機会となった。とりわけ発表において琴を体験することが出来たことは、日本人として素晴らしい経験になったと思う。

最後に、このセミナーで出会うことの出来た韓国のみなさん、そして琴の指導、楽器の提供などをしてくださった箏曲部のみなさんにこの場を借りて感謝の意を表したい。

6. 補足（高麗楽について）

今回の発表では邦楽の紹介、実演、体験に焦点を当てていたため詳しく調べていなかったが、韓国側から高麗楽（こまがく）についての質問が出されたのでここで補足しておく。

高麗楽は外来音楽と呼ばれる雅楽のジャンルの一つで、朝鮮半島の高句麗、百済、新羅の国々、または渤海より伝えられた音楽、またはそれを模倣して作曲、作舞された音楽を指す。現在残されている高麗楽の絃譜を見る限り、これらは管絃演奏のものではなく舞楽のリズムで演奏される管絃舞楽という演奏形態で用いられるものである。

使用する楽器は、箏・高麗笛の管楽器と、鉦鼓・三ノ鼓・楽太鼓の打ち物楽器で、唐楽で使用する龍笛や、笙、鞆鼓は使用しない。また舞楽の装束は、色は緑色、金具は銀色で統一され、二巴をシンボルとしている。

<参考文献>

藤井知昭 他 (2006)『民族音楽概論』東京書籍

<参考 URL>

日本の伝統音楽 <http://jtrad.columbia.jp/>

雅楽的音楽研究書 <http://gagaku.blog.ocn.ne.jp/>

<セミナー参加状況>

- | | | |
|----|-------------|------------------------------------------------------------------------------|
| 2日 | 16:00-18:00 | 国際学生宿舎にて歓迎会準備 |
| | 18:00-20:00 | 歓迎会参加 |
| 3日 | 9:30-16:00 | 準備、講演会、文化体験に参加 |
| 4日 | 10:30-12:30 | 東銀座集合。デザートを中心とする食べ放題を体験 |
| | 13:00-13:30 | 歌舞伎座にて夜の公演の当日券を購入 |
| | 13:30-15:00 | 銀座散策。有名百貨店にて浴衣等を見た後、日本土産を購入 |
| | 15:30-17:30 | 神田神保町古本街を見学、古本購入。レストランにて夕食 |
| | 18:00-20:30 | 歌舞伎座に戻り、『AMATERASU(アマテラス) 出演：坂東玉三郎、鼓童』を鑑賞。今回の日本側のテーマである音楽と韓国側のテーマである面についての実習 |
| 5日 | 10:00-13:00 | 報告会準備 |
| | 13:00- | 韓国側報告会準備 |
| | 18:00-21:00 | 自習4のみのメンバー（篠崎・磯部）と韓国側で、浴衣を着て埼玉県朝霞市の夏祭りに参加。日本の祭りの文化を体験 |
| 6日 | 9:30-17:00 | 発表会参加 |
| | 18:00-19:30 | 若者の街、原宿を見学。古本店にて古本（日本の漫画）の購入や、クレープを食べるなど日本文化を体験 |
| | 19:30-20:30 | 日本の居酒屋を体験 |
| 7日 | 9:00-20:00 | バスツアー、送別会参加 |

韓国のドラマが持つ特徴

鄭詠喜・李知恩・李漢暎・張承喜（同徳女子大）

1. はじめに

数年前から「韓流」としてアジアの多くの国に韓国のドラマが紹介されている。日本でも40～50代の女性を中心に「冬のソナタ」が大ヒットし、韓国のドラマに対する関心が高くなってきている状況である。そこで、私たちは韓国のドラマ、特にその製作システムとストーリー上特徴を紹介することにした。

2. 製作過程の特徴

2.1 超スピード製作方式

韓国では大部分のドラマが放送局と外注プロダクションとの共同制作で作られている。こういうシステムでは、まず放送時間が編成された後に制作に入る場合が多いが、それは、すでに制作に入ったのに放送局で時間を編成してくれないと困るからである。そして俳優のギャランティーが高くなり、キャスティングも難しくなって放送2週前に撮影に入ったりする、超スピード製作が行われている。それに、韓国のドラマは週2回放送が原則になっているので、その分量が多い。(普通16～24部作)それで、時間に追われて撮影が行われたり、放送何十分前に編集が終わったりすることもよくある。でも、最近はこういうシステムの問題点が指摘され、編成前に制作に入る完成度が高いドラマも登場している。

2.2 視聴者の意見反映

韓国のドラマは視聴者の意見を積極的に反映して、なるべく視聴者が見たがる映像を見せてくれる。作家の意図とは関係なく、視聴者の意見によってストーリーが変わることもよくある。そして、視聴率があまりにも低い場合にはドラマを早く終わらせたり、人気がある場合には放送回数をふやしたりする。このように視聴者がドラマの展開に介入にすることを非難する人も少なくないが、ドラマは視聴者を楽しませるために存在するものだから、適当に意見を採用することは、そんなに悪いことではないと思う人がまだ多い。

3. ストーリー上の特徴

この章では、韓国のドラマで一番よく扱われているストーリーを、3種類に分けて紹介する。

3.1 財閥と貧しい女主人公のラブストーリー（シンデレラストーリー）

金持ち男と貧乏な女の子のラブストーリーは、もうやめて欲しいドラマのストーリー1位に選定されるほど多くの非難を浴びながらも、毎度登場する度に高い視聴率を記録している。その代表的なドラマである「パリの恋人」は、2006年最高50%以上の視聴率を記録し、社会的にも大変話題になった。

だれでも一度はそのドラマのような状況を夢見るが、実際自分にそういう状況が起こるわけがないということ、私たちはあまりにもよく分かっている。結局、このようなドラマが多くの非難にもかかわらず絶えず作られているということは、現実で成し遂げにくい自分たちの欲望が、ドラマの主人公を通じて行われていることを見て、代りに満足するという視聴者の心理に起因したことだと見られる。

3.2 30代未婚女性の仕事と恋愛

最近、女性の社会的な地位が高くなり、結婚を延ばして積極的に社会活動に参加するシングル女性が増えている。そういう流れで、今この時代の女性が我々の社会でどんな姿で存在しているか、またどんな風に自分の人生を開拓しているかに焦点を合わせたドラマが続々と登場している。

こういう内容のいちばん代表的なドラマである「私の名前はキム・サムスン」は20、30代の女性を中心に「キム・サムスンシンドローム」というほど話題になった。そしてドラマの撮影地はもちろん、ドラマの中でサムスンの職業であったパティシエに対する関心も高くなって、実際、全国の製菓製パン専門学院の学生数が増えたそう。さらにドラマが終わった後、キム・サムスンコンテストまで開かれて、20・30代女性のライフスタイルにも多くの影響を与えた。そして、こういう「私の名前はキム・サムスン」の大成功以来、各放送局ではこれと似ているコンセプトのドラマをしばしば制作している状況である。

3.3 典型的なメロドラマ

男女主人公の愛が、すれ違い、不治病、出生の秘密などの素材で描かれている伝統的なラブストーリーは、韓国ドラマにありがちな内容である。

日本でも有名な「冬のソナタ」は、先に述べたすべての設定が含まれている典型的なメロドラマである。

しかし最近、時代が変わり、若い世代の恋愛方式もずいぶん変わっている。それで、冬のソナタのような古いメロドラマは、もう若い世代にアピールすることができない。それは冬のソナタを見た大部分の視聴者が40、50代の人だったということを見ても分かる。そういう訳で、最近若い世代にアピールするために、独特なキャラクターと新しいストーリー構造のトレンドドラマがたくさん作られている状況である。

4. ストーリー展開の特徴

この章では、私たちなりに選んでみた韓国のドラマによく登場する場面を紹介する。

<韓国ドラマ、こういう場面必ずある! Best 5>

一、決定的な瞬間、空港や路上で男女主人公が必ずすれ違う。

そのまますれ違って別れた二人は、偶然の偶然を繰り返しながら、結局再会する。

二、ドラマの後半部になると、主人公または主人公と葛藤関係である人が不治病にかかる。

結局これをきっかけで、すべての葛藤が解決される。

三、複雑な出生の秘密。

こういう場合には、恋のライバルが実は異母兄弟だったとか、貧しい親の下で育った主人公が実は金持ちの子供だった、という設定がいちばん多い。

四、男女主人公の恋を邪魔する人の登場。

こういう人たちはだいたい主人公の昔の恋人とか、前から主人公に片思いしていた人であることが多い。

五、最初がかたきであった二人の男女が、ある事件をきっかけで恋に落ちる。

このような設定は、最近も多くのロマンスドラマでよく使われている。

5. 最近の動向

最近、先に述べた古臭い素材やつまらない展開のかわりに、話題になったマンガや小説を

原作にしたドラマがたくさん作られている。また、メロドラマから脱した、医学物と推理物のような、いろいろなジャンルが試されている。

そして、「大長今」、「ジューモン」が大ヒットして以来、放送局ごとに歴史的な事実に基づいた時代劇を競って製作している。

6. まとめ

今韓国のドラマは制作システムの問題や多様なストーリーの不足など、いろいろな課題に直面している。そあそ、先に述べたように、現在その問題点を改善するための努力も一緒に行われているので、韓国のドラマが今よりもっと発展する可能性は、まだ十分にあると思われる。

<実習について>

実習の目的：日本のテレビ局とドラマの撮影地で有名な所を見学する。

4日 14:00-15:30 テレビ朝日見学

15:30-16:30 六本木ヒルズ

16:30-19:30 東京タワー到着

買い物と夕食

19:30-20:30 東京タワー展望台

5日 14:00-16:00 報告会準備



テレビ朝日見学

日本人の笑いについて

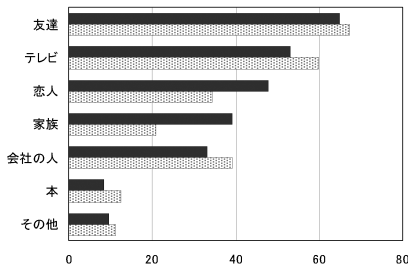
長澤美波・庭山飛鳥・黒川日南子（お茶の水女子大）

1. はじめに

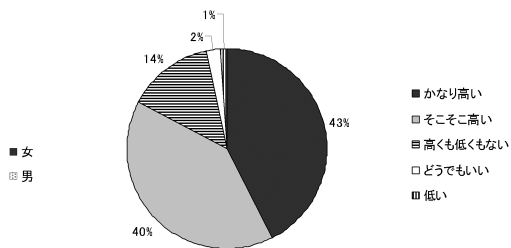
ドラマを見たり、韓国の方と話したりするとき、隣国でありながらも日本と韓国の感情表現が異なる点が多いように思える。しかしまた、隣国であるがゆえか西洋などよりは近いような印象も受ける。文化として目に見えづらい感情表現について調べることでよりいっそうの理解につながるのではないかと考える。そこで、本研究では、比較的好く聞く「日本の笑いの感覚がわからない」という意見から日本の笑いの感覚に焦点をあてることにし、韓国との差異、共通点を模索し、互いの理解につなげるものとする。

2. 笑いに関する日本のイメージと実際

笑いに関する日本人へのステレオタイプで有名なものは、『本心を隠すためのにやにや笑い、愛想笑いが多い』や『日本人にはユーモアのセンスがない』といったネガティブなものが一般的である。日本人ははじめでユーモアによって笑うことは少ないというのは偏見である。『L25』という雑誌が2007年4月に25～34歳の男女約3000名を対象として行ったモバイル上のアンケートでは『最近ちゃんと笑ってる?』という問いに対して約68%が『はい』と答えている。さらに、『あなたを一番笑わせてくれるのは?』（グラフ1）、『生活の中で、笑いの重要度は?』（グラフ2）を見ると日頃から笑っている人が多く、重要度もかなり高いといえる。



グラフ1



グラフ2

日本人の笑い重視の傾向は、テレビのバラエティ番組数にも表れている。日本の主な民放4局が一番視聴率が高い7時から11時の時間帯に半数以上の割合でバラエティ番組を放映している。視聴率ランキングでもバラエティ番組は高順位を占める。

3. 日本の笑いの分類

今回調べるにあたり、自分たちなりにメジャーだと思われる笑いのジャンル、バラエティ番組の種類と特徴をまとめてみた。以下に挙げるものがそれである。

3.1 笑いのジャンル

(1) 落語：近世期に成立し、現在まで伝承されている伝統的な話芸の一種。衣装や道具、音曲

を極力使わず、身振りと言りのみで物語を進めてゆく。

- (2)漫才：主に2人組で披露される演芸・話芸。2人の会話の滑稽な掛け合いの妙などで笑いを提供する。通常、ボケとツッコミにわかる。
- (3)コント：笑いを目的とする寸劇。数秒～数十秒程度とかなり短く、基本的に道具を用いないものから、衣装、化粧、道具やセットを用い、比較的長時間演じられるものまで多様。
- (4)ピン芸人：一人で笑いをとる芸人。芸能人や政治、世の中への風刺、共感を誘うあるあるネタ、ボケのみ、一人で複数役演じる、物まね、歌詞がおかしな歌、等様々な形態をとる。ちなみに『ピン』とは博徒用語でサイコロの1の目のこと。
- (5)その他：上記外、また複数のジャンルにわたる芸人も存在する。

3.2 バラエティ番組の種類と特徴

3.2.1 バラエティ番組の種類

- (1)ネタ番組：漫才、ピン芸人が多数出演し、順々に自分のネタをみせる。
- (2)コント番組：コントのみで構成。コントのシリーズ化、キャラクター化が多い。
- (3)トーク番組：司会者、ゲストの構図で体験談を披露していく。
- (4)情報番組：笑いをとりいれつつ、グルメ、健康、観光地などの情報を紹介する。
- (5)クイズ番組：その名の通り。芸人には珍回答も要求される。
- (6)その他：上記外の番組はもちろん、上記の5つを組み合わせた番組も多数存在する。

3.2.2 バラエティ番組の特徴

主に挙げられるものとしては、まず、テロップの多用によっておもしろい発言を強化している。最近ではテロップによるツッコミも行われる。過去の問題を持ち出す、コーナーのシリーズ化等で番組を見続けないと笑う理由がわからなくなるという点も挙げられる。発言の揚げ足を取ったり、行動をからかったり、奇抜で危険な行為を強要するなどいじめととれる表現、食べ物を粗末にした笑いなど道徳的に疑問を持たざるを得ない表現も多くみられる現状がある。

4. 「文化コンテクスト」の観点から見た日本の笑い

ここからは、笑いについての学問的な分析を見ていく。まず、そもそもユーモアとはどのようなものなのか。ユーモアの不調和理論 (Beattie, 1776) によると、通常の状態、社会常識、期待されていることから逸脱することによって、ユーモアが生まれるという。では、ユーモアにはどのような特徴があるのか。以下、文化コンテクストという観点から、ユーモアの特徴について分析したものを見ていく。

4.1 文化コンテクストとは

文化コンテクストとは、物理的、社会的、心理的な環境のすべてを指し、それはコミュニケーションにも大きな影響を与えている (Hall, 1976 など)。ここで言うコンテクストとは、どのくらい人々が同様の情報や思想を共有しているか、ということの度合いを示している。この文化コンテクストは、「低コンテクスト」と「高コンテクスト」の2つに大きく分けられる。低コンテクストとは、共有する情報が少なく個人個人がバラバラの思想や文化的背景を持っている状態、そして高コンテクストとは、共有する情報が多く人々の同質性が高い状態を指す。つまり、アメリカやオーストラリアなどの他民族社会は、低コンテクスト社会だと言える。逆に、日本や韓国は同質性が高く、高コンテクスト社会と呼ばれる。この文化コンテクストの違いによって、ユーモアにも違いが出てくるのである。

4.2 低コンテクスト社会のユーモア

低コンテキスト社会では、ほとんどの文化・社会圏で当然と考えられる人間の本質に近いもの（性、愚かさ、ずるさ、ケチに関する知識や情報）がユーモアの基礎となる調和部分となる。そして、ユーモアをアイスブレイカーとして使用し、自分が敵ではないという意思表示や、お互いの緊張を緩和しようとする。このような場合のジョークは、差し障りのない自嘲ジョークが多い。これは、相手の文化圏では非常識にあたる言動があったとしてもお互いを許しあえる、好意的な関係を素早く作り上げるのに効果的である。また、文化の異なる相手にわかりやすいジョークを頻繁に使用する。自分の文化的背景をユーモアを介して相手に伝達することで、より強烈に、好意的に伝えることができるのである。

4.3 高コンテキスト社会のユーモア

高コンテキスト社会では、人々が多くの情報や思考を共有し、常識がある程度統一されているため、低コンテキスト社会のようなユーモアの使い方をする必要がない。そこで、高コンテキスト社会のユーモアは、ある特定の間人間やグループ内の人々と、より親密な人間関係を構築するために連帯感、共感を高めることを目的として使用する。日本の例で見ると、日本人同士のコミュニケーションの場において笑いが生じるのは、会話形式のやり取りと、個人の体験談が主である。「出来合い」のジョークは、相手と自分の距離を近づけるのにあまり効果がないため、あまり使われない。代わりに、グループ内での連帯感を高められる、より新密度の高い「内輪」でのみ通じるジョークを好む傾向がある。

4.4 「言わなくてもわかる」文化

低コンテキストだと、言語などの情報に頼ってコミュニケーションをはかる必要があり、「言わなければわからない」文化になる。逆に高コンテキストなほど、コンテキストに依存する度合いが高く、言語に頼る必要性は低いため、「言わなくてもわかる」文化になる。日本ではこの「言わない文化」が発達していて、言葉で表現しなくても相手が察してくれるのを期待する。察するという行為によってコミュニケーションが成り立つのは、同質性が高い社会ならでのことであり、これは日本語に遠まわし表現や婉曲表現が多い理由のひとつである。このようなコミュニケーションスタイルや表現力を利用した笑いが、日本には数多く見られる。例えば「ボケ」は、遠まわしすぎて相手の言っていることが理解できない、相手の言葉を別の意味に捉える、などで笑いをとるが、これが面白いのはその場にいる人間がそれを「ボケ」であると言わなくても理解できるからなのである。

5. 日本で笑いが生じるパターン

5.1 会話形式のやりとり

5.1.1 会話形式

会話形式とは、お互いが笑いを生じさせるために協調性を持って会話を進めることで、重要な点は、①その場にいる全員が参加する、②お互いの認識を確認し合い、共感と連帯感を高める、③あいづちや笑いで、話していないときにも協調性を示す、④聞き手が話し手の一言を「拾う」、などが挙げられる。これは、なんでもない一言を笑いのある会話にし、よい雰囲気を保つためである。

例：A「今日寝坊して遅刻しちゃった」

B「別に珍しくないじゃん（笑）」

A「そっか、いつものことだよ（笑）」

この例はお互いの日常態度を熟知していることが表れている。日本人同士の会話の中には、ユーモアと呼べる要素は非常に少ないが、日常ではこのように単純な会話による笑いがほとん

どである。

5.1.2 共感を重視する体験談

体験談とは、話し手の体験を共有することを指す。体験談や失敗談を通じて自分の事を自嘲的に話し、よりよく知ってもらおうという姿勢が見られる。また、同様の体験を持っている相手と、共感を得て連帯感を高めるという要素もある。体験談においても、会話の要素が多く、聞き手の協力的な姿勢が求められる。

5.1.3 「ボケ」と「ツッコミ」

話そのものが面白い場合以外に、聞き手の一言が笑いにつながることも多い。話し手は「合いの手」が入ることを期待しながら話し、聞き手は話題に沿った「合いの手」を入れる。これが、より笑いを狙った、漫才の「ツッコミ」に発展した。「ボケ」は「ツッコミ」をしやすいように話すペースが遅く、間が多い。また「合いの手」である「ツッコミ」を期待しながら、「ボケ」る。「ボケ」のあと、間が周囲を笑わせ、さらにそれを確認する「ツッコミ」がもう一度周囲を笑わせるという笑いのスタイルが確立しているのである。

5.2 会話のスタイル

これまでに説明した会話形式による笑いは多くの日本人が好むとされる「思いやりスタイル」(Tannen, 1984) という会話スタイルが深く関わっている。特徴としては、①一時に一人の人が話す(割り込まない)、②聞き手はいづちな肯定的な反応をする、③お互いに間をとりながら会話を進める、などがあげられる。これに対する概念は「熱中スタイル」と呼ばれ、質問をたくさん投げかけることで、相手の話に集中していることや関心の高さを示す会話スタイルであり、欧米によくみられる。

6. 考察

以上、日本の笑いとその根源にある国民性について見てきた。日本の笑いが理解されづらいのは『内輪受け』重視だからであることがわかった。日本と韓国の共通点は高コンテキスト社会であることから、相違点は会話スタイルが違うことから生じていると予想することができる。今回、韓国のバラエティ番組を見る機会があり、言葉はわからないものの笑いの雰囲気は伝わってきた。発表でみせた映像に笑っている韓国側参加者もいた。日本の方は人を貶めるという低俗な笑いがテレビメディアを支配しているという課題はあるが、十分に理解しあえるのではないかと感じた。

<参考文献>

- 大島希巴江 (2006)『日本の笑いと世界のユーモア—異文化コミュニケーションの観点から』世界思想社
- Beattie, James(1776) *Essay on Laughter and Ludicrous Composition*, Edinburgh: Willia Creech.
- Hall, Edward(1976) *Beyond Culture*, Garden City, NY: Anchor.
- Tannen, Deborah(1984) *Conversational Style: Analyzing Talk among Friends*, Norwood, NJ: Ablex.
- 『L25』(2007/5/10)RECRUIT

<セミナー参加状況>

- 2日 16:00-18:00 歓迎会準備 (会場準備)
18:00-20:00 歓迎会参加

- 3日 9:30-16:00 講演会、文化体験に参加（司会担当）
- 4日 14:00-16:00 テレビ朝日およびその周辺散策
- 16:00-18:00 麻布十番でレトロな日本見学
- 18:00-20:00 夕食に蕎麦体験、東京タワー見学
- 5日 14:00-18:00 報告会準備
- 6日 9:30-17:00 発表会参加
- 7日 9:00-20:00 バスツアー、送別会参加

グループ実習



箱根観光



【レポート】

日韓の民族衣装の着用頻度の違い

磯部美奈（お茶の水女子大）

1. 研究動機

今回のセミナーで特に楽しみだった民族衣装体験の際、日本の学生もさることながら、韓国側にも自国の民族衣装の着付けができない学生が多数いた。それに、先生もおっしゃっていたように、外見だけでは韓国の学生なのか日本の学生なのかわからないほど、両国の学生たちは同じように洋服をおしゃれに着こなしていた。これを見て、韓国も日本と同じように伝統文化が廃れつつあるのではないかと考え、韓国では現在どのような場面で民族衣装が着られているのかということに興味を持った。そこでその着用状況を日本の着物（浴衣を含む）の着用状況と比較し、それぞれの国での現在の民族衣装の位置づけの類似点と相違点を探っていきたい。

2. 韓国の学生とのディスカッション

現代の韓国人の民族衣装の着用頻度を知るため、8月4日、韓国のキムウィギョンさんに、8月5日にはナヒャンソンさんにお話を伺った。そのお話によると、現在韓国人が韓服（ハンボク）を着るのは結婚式の花嫁のお色直しと、子供の正月着、韓国舞踊の衣装位だそう。ナヒャンソンさんは韓服が着られなくなった理由として、一式そろえるにはかなりのお金がかかることと活動的ではないことを挙げていた。しかし最近では「簡易ハンボク」というものも売られており、それを着ている人はたまに見かけるそう。

韓服に代わって洋服が急激に広がったのは、日本と同じく太平洋戦争終戦後だということもわかった。

3. 考察

韓国の学生とのディスカッションで、現在韓国人は日本人より民族衣裳を着る機会が少ないことがわかった。韓国で民族衣裳が着られる機会が減ってしまった理由を、韓服（ハンボク）の特徴とその歴史を、日本の着物と比較しながら考えていく。なお、韓国人はチマチョゴリを男性の民族衣裳とまとめて「韓服（ハンボク）」と呼ぶそうなので、ここでもできるだけ韓服という言葉を使用する。

3.1 韓服の成り立ちと特徴

現在の韓服は朝鮮王朝中葉以後に発達したものと考えられている。朝鮮の民俗文化には、日本と比較すると地方差や生態学的な差が著しくはないという特質があるため、チマチョゴリにも地方差や時代差が少なく、基本的な形式は全国共通である。

男性の韓服はズボンのような「パジ」と上着の「チョゴリ」である。昔はパジの形が身分によって異なった。高い身分の人が着るパジは裾幅が広く、裾を「テニム」と呼ばれるひもで結んだが、低い身分の人が着るパジは裾幅が狭く、テニムも結ばなかった。一方、女性の韓国服は胸の上からつま先までを覆う「チマ」とチョゴリである。女性用のチョゴリは男性用よりもずっと丈が短くなっている。男女とも、外出のときや行事のときは上に「トウルマギ」を着用する。

韓服のいちばんの特徴は、体の線が出ずゆったりとしていることである。日本の着物は体の曲線がはっきり出るので、ここが韓服と和服の大きな違いだろう。

3.2 韓国民俗文化の転換期

ナさんのお話にもあったように、韓服を着る人が減ったのは太平洋戦争後のことである。1970年代に始まった農村の生活近代化を目指す、政府主導のセマウル（新しい村）運動がその大きな原因といわれている。伝統文化の基盤であった農村部で近代化が進み、韓服の人も減った。

しかし今日では、簡易韓服の開発や伝統を守ろうとするデザイナーが出てくるなど文化の見直しも始まっている。日本でも、二部式着物が出たり、改めて着物のよさを伝える本が出版されたりして、一部では着物ブームも騒がれている。若い世代にももっと伝統文化に興味を持ってもらうことは、日韓共通の課題であるようだ。

4. まとめ

以上のように、韓国も日本も現在は少し伝統文化を切り捨てて近代化を図っている側面があるようだ。民族衣裳は、それぞれの民俗が持つ、最もわかりやすく、かつ強烈に自分たちをアピールするための大切なアイデンティティの一つである。今回韓服について少し詳しくなったことで、韓服がすてきなものだとかわかったうえに、日本の着物がもっと好きになった。今後は、伝統文化がどうやったら自信を持って後世に受け継がれていくことができるのか、もっと色々な国の人との交流の中で考えていきたい。

<参考文献>

- 綾部恒雄（1982）『女の文化人類学 世界の女性はどう生きているか』弘文堂
国立国語院編（2006）『韓国伝統文化事典』教育出版
武田幸雄編（1996）『朝鮮の歴史と文化』放送大学教育振興会
チェスンウ編（1981）『韓国の風雅-韓国文化選書 1』成甲書房

<セミナー参加状況>

- | | | |
|----|-------------|-----------------------|
| 2日 | 16:00-18:00 | 国際学生宿舎にて歓迎会準備 |
| | 18:00-20:00 | 歓迎会参加 |
| 3日 | 9:30-10:00 | 開講式準備 |
| | 10:00-11:50 | 開講式・講演 |
| | 13:00-16:00 | 体験学習（チマチョゴリ体験） |
| | 16:00-17:30 | 実習打ち合わせ |
| 4日 | 11:00-12:30 | 銀座・スイーツパラダイスにてバイキング体験 |
| | 12:30- | 銀座、神田神保町散策 |
| | 18:00-20:30 | 歌舞伎座にて「AMATERASU」鑑賞 |
| 5日 | 12:00-17:30 | 国際学生宿舎にて韓国の学生の発表準備手伝い |
| | 17:30-20:00 | 浴衣を着て朝霞のお祭り見学 |
| 6日 | 9:30-10:00 | 研究発表会準備 |
| | 10:00-16:50 | 研究発表会に参加（質問2回） |
| 7日 | 9:00-19:00 | 箱根バスツアーに参加 |
| | 19:00-21:00 | 送別会 |

日韓の人間関係とコミュニケーションの相違

—個人主義と集団主義—

田中結依（お茶の水女子大）

1. 研究動機

セミナーを通じ、私は日韓の人間関係におけるコミュニケーションや人との距離の相違について、以下のような違いがあることに気付いた。幾つか例を挙げて説明したいと思う。セミナー中、留学生は国際学生宿舎に滞在していたが、その際に留学生は一人につき一つ部屋を与えられているのにも関わらず、就寝する時は何人かで集まり、同じ部屋で眠ったようだ。今回同じグループになった留学生同士は、韓国の大学では殆ど話す機会がなく、セミナーに参加することで初めて親しくなったと聞いた。一般的に、日本では特別に親しい相手や気心が知れた友人ならば就寝を共にするが、親しくなって間もない人と一緒に寝ることはない。又、留学生同士が親しくなって間もないのにも関わらず、買い物をする際に「その服だと太って見える」等、日本人なら神経を逆撫でしかねない率直な言い方をするのに驚いた。日韓の文化の違いについては授業やメディアを通じて聞いていたが、個人の差を鑑みても、人間関係の構築の仕方についてその国独自の意識の違いがあるのだろうと感じた。

2. 韓国の学生とのディスカッション

この違いについてより明らかにするため、韓国の留学生、イエニさん、ヨンジュさん、ヘランさんに詳しく質問を行った。その結果、出会ってから親しくなるために、双方の理解をより深めようと積極的にお互いのプライベートを交換しあうのが普通ようだ。実際、彼女たちはセミナー中寮内で同じ部屋に就寝し、殆ど夜通し自分自身のこと（恋愛や将来について等、極めてプライベートな内容）について語りあったと聞いた。日本は友人関係を構築する際、段階を踏んで序所に親交を深めて信頼関係を築く。そのため、出会って間もないときに家族構成や年齢など、踏み込んだ質問をすることはなく、プライベートについてあれこれ聞くことは失礼であり、厚かましい行為だと取られることが多い。又、親しき仲にも礼儀ありという諺があるように、日本では時間に厳しく、待ち合わせ時間の五分前に着いていることは友人同士でも割りりと普通に行われることであり、万が一遅刻する際には必ず連絡を入れるのが常識だ。日本では、友人同士であるからこそ信頼関係を裏切る行為をしてはいけないという心理が働くのに比べて、韓国では、親しいからこそ多少の迷惑をかけても許されるという心理が働く。そのため、友人同士では時間や金銭関係についてはルーズで、多少の約束は守らないこともあるという。

3. 考察

以上日韓を比較してみて、韓国では友人同士のコミュニケーションが多く、割り切った付き合い方をするのに対し、日本はお互いに干渉されない部分を保とうとする個人主義が発達していることが分かった。日本は会社や学校などで集団をつくって行動することが多いことから欧米から集団主義的といわれることが多いが、韓国からは淡白な友人関係ゆえに個人主義的と見られやすいようだ。このような違いは何によるものなのだろうか。次の二点の理由が考えられる。

① 日韓における価値観の違い

② 日本の受身の立場と韓国の能動の立場

まず①についてである。日本は、集団での摩擦を少なくするために個々によってそれぞれ違った良さがあるという相対的価値観・多元的価値観をもつのに比べて、韓国は明確に自分の意見を言うことが良いとされ、曖昧を避け、物事の白黒をはっきりさせるという絶対的価値観・一元的価値観である。韓国人が殆ど初対面同士であってもプライベートについて率直に質問しあうことはここに由来するものがあるのではないだろうか。次に②についてである。日本には「泥棒に入られた」「恋人に振られた」などの受身形の言い方があるが、韓国にはそもそも受身形の語法が存在しないらしい。「こちらから意志を向けるのではなく、あくまで相手の行為や意志を受ける、という立場からものを言おうとする」呉（1997:30）のが日本の立場であるのに対し、韓国は自らの意志を相手に発信しようとする能動的立場をとる。このような、日韓の能動、受身という立場の違いがコミュニケーションを図る際にも密接に関係してくるのではないだろうか。

4. まとめ

以上、日韓の人間関係とコミュニケーションの相違について考察してきた。当初韓国人留学生は、日本人がスキンシップや密接な付き合い方は嫌うとあらかじめ知識として勉強してきたのか、日本人側に遠慮していると感じられることが多かった。私たちが日韓セミナーに向けて韓国人の習慣やものの考え方を学んでいたが、あまりにそういった知識にとらわれると、知識によってカテゴリ化された安易な考え様式に偏り、本人そのものが見えなくなる危険性があると思った。しかし、国による文化や意識の違いは確かにあると感じさせられる場面も多々あり、事前に相手の国の文化を知り、対人関係を構築する際に柔軟に対応していくことが大切だと感じた。文献で韓国の能動的立場と日本の受身的立場を知り、興味深く感じた。今後、韓国語についても勉強し、日本語と比較して、言語的な違いが文化や意識の違いとどう関わっているか勉強してみたい。

<参考文献>

呉善花（1997）『ワサビと唐辛子』祥伝社
水野俊平（2003）『韓国の若者を知りたい』岩波書店

<セミナー参加状況>

- 2日 16:00-20:00 歓迎会準備・参加
- 3日 9:30-16:00 準備（ICレコーダー担当）、講演会、文化体験に参加。
- 4日 渋谷ハチ公前集合、「109」で若者ファッション文化を見る、「バルコ」内のカフェで休憩、「バルコ2」、スポーツファッションブランドショップ、居酒屋で食事をし、日本の飲み文化を体験
- 5日 池袋駅構内東口いけふくろう前集合、飯田橋駅下車、「不二家」でペコちゃん焼きを購入、神楽坂散策、毘沙門天善国寺、「山下漆器店」、昼食・和食体験、ハンドメイドの雑貨店、花や、リサイクルショップ、赤城神社、和物雑貨店「貞」、ガラス製品店、「紀の善」で和菓子体験、芸者新路散策、和物雑貨店「ここん」
- 6日 9:30-17:00 発表会参加、発表会后・池袋サンシャインを散策、ゲームセンターで若者文化の体験、夕食
- 7日 9:00-20:00 バスツアー 箱根（関所→遊覧船で芦ノ湖横断→ロープウエーで大湧谷）
18:30-20:00 送別会

日韓の感情表現の違い

柳田麻衣（お茶の水女子大）

1. 研究動機

私は、韓国の学生と8日間共に交流していく中で、感情表現の仕方が両者で異なることに気がついた。韓国人は日本人よりも喜怒哀楽を顔の表情や言葉でストレートに表現する。実習7日目に飲み会へ行った時、韓国の学生たちは日常の何気ない話で盛り上がっていたのだが、その時の彼女らの話し方や態度は、日本人が集まって会話をしている時よりも積極的なものであった。この違いはどこからくるのだろうか。

2. 韓国の学生とのディスカッション

この違いをより明らかにするため、同じグループの韓国の学生3人に「韓国人は感情をストレートに表現するね。」と言ったが、みなそれは当たり前の事だと感じており、違いが何処からくるのかは分からなかったようだ。日本語を教えている韓国人のK先生にも、韓国人は日本人よりも感情を素直に表現するように感じたことを伝えた。先生は「確かにそうですね。」とおっしゃったが、やはりその違いが何処からくるのかは分からなかったようだった。そこで感情表現の仕方の違いがどこからくるのかについて文献を基に考察する。

3. 考察

韓国人は日本人よりもストレートに感情を言葉や態度に出す。この違いは何によるものなのだろうか。その一つに考え方の違いがあるだろう。権(2002:62)は、例えば日本人のものの言い方が曖昧なのは、相手を敵に回したくないという感情があるからだと述べている。含みのあるはっきりしないことば使いをすることによって、相手を味方にできなくても、少なくとも敵に回したくないという願いと相手への配慮が曖昧な言い方として現れているのではないかと考察している。一方、韓国人は喧嘩になることも多々あるかもしれないが、心の中を出してみせることにより言い争ったことを後に引きずらないので良いと考える傾向にあるようだ。日本人は、和を重んじて相手を配慮するために言葉づかいに気を使い、曖昧な表現をよく使う。相手を気遣うあまり感情もはっきりと表に出さないことが多い。日本では、思ったことを何でもかんでも言うのは、時に相手を傷つけることにもなるため、あまり良いこととされない。一方、韓国では、子針によれば(1999:19)、韓国人は「感情に忠実」という国民性をもっているため、自分の感情を相手に出してみせることが良いこととされる。韓国人は感情を表に出すことにより相手との信頼関係を築いているのである。一方、日本人は、感情を表に出さずに相手との信頼関係を築いているのではないだろうか。言葉足らずでも相手が考えていることを何となく理解できる感覚をもっているため信頼関係を築くことは比較的容易であると考えられる。また、権は感情表現の違いは環境の違いからきているのではないかと考えている。韓国は活発に上へ向かって旺盛に動いているさなかにある。そのような環境の中で曖昧な言い方のままでいれば、遅れをとる可能性があると思われているのではないかと指摘している。権が指摘しているように、韓国のように発展途中にある社会では、曖昧な表現を用いるよりも明確な表現の方が良いとされるために、韓国人は感情をストレートに表現しているということも考えられるのではないだろうか。

4. まとめ

以上、日韓の感情表現の違いについて考察してきた。韓国人は日本人よりも自分の考えを言葉や態度でストレートに表現する。その理由は、感情を明確に表現することを良しとする考え方や環境にあることが分かった。私は、彼女たちのそのような態度がとても素直だと感じ、好感を抱いていた。しかし、文献を調べていくと、韓国人のストレートな感情表現は必ずしも良い事とはされていないことが分かった。喜怒哀楽を表現することは大切だが、その表現が過剰になった場合、厄介なことになってしまう。喧嘩になった場合がそうだろう。テレビで韓国人が感情をむき出しにして起こっているのを見た外国人が、「韓国人＝激しい」というイメージを抱き、良くないことと捉える傾向があるように思える。確かに、感情を必要以上に出してしまうことは良くないことなのだが、それを否定的に捉えるのではなく、韓国人はそれだけ感情に忠実に、そして素直に生きる国民なのだという視点を持つことが大切なのではないかと思う。韓国人は感情に忠実な人々であるという視点を持つことから、相手を尊敬する心が生まれてくるように思う。しかし、韓国人が感情を過剰に出しているのか、感情を忠実に出しているのかについては、未だ線引きできないため、今後、多くの韓国人と交流して異常だと思えるほど過剰に感情を出す場合は注意するように心がけたい。

<参考文献>

- 権寧夫 (2002) 『韓国と日本 これから 21 世紀の誤解と友情』 自由国民社
金利光 (1997) 『韓国人』 河出出版
戸田郁子 (2006) 『手の大きいお嫁さん』 株式会社アートン
小針進 (1999) 『韓国と韓国人』 平凡社
金文学, 金明学 (1999) 『韓国民に告ぐ』 祥伝社

<セミナー参加状況>

- | | | |
|----|-------------|------------------------------------|
| 2日 | 18:00-20:00 | 歓迎会 |
| 3日 | 10:00-16:00 | 開校式、体験学習、実習の打ち合わせに参加 |
| | 19:00-22:00 | 池袋を散策、日本食(豚カツ)を体験 |
| 4日 | 10:00-12:00 | 渋谷を散策 |
| | 12:00-14:00 | 表参道を散策、結婚式場を撮影、途中のレストランで日本食(そば)を体験 |
| | 14:00-17:00 | 明治神宮を見学 |
| | 17:00-20:00 | 板橋区の花火を見る |
| 5日 | 10:00-14:00 | 代官山を散策 |
| | 20:00-21:00 | 韓国学生の発表のお手伝い(寮にて) |
| | 21:00-22:00 | 寮で誕生日を祝ってもらう |
| 6日 | 10:00-17:00 | 研究発表会参加 |
| | 18:00-19:00 | 日本食(回転寿司)を体験 |
| | 20:00-22:00 | レストランでパフェを食べながら交流 |
| 7日 | 9:00-20:00 | バスツアー(関所→恩賜公園→大涌谷) |
| | 18:30-20:00 | 送別会 |
| 8日 | 10:00-15:00 | 鎌倉を散策、韓国料理(ビビンバ)を体験 |

	15:00-18:00	江ノ島の海を見学、写真撮影
	19:00-21:00	飲み会に参加
9日	9:00-13:00	旧岩崎庭園を見学
	13:00-14:30	浅草を散策
	14:30-18:30	お台場を見学
	18:30-21:00	六本木のレストランで食事
10日	9:00-10:00	見送り

日韓の文化伝達の違い

－「日流」と「韓流」－

天野真由子（お茶の水女子大）

1. はじめに

セミナーを通じ、私は日本における「韓流」、韓国における「日流」には放送の面において大きな違いがあることに気づいた。韓国の学生と話をしていると、日本の映画やドラマ、役者にとっても詳しくあった。私自身が日本人であるので、今日本での「韓流」ブームは実感できるのだが、韓国の学生が日本のドラマや映画に詳しいことは意外だった。

このことをきっかけに韓国での日本のドラマや映画の放送事情を中心に「韓流」と「日流」について触れていきたい。

2. 韓国の学生とのディスカッション

韓国の学生が今日本で放送されているドラマも知っているというので、日本のドラマをどのようにして見ているのかを、同じグループのメンバーであるイエニさん、ヨンジュさん、ヘランさんに詳しく聞いた。すると、日本のドラマはテレビで放送されていないのでインターネットからダウンロードして見ているとのことだった。日本では韓国のドラマをテレビ放送しており、DVD やビデオでも見ることができるので、このことは大きな違いの一つだと思った。また映画に関しては普通に映画館で見ることができるものもあるとのことだった。

さらに韓国の学生と話していて気づいたのは、ドラマや映画を通じて日本の有名人を知ることだった。セミナー中に渋谷に一緒に出かけたのだが、街中の看板を見かけたときに「○○に出ていたーだよね!？」という会話をよくした。この点に関しては日本と同じである。

3. 考察

以上から日韓では放送の制限に違いがあるようだ。そして、この違いが日本における「韓流」と韓国における「日流」の勢いに差をつけているのではないかと考えた。

金（2007:138）によれば、日韓関係と同様、韓国での「日流」にも「歴史」の影が深く潜んでおり、韓国政府は不幸な歴史に起因する韓国の国民感情を背景に、長年日本文化の流入を禁じてきたのである。しかし、日本大衆文化の封鎖は、時間の流れとともにその政策的疲労感が限界に達し、統制の枠を越えて入ってくる日本文化は韓国国内ですでに実態を伴っていた。そして、金大中政権の政治的決断によって1998年に始まった開放政策は四回にわたって段階的に発表され、今では日本大衆文化はほぼ全面的に開放されている（ただし、放送において娯楽番組や地上波放送局でのドラマはまだ開放されていない）。

日本の放送番組の中で、韓国国内で一番人気のあるジャンルはTVアニメであり、多少の制限はあるものの、アニメ専門チャンネルでの日本のアニメの編成は凄いのがあるようだ。一方、日本ドラマに対する人気は今のところそれほど高くはないが、その原因として韓国国内ドラマの高い人気、地上波放送での日本ドラマ禁止による露出の制限などがあげられる。しかし、日本ドラマに対するニーズはマニアを中心として堅調なものがあり、状況次第では「ドラマ発日流」も期待できる、と金（2007:140）は述べている。

また日本での「韓流」ブームという点、韓国ドラマや映画、その出演者に熱中しているのは

主におばさん世代の人々だというイメージがあり、実際に『冬ソナ』をきっかけとした「韓流」にはまっているのは中高年の女性である。しかし、韓国における「日流」はTVアニメや若者向けのドラマにニーズが高まっているということから、その盛り上がりは若者世代にかかっているとも言えるだろう。

4. まとめ

以上、日本における「韓流」と韓国における「日流」の放送面に関する違いについて考察してきた。最初は日本における「韓流」の勢いが一方的に強く、韓国ではそれほど日本のドラマや映画に関心がなく、学生も知らないと思い込んでいただけに、実際に韓国の学生が日本人である自分以上に日本のドラマに詳しいことに驚いた。その背景は話をし、文献などで調べることで、韓国での日本のドラマに対する放送禁止がされていることがわかり、またそのドラマをインターネットでダウンロードすることで最新のものをしているのだということがわかった。今後韓国政府が地上波放送での日本ドラマを開放するか否かという点は、韓国における「日流」の勢いに何らかの影響をもたらすと考えられるので注目していきたい。また同様に日本における「韓流」ブームもどこまでいくのかは気になる点である。

「韓流」、「日流」どちらにせよ、お互いの良い文化は積極的に伝え合っていくことが望ましい。

<参考文献>

小倉紀蔵・小針進 (2007) 『韓流ハンドブック』新書館 『韓国における「日流」』金泳徳

<セミナー参加状況>

- 2日 16:00-18:00 歓迎会準備 (急遽、買出しを担当)
- 18:00-20:00 歓迎会参加
- 3日 9:30-16:00 講演会、文化体験に参加
- 4日 12:00 国際学生宿舍集合、近く中華料理屋で昼食
- 14:00-17:00 渋谷ハチ公前集合、渋谷巡り (109、パルコ)
- 18:00 原宿の居酒屋で夕飯 (渋谷から歩いて移動)
- 22:00 国際学生宿舎着
- 5日 11:00 いけふくろう集合
- 12:00-16:00 神楽坂巡り (昼食はうどん、主に日本の雑貨屋を見て回る)
- 6日 9:30-17:00 発表会参加
- 7日 9:00-20:00 バスツアー (関所→遊覧船で湖尻へ→ロープウエーで大湧谷へ)
- 18:30-20:00 送別会

日韓の食に対する考え方の違い

－正月・ソルラル料理を中心に－

羽賀ゆかり（お茶の水女子大）

1. 研究動機

今回、セミナーに参加するにあたって、私は韓国についての知識を少しでも増やしておきたいと思い、事前にこんな本を読んだ。『韓国人ウ君の「日韓の壁」ってなんだろう』（ウ、2003）である。というのも、私の韓国に対する知識というのは、森山先生の講義で学んだことと、最近流行の韓国ドラマを数回目にして掴んだ漠然としたイメージ程度のものであったからだ。せっかくこのような機会に恵まれたのであるから有効に活用したいと思い、事前に色々調べてみた。

日本人の韓国に対する誤ったイメージや韓国の慣例など様々なことが書かれてあったが、中でも最も興味を引かれたのは韓国の食事である。著者は日本の食事を見て「赤ん坊の食事」、「おかずがまったくない」という感想を持ったそうだ。ちょうど森山先生の別の講義で「犬食いと乞食食い」について学んだところだったので、今回のセミナーでは、韓国人の食について特に関心を向けながら交流してみたく思い、セミナー中でもよく食べ物の話をした。そしておせちの話になったとき、韓国にも正月に食べる料理があると聞き、少し詳しく話を聞いてみたところ、なんと韓国の「おせち」は祖先の「お下がり」なのだそう。現在では主に保存食としての意味合いが強い日本のおせちに固定観念のある私には、その考え方がとても興味深く感じられた。よって、日韓の正月料理に対する考え方の違いを知りたく思い、レポート課題として検討することとした。

2. 韓国の学生とのディスカッション

そこでこの違いについてより明らかにするため、8月6日、韓国のキム・ジへさんと鄭銀貞さんに詳しく質問を行った。

韓国の日本の正月に相当する行事は「ソルラル」といい、その一環としてチャレサンという、餅や魚やナムルなどの食べ物がお膳として用意され、それを祖先に供える行事がある。供えたあと、その料理を自分の皿に盛って食べるのだという。この「供えたものを祖先から分けてもらう」という考え方が、私は韓国独特だと感じた。

また、日本のおせちの料理一品一品には意味があり、それも長寿や子孫繁栄などおめでたい意味が多いのだ、ということ話をすると、韓国側からこんな話も聞くことができた。韓国の料理には、日本のように慶祝の意味はないが、健康を願う意味が込められているものが多いのだという。健康にいい食べ物や、病気に効く食べ物などを料理に使い、食べるものから健康に気をつけるそうだ。日本よりずいぶん合理的だという印象を持った。

3. 考察

では、この違いは何によるものなのだろうか。上記のように、日本と韓国では食べ物に対する考え方が異なっているのは明らかである。

そこで、一つの仮説を立ててみたい。日本では料理のみならず様々なモノに対して、非現実的な意味を見出すことが多い。これはよく「アニミズム」と呼ばれ、日本の神道に由来していることは周知のところである。よって、食に対する考え方の違いも、宗教によるところが大きいのではないだろうか。

3.1 日本の神道と食

日本人の子どもならばだれでも一度は親から言われた言葉の一つに、こんなの言葉がある。「ご飯粒を残してはいけない。その中には八十八の神様が宿っているからね」と言われたのは私だけではないだろう。この考え方こそが「モノに意味を見出す」ということにつながり、ひいてはおせちの「縁起を担ぐ」という慣習へと繋がっているのだと考える。

3.2 韓国の儒教信仰と食

日本のモノに意味を見出すことが神道に由来するのであるならば、韓国の「供えたものを祖先から分けてもらう」という考え方は、やはり何らかの思想や信仰に関係するのではないだろうか。齋藤(2005: 115)によれば、この「供えたものを祖先から分けてもらう」という考え方は「ウンボッ(飲福)」といい、祖先の福にあやかる、という習慣だそう。さらに、「この祖先を敬うという行為は儒教精神から来ている」とあるように、やはりこの考え方は儒教に由来するというのが言えそう。さらに、Wikipediaによると、食べるものから健康に気をつけるという考え方も「医食同源」「五色五味」と呼ばれ、やはり儒教からきているらしい。

4. まとめ

以上のことから考えると、この日韓の食に対する考え方の違いは、日本と韓国の宗教・思想の違いによるものだと言える。宗教や思想の影響はやはり大きい。

セミナーの実習中にも、儒教の考え方に起因すると思われる留学生の行動が多々あり、目新しい感じがした。もちろんこのグローバルな時代に、未だに全ての韓国人が儒教の影響を受けているとは思っていないが、私はとても尊敬すべき文化だと思う。今後も、日韓の違いを認識するとともに、韓国に対する知識を増やしていきたい。

<参考文献>

ウ・スグン(2003)『韓国人ウ君の「日韓の壁」ってなんだろう』講談社。
齋藤明美(2005)『ことばと文化の日韓比較 - 相互理解をめざして - 』世界思想社
Wikipedia「儒教」

<セミナー参加状況>

- | | | |
|----|-------------|-----------------------------|
| 2日 | 16:00-17:40 | 歓迎会準備 |
| | 17:40-20:00 | ダブルスクールのため欠席 |
| 3日 | 9:30-17:35 | 準備、講演会、文化体験に参加 |
| 4日 | 10:00-14:00 | ダブルスクールのため欠席 |
| | 14:00-15:00 | 合流し、明治神宮を見学 |
| | 15:00-17:30 | 原宿でショッピング |
| | 17:30-21:00 | 電車で川口駅まで移動し、花火大会を見学 |
| 5日 | 10:00-12:11 | ダブルスクールのため欠席 |
| | 12:11-16:00 | 合流し、代官山で昼食後、ショッピング |
| | 16:00-17:35 | 学校へ戻り、韓国側報告会準備を手伝う(日本語チェック) |
| 6日 | 9:30-17:30 | 発表会参加 |
| 7日 | 9:00-20:00 | バスツアー (昼食→恩賜公園→海賊船→大涌谷) |
| | 19:15-21:00 | 送別会参加 |

日韓文化比較

—対人関係を中心に—

篠崎ゆい（お茶の水女子大）

1. 研究動機

セミナーを通じ、私は日韓の対人関係において、個人と個人間の距離が非常に異なるということを感じた。まず、それを最初に感じたのは、セミナー2日目のことだった。前日に歓迎会をして一応自己紹介をしていたのだが、朝大学の会議室に行き同じグループの学生たちを見つけても、挨拶はしたがきっかけがなく、近くの席に移動したり話しかけたりすることはできなかった。しかし、休み時間になると彼女たちのほうから「こっちへおいでよ〜。」と声をかけてきてくれ、一気に距離を縮めることができた気がした。また、その日の夜、もう一つ驚いたことがあった。彼女たちの希望で夕飯を食べに街へ繰り出したのだが、そのときのお会計を彼女たちが払ってくれたのだ。もちろん、はじめは驚き、戸惑い断ったのだが、彼女たちが言うには、「まったく気にすることはない。ゆいがいなかったらここまで食べにこれなかったし。これはお礼だよ。」と言ってくれたのである。日本の学生の間では、割り勘といって別々に会計することは当然の習慣である。私はその方法は合理的であり、トラブルも防ぎやすいという意味で認めてはいたが、毎回どこか友人との断絶感というようなものをひそかに感じていたため、この彼女たちの行動には感動を覚えたのである。

2. 韓国の学生とのディスカッション

この、日韓の対人関係についてより明らかにするため、8月4日、韓国の羅香善さんに詳しく質問を行った。私が、「日本では割り勘が当たり前なんだけど、韓国では友達同士の間でもおごったりすることがよくあるの？」と尋ねたところ、「だれが払うということは厳密には決めないよ。払える人が払うし、その次はじゃあ前払ってもらったから私が払うねって感じかな。」という答えが返ってきた。確かに、私の経験から考えてみると、日本でこのような習慣がないわけではないと思う。しかし、私がこのような会計のシステムを用いているのはごく親しい友人に限っており、まだあまり深い関係になっていない相手の場合、気をつかうという意味で割り勘を選択している気がする。したがって、韓国の友人関係が日本の友人関係よりも深くて濃密である、ということは一概には言えないと思う。

3. 考察

以上日韓では友人間での会計方法に違いがあるということがわかった。先述のようにこの違いは友人関係の程度の違いからきているといえるのだろうか。または、国民性の問題なのか。小倉（2001）によると、「韓国人は“ケンチャナヨ”である」「大丈夫、問題ない、オーケーだ」という感覚が韓国人の特徴だと述べている。確かに、会計時の彼女たちの行動はこの特徴に即していると思う。しかし、彼女たちの行動にはこの「ケンチャナヨ」の気質だけでは説明できない何かあたたかいものがあった。この「ケンチャナヨ」精神には、いい加減、ルーズという意味合いも含まれているらしいのだが、彼女たちから感じた「ケンチャナヨ」はそのようなものではなかった。彼女たちはけして待ち合わせの時間に遅れてきたり約束を破ったりしたことは

なかった。このあたたかさは、友人関係の距離で説明できるのではないか。また、ごく親しい男性を「オッパ」と呼んだりする習慣も、韓国人の、友人に対する認識を表現していると思う。先ほども述べたように、けして日本人は友人関係が浅くて薄っぺらいということが言いたいのではない。ただ、韓国では友人でも家族のように接するという態度がこのような言語行動にも表れているということが言えるのではないだろうか。その態度の違いが会計方法の違いにも表れているのだと思う。他の例を挙げると、彼女たちと接していて感じたことは、ボディタッチが日本人の友人と接しているときよりも多いということである。私の経験では、ごく親しい友人でない限り気軽にボディタッチすることはない。ごく親しくてもめったにあることではないと思う。しかし、彼女たちとは出会って1日や2日しか経っていないのにそのような場面に出くわした。そのおかげで、私たちの距離は縮まったとも言えるだろう。

4. まとめ

短い期間の中、彼女たちと接して感じたことは、表現がストレートであるということである。上にも述べた、「ケンチャナヨ」精神も、友人に対する親しみを表現する方法も、日本人と接するときよりも裏を読む必要がないように感じた。日本人の場合、会計の際に「私が払うからあなたはいいよ。」と言われても、言われた側としては、その人の真意は何なのだろうか、本当に甘えてよいのだろうか、もしかして後で何か悪いことを言われてしまうのではないかと勘ぐってしまう場合がある。しかし、彼女たちと接していて、そのような心配はない、そもそも社会のマナー、習慣といったような感覚が異なっているのだということを実感した。どちらが優れていて、どちらが劣っているというわけではない。どちらの文化も他人を思いやるという根底の部分は同じなのだ。私たちは自分たちの文化を普遍的なものであると錯覚し、そのものさしではかりがちである。しかし、今回挙げたような、日常生活で表れてくる普段は目立たない言語行動はその社会のあり方を表しているものなのではないかと感じた。自分たちとは違うと片付けてしまうのではなく、なぜ違うのかを考えて肯定的な捉え方をしていく姿勢が今後必要になってくると思う。

<参考文献>

鄭大均 (1995) 「韓国のイメージ 戦後日本人の隣国観」
小倉紀蔵 (2001) 「韓国人のしくみ <理>と<気>で読み解く文化と社会」

<セミナー参加状況>

- | | | |
|----|---------------|--------------------------|
| 2日 | 16:00 - 18:00 | 歓迎会準備 |
| | 18:00 - 20:00 | 歓迎会参加 |
| 3日 | 9:30 - 16:00 | 講演会、文化体験に参加 |
| 4日 | 10:30 - 13:00 | 銀座のスウィーツパラダイスでケーキ食べ放題を体験 |
| | 13:00 - 15:00 | 銀座を歩く |
| | 15:00 - 17:30 | 神田にて本屋を探索 |
| | 17:30 - 18:00 | ファミリーレストランで休憩 |
| | 18:00 - 20:00 | 歌舞伎座見学 |
| 5日 | 12:00 - | 国際学生宿舎にて談話、発表原稿の日本語見直し |
| | 17:30 - | 浴衣に着替え、朝霞の祭りに行く |
| 6日 | 9:30 - 17:00 | 発表会参加 |

7日 9:00 - 20:00 バスツアー（関所→恩賜公園→大涌谷）
18:30 - 20:00 送別会

似ているからこそ異なる日韓

－日本人？韓国人？とは－

鄭銀貞（お茶の水女子大）

1. 研究動機

今回のセミナーを通して、韓国人でありながら日本側の学生として参加し、そのような立場から両国の文化や習慣などをより客観的に見ることはできたのではないかと思います。韓国に住んでいた時に不思議に思っていたことなどが、この1年間日本の生活に慣れていくにつれ、すでに自分にとっては違和感のないことになっていた。それに気づいたきっかけが、今回の日韓セミナーに参加していた韓国側の学生から受けた質問からである。「何で日本人は～なんですか？」と聞かれるたびに、自分ももう一回それに対して疑問に思うようになった。

2. 両国の学生とのディスカッション

日本に対する好奇心を真正面からぶつけてくる韓国側の学生を目の前に、日本側の説明をしているうちに、自分が何人であるか分からなくなった。もちろん自分は韓国人だという認識を持っているが、それでも文化的な背景から見ると、時々それが韓国の習慣であるか日本の習慣であるか分からなくなってくるのである。

それから同じグループの柳田さんと話すうちに韓国側の新鮮さについて話し合う機会があった。下記に話した内容の一部を乗せることにする。（本人の同意を得た上で載せる）

柳田「韓国の人っていいよね。」

私「何が？」

柳田「何か感じたことをストレートにいうから、それが面白いの。」

私「え？私も韓国人だよ。あまり変わらないんじゃない？」

柳田「でも、チョンさんは何か日本人っぽいところがあるから。」

確かに大学に入ってからここ5年間、自分の周りを囲んでいる全てが日本とのなんらかの関係を持つものばかりである。そのせいか、時々言語までもが日本語で表現するのが楽な時である。それはその言語が持つ特徴によって、他の言語では表現できないことがあるからではないかと思う。

周囲の色々な言語を習っている人達を観察してみた結果、言語によってその集団が持つ気質が違うことに気づいた。それはその言語を使うことによって、何らかの形でその文化から影響を受けているからではないかと思う。

3. 考察

一つの社会は決して一つの文化や言語を持つわけではない。しかし、どうしても私たちはステレオタイプに陥りやすいものである。韓国人はこうであるとか日本人はこうであるという噂から、それを詳しく語った書籍にいたるまで、様々な憶測の中で生きているのである。例えば、韓国はいつもキムチや焼肉ばかりを食べていると錯覚をしている人もいる。それは日本人が毎日、寿司とすき焼きばかりを食べていると思込んでいる外国人と同じである。実際、韓国のある生命保険会社による95年度の調査によると、初等学校（小学校）の児童を対象に食べ物の好き嫌いに関する調査に以下のような結果が出たのである。¹

「好きな食べ物」	「嫌いな食べ物」
①とんかつ	①キムチ
②ピザ	②野菜類
③焼肉	③ねぎ・たまねぎ
④キムチ鍋	④犬肉スープ

すなわち、私たちが普段言っている韓国文化や日本文化は表向けのハレの文化であり、ケの文化である生活の内側を反映しているわけではない。それによって、確固たる「日本文化」、「韓国文化」というのは存在しないものである。新聞やテレビで、あるいはその他のメディアでよく言われる「日本文化」というものは、実は日本が分断されたら容易に二つの違う文化に分化する、柔らかく捕らえどころの無いものなのだ²。つまり、「日本人っぽい」、「韓国人っぽい」ということは、あくまでも既存のステレオタイプを基にした表現であり、その真実の有無を客観的に判断するのは難しいことである

4. まとめ

上記では普段似ている外見によって、習慣までもが似ているのではないかと錯覚に陥りやすい日韓の文化について述べてきた。以上のことから、日韓の文化は大変似てはいるものの、その根本的な部分には差が存在するということが分かる。しかしながら、そのような「日本文化」、「韓国文化」という締めくくりは、正しくない偏見や先入観を生みやすいのである。

今回の日韓セミナーを通して自分自身が文化的な背景から、何人であるか曖昧な立場にあることに違和感を覚えた。このように文化的な背景は個人によって異なるのである。だれも私が韓国人であることを否定する人はいないのであろう。それでも私自身は自分が普通の韓国人だとは言いきれないのである。

文化は今まで変化を繰り返してきたものであり、これからも変化していくものである。その中で、日韓の文化の類似点や相違点はその溝を埋めながら、お互いを理解していくのであろう。今回の日韓セミナーもその一連の課程であり、このような活動を重ねていくことによって、日韓の理解への道は開くのではないかと思うのである。

<参考文献>

- 小針進 (1999) 『韓国と韓国人』 平凡社
 曹喜澈 (2002) 『現代韓国を知るキーワード77』 大修館書店
 言語と文化と国家 <http://www.h3.dion.ne.jp/~jtpage/exclaim2/letters/gbk.htm>
 日韓文化の違い <http://www.cubicxdesign.com/japan/culture/episode.htm#machigai>
 日本人・韓国人・中国人の違い <http://blog.so-net.ne.jp/kaysaka/2005-10-01>

<セミナー参加状況>

- 2日 16:30-18:00 歓迎会の準備
 18:00-20:00 歓迎会
 20:00-20:40 打ち合わせ
 3日 10:00-16:00 開校式、体験学習、打ち合わせ
 4日 12:00-14:00 結婚式場見学
 14:00-17:00 明治神宮見学
 5日 10:00-15:00 代官山散策

- 15:00-17:00 発表の準備
- 6日 10:00-17:00 研究発表会参加
18:00-19:00 池袋で回転寿司体験
- 7日 9:00-18:30 箱根バスツアー（関所→恩賜公園→大涌谷）
18:30-20:00 送別会
20:00-23:00 国際学生宿舎で打上げ

注)

- 1 小針進（1999）『韓国と韓国人』平凡社
- 2 言語と文化と国家 <http://www.h3.dion.ne.jp/~jtpage/exclaim2/letters/gbk.htm>

日韓の言語習慣の違い

金井友里恵（お茶の水女子大）

1. 動機

私は今回のセミナーにおいて、韓国の学生との会話の中で日韓の言語習慣の違いに興味を持った。韓国の学生の言語習慣が、遠慮がちで遠回しな表現をする日本人と対照的なものであることに気づき、そこから互いに学ぶことがあるのではないかと考え詳しく調べてみようと考えた。

2. 韓国の学生とのディスカッション

この言語習慣の違いについて韓国の学生に聞いてみたところ、以下のような指摘をうけた。

- ・日本人は韓国人と違い、遠慮しすぎている。思っていることを言わないから分からない。
- ・日本人に「よかったらどうぞ」とか「よかったら遊びにおいで」と言われてもそれが本気なのか分からないので困る。

実際にセミナーの間、韓国の学生は自分たちに遠慮しないで良いとか気を遣わなくても良いと何度も言っていた。

3. 考察

以上、日韓には指摘をうけたような違いがあることがわかった。日本人は、不特定多数の他人に対して配慮する習慣が身につけており、礼儀を大切にする。それは、幼いころから他人に迷惑をかけないように教えられ、自分を強く主張することを抑えて相手に配慮のある、礼儀正しい行動で振舞うようにしているためだと考えられる。遠慮という態度が日本人にとっては対人関係における美德であると考えられているのではないか。同様に日本人には本音と建前があって、自分の本当の気持ちをなかなか伝えないのも、相手を思いやってのことなのだろう。逆に韓国人は、自分の意見をはっきり口に出して言うように教育をうけているという点からも、遠慮せずに率直に自分の気持ちや意見を言うことで相手への親しみを表していると考えられる。親しいと思っているからこそ遠慮せずに他人の好意を受け取るのだろう。

4. まとめ

以上、日韓の言語習慣の違いについて考察してきた。韓国の学生と過ごしている間、日本人との言語習慣の違いがとても新鮮で、今回改めて調べてみて日韓の国民性の違い、本質的な気質の違いが分かった。どちらの言語習慣も、それを美德と考えて相手を思いやっているのであり、互いに良いと思われる部分を尊重し学びあえるのではないかと感じた。

<参考文献 URL>

中央日報社会

<http://japanese.joins.com/article/article.php?aid=71117&servcode=400§code=400>

言語習慣からみる「遠慮の文化」日本 <http://www.nrc.or.jp/remsai/stay1-5.html>

<セミナー参加状況>

- 2日 16:00-18:00 歓迎会準備
18:00-20:30 歓迎会参加
- 3日 9:30-16:00 講演会、文化体験に参加
- 4日 14:00 ハチ公前集合、その後109とパルコで買い物をして近くのカフェに入る
19:00 居酒屋SHUへ
- 5日 12:00 池袋東口いけふくろう集合、その後神楽坂へ
ペコちゃん焼の店、毘沙門天善國寺
昼食にうどんの店へ
和雑貨屋をいくつかまわり買い物をする
芸者新路を歩く
- 6日 9:30-17:00 発表会
- 7日 9:00-19:30 バスツアー(そば屋で昼食→遊覧船→ロープウエーで大涌谷→東京)
19:30-21:00 ナマスカで送別会
みんなで遊びに行く

日韓における互いの文化の広がり

－互いの興味の違い－

吉井 南美子（お茶の水女子大）

1. 研究動機

今回の日韓セミナーを通して私が感じたことは、韓国の学生が日本の文化に非常に詳しいということである。日本語を学んでいる学生であることを考慮しても、その知識や日本文化に接触する機会の多さは想像以上であった。それに対し、日本では韓国文化への関心がそれほど高くない人が多いように思われた。そこで、韓国の学生に韓国人の日本文化への関心について話を聞き、日本人の韓国文化への関心とどのような違いがあるか比較したいと思った。

2. 韓国の学生とのディスカッション

韓国人学生の話のなかから分かったことだが、韓国人が興味を持つ日本文化は、いわゆる伝統文化よりも映画・テレビ番組や雑誌、漫画、ゲームといった大衆文化が中心であるようだ。彼らが日本大衆文化に接する機会の多くは、インターネットによって提供されているようである。日本のテレビ番組は、日本での放送日からほとんど間をあけることなくインターネット上で閲覧することが可能であるという話も聞いた。

3. 考察

以上、韓国人学生との対話の中で、韓国では日本大衆文化の受け入れが積極的に行われていることがわかった。一方、日本では近年の韓流ブームで韓国人タレントやドラマに対する認識は広まったものの、韓国での日本人タレントやドラマへの関心ほどではないようである。ではいったいどのような分野が興味の対象となっているのだろうか。ここでは韓国での日本文化の広まりの歴史と、日本で関心の高い韓国文化について考えた。

3.1 韓国での日本文化受け入れ措置

韓国において、長い間日本大衆文化の受け入れは原則として禁止されてきたが、1998年10月の金大中大統領の訪日を受け、韓国政府は日本大衆文化の段階的開放措置の実行に踏み切った。その後、1999年9月と2000年6月にそれぞれ第二次、第三次の開放措置が取られている。小針（2001:87）によれば、実態的には日本文化に接触しながら、公式には日本大衆文化受容が禁止されていた背景として、民族主義的側面や外交的側面のほかに、経済的側面として「日本文化脅威論」なるものの存在があったという。これは、もし日本文化が正式に受容されれば、日本の商品（映画なども含む）が韓国市場を占有してしまうのではないかという危惧から来ていた。しかし、前述の第一次開放措置後に公開された日本映画『HANA-BI』（北野武監督）、『影武者』（黒沢明監督）はどちらも興行的には失敗に終わった。このことから日本文化受容の影響が脅威に値するほどではないとして、この脅威論はほぼ払拭された。映画に限らずほかの分野でも、日本文化の影響による市場の“被害”はそれほど大きくはなかったようである。だが一方で、黄（1999）によれば、開放を行う分野を市場への影響がそれほど大きくない分野に限定しているという見方もされている。日本商品の海賊版の問題などもいまだ解決はしていないし、今後更なる日本文化の流入が進めば、韓国市場に影響を与えることがないとは言えないだろう。

3.2 日本人にとっての韓国文化

韓国のとったこの開放措置は日本人の韓国イメージを改善するという効果をもたらした。その後の日本における韓流ブームには、この効果の影響も少なからずあったのだろう。そして韓流ブーム後も、ブームの時ほどではないが韓国人タレントが日本のメディアに出演する機会が以前より増え、韓国のドラマの放送も続いている。しかし、こうした分野への関心は一部の人においてのみ特に高く、多くの日本人にとっては韓国の食文化のほうが人気が高い。実際に日本には数多くの韓国料理店が存在するし、韓国のガイドブックにも韓国料理に関する特集が多い。

4. まとめ

以上のように、韓国における日本大衆文化の開放措置は、かなり最近に行われたことがわかった。これに対する大きな影響がなかったことや韓国国内からの批判があまりなかったのは、実態的には開放措置以前から日本大衆文化への接触の機会が多かったことが理由だろう。これは、開放措置以前から日本文化に高い関心があったことを示しているとも言えよう。そして、この措置は日本人の韓国へのイメージ改善につながったという効果をもたらした。これ以降、日本において韓流ブームも起こっている。しかし、このブームの中心となった韓国のドラマ・タレントよりは食文化が多くの人に受け入れられたようである。ただ、関心の対象は違うものの、日本の韓国への興味は、韓国の日本に対するものよりは高くないようである。(韓国側の状況に関しては、2001年までの文献・資料を参考としたことから、それ以降の比較的新しい状況については詳しくはわからなかった。)

<参考文献>

小針進 (2001) 「韓国における日本大衆文化とその解放措置」『東アジアの日本大衆文化』、75～112、蒼蒼社
黄盛淋 (1999) 「韓国、日本文化解禁」『メディア情報調査レポート』NHK放送文化研究所発行

<セミナー参加状況>

- 2日 16:00-18:00 歓迎会準備 (菓子買出しを担当)
- 18:00-20:00 歓迎会参加
- 3日 10:00-16:00 講演会、文化体験に参加
- 4日 14:00-16:30 TBS、六本木ヒルズを見学
- 16:30-18:00 麻布十番通り商店街を散策
- 18:00-20:30 東京タワー見学
- 5日 14:00-18:00 韓国側・日本側発表会準備を手伝う
(日本語チェック、日本のテレビ番組に関する質問に回答)
- 6日 10:00-17:00 発表会参加
- 18:00-20:00 居酒屋で“飲み放題”を体験
- 20:00-21:30 カラオケ
- 7日 9:00-19:30 バスツアー参加 (関所→遊覧船・ロープウエー→噴煙地見学)
- 19:30-21:30 送別会

日韓の人間関係の距離の違い

－中国人の立場から見て－

林瑛（お茶の水女子大）

1. 研究動機

セミナーを通じ、私は日韓の人間関係において、大きな違いがあることに気づいた。例えば、

- ① 休憩の時、飲み物を買いにいくとき、韓国側の学生いつも多めに買って、仲間にあげる、その一方日本人の学生は自分の分しか買わない。
- ② 民族衣装を体験するとき、時間があまりなかったので、私だけ体験できなかった、私は別に構わないと思ったけど、韓国の学生はきづいてくれて、夜の時、民族衣装を私の所まで持って来て、私に着せた、とてもうれしかった。
- ③ みんな一緒に活動するとき、韓国側の学生とても親しく見える、しかし、日本人の間距離感を感じた。

2. 韓国の学生とのディスカッション

この違いについてより明らかにするため、8月5日、韓国側のみなさんに詳しく質問を行った。その結果、韓国は互いに助け合って生きていくことが美徳であり、日本は人に迷惑を掛けない事が美徳だと考えて生きてきたということがわかった。

3. 考察

以上日韓では人間関係の距離といった違いがあることがわかった。この違いは何によるものなのだろうか。北海道東海大学の李俊鎬先生の講演によれば、以下のようなものがある。

例えば、韓国人は家庭でも職場でも、親しいほど大きい声で怒鳴ったり、喧嘩をしたりしますが、すぐ仲直りをします。喧嘩をして、もっと親しくなる...日本では考えられない人間関係の風土です。

3.1

韓国人と友人になると、平気で部屋に上がりこみ、そして平気で冷蔵庫の品物を飲み食いし、それが友達ならば、「当然の行為」だそうですね。いちいち、持ち主の友人に「食べていいか？飲んでいいか？」と問い合わせたりするのは、よそよそしいらしい。これが韓国人の思う友達。

3.2

- (1) 日本人は韓国人の強い個性と自己主張に嫌気がしてしまう事があるし、韓国人は日本人のあいまいさに不信感と冷たさを感じてしまう事がある。
- (2) 韓国人はそんなに親しくない人にも自分の悩みとか不満とか率直に話す傾向があるが、日本人の場合はいくら親しくなっても話したらいけない事であるようだ。
- (3) 韓国人が感じる友達になれるための時間、日本人が相手の場合は3倍から10倍以上かかるような気がする。それでもまだ友達になってないような気がする。

4. まとめ

以上、日韓の人間関係の違いについて考察してきた。ほかの国を理解するには、まずその国の文化や考え方多様性を認めなければならない。今回のセミナーで日韓両方この点に至ったと思う。

しかし、その上にどうやってお互いのことを理解して、受け入れるという点については、未だ

お互いに努力しなければいけない。例えば、セミナーのとき、日本人の学生は、誠心誠意に招待したいけど、韓国側の学生は、日本側に迷惑をかけないようにやっていると感じている。これについては、今後のセミナーで改善すべきと思う。

<参考文献>

「朝鮮民族を読み解く」 古田博司 著 筑摩書房

「私が経験した日本人と韓国人の文化と思考の差」 <http://www.metroflex-samurai.com>

<セミナー参加状況>

- 2日 16:00-18:00 歓迎会準備（買出しの手伝い）
18:00-20:00 歓迎会参加
- 3日 9:30-16:00 講演会、文化体験に参加、実習の打ち合わせ
- 4日 13:00-14:00 テレビ局の見学
14:00-16:00 六本木と麻布十番の観光、和菓子を味わう
14:00-18:00 東京タワーに行く
- 5日 13:00-18:00 韓国側報告会準備を手伝う（日本語チェック）
- 6日 9:30-17:00 発表会参加
- 7日 9:00-20:00 バスツアー（箱根→関所→大涌谷→東京）
18:30-20:00 ナマスカで送別会

恋愛観の違いについて

成定 優（お茶の水女子大）

1. この論のきっかけ

韓国セミナーを通して私が実感した韓国人と日本人のいちばんの違いは身長差であるが（互いの民族衣装を着合う時間があったが、ゆかたがつんつるてんで申し訳なかった）、それでは深みのあるレポートにならないであろうということで、恋愛観の違いについて書こうと思う。

これは、実は韓国セミナーのみで感じた違いではない。一年前、二年生の前期に履修した森山先生の授業のグループ学習を通じて留学生と話した時から感じていた違いである。しかしその文化的背景を考察し、さらにレポートや論文を書くような機会は今まで得られなかった。私が属したのは「結婚観」のグループで、近代において結婚と恋愛は切り離せない。ちょうどいいのでこの機会を借りて軽く論じることにする。

2. 韓国の学生たちから聞いたこと

韓国の恋愛事情について聞いて驚いた点は、

①フィジカルな進展が遅い（半年ぐらい手をつながないらしい。私の聞き間違いか？）

②レディ・ファースト

の二点である。

また、驚きはしなかったが特筆に値すると思われる違いとして、

③日本（若年）女性のほうが自虐的ストーリーを好む

というものもある。上記二点に対し、これは表象のレベルの話だ。これについては「笑い」グループの韓国ドラマについての発表を観て思った。

この三つものの背景にあるのは何だろうか。

①は、一見単に韓国のほうが旧守的性規範が支配的であるが故のように思われる。しかし、たとえば教育や仕事の面などではむしろ日本女性の価値観のほうが旧守的であるという話もある。韓国人女性は学歴や収入などを自分の価値をはかるものさしにするが、日本人女性は夫や子どもの学歴や収入を自分のものさしにし、むしろ自身は主婦であるほうが豊かな生活をしているという自己認識に至るといった傾向があるようだ。なぜ、恋愛の（身体的な）進展という部分だけ韓国が旧守的なのか？ あるいは日本のほうが先進的なのか？

②は、韓国の特徴というよりも、男尊女卑社会であったにも関わらずレディ・ファーストを本格的には輸入しなかった日本のほうが特殊なのかも知れない。これは日本と欧米、中でもアメリカにおける、ジェンダーに対する捉えの違いが根本にあると思われる。

③は②にもつながる部分がある。まだ韓国にこういうブームが来ていないだけのような気もするが、韓国セミナーの中で『嫌われ松子の一生』が韓国でも観られているという情報を得たのでこれから来るかも知れない。

以上の三点に通底しているものは何なのか？

3. 考察

私はあまり韓国文化に造詣が深くないので月並みなことしか言えないのだが、理由は下記のものと考えられる。

- (5) 家族の結束……(2)とも関係するが、現在信仰していると否とに関わらず、韓国人の価値観・倫理観は儒教から強い影響を受けている。それゆえ家族の結束が堅く、さらに家族内でも上下関係が重んじられる。一方の日本は、稀に見るほど家族関係が希薄な国である。
- (6) 宗教……韓国人の50%強が宗教を持っていると言われている。ちなみに宗教を聞かれて儒教と答える人は少なく、仏教やキリスト教、特にプロテスタントが多いらしいが、ここでは何かにある程度でも帰依しているということがポイントだ。占いやお守りの市場が大きいことを指して「日本にも宗教はある」と主張することはできるが、それは帰依ではない。戦後の日本人には帰依するものを持たない人が圧倒的に多い。
- (7) 兵役の存在……ジェンダーと兵役、あるいは戦争の関係がきわめて密接であることはあまりにも有名だ。また、韓国人や韓国が好きの人に聞くと恋愛観が違う理由として返ってくる答えは、兵役の期間恋愛が断絶されるということだ。日本人の恋愛には、このような障壁はない。

以上の三点に共通することは何か。①恋愛以外の強固な関係②恋愛以外の強固な信頼③上下関係、の三つである。韓国人は恋愛以外の場面でこの三つを得られるが、日本人は得られない。この三つを恋愛に求めた結果が、日本的な恋愛至上主義である。「好きだから」フィジカルに進展してもかまわないし、「好きだから」横暴な相手にも耐える。また、上下関係を強調するために弱いとされる存在を保護するのではなく、弱いとされる存在が強いとされる存在に付き従うという構図を好む。韓国はこれら三つを恋愛に求めないため、アイデンティティのための闘争とは離れた、もっとロマンティックな領域で恋愛を楽しむことができるのではないだろうか。

4. おわりに

3の結論では私は韓国の恋愛の形態のほうが良いと見なしているような調子になっているが、私は異性愛一夫一婦制的価値観自体に異議を唱える者なので、日韓の恋愛傾向に優劣を付けるつもりはないことを付記しておく。

<セミナー参加状況>

- 2日 18:00-20:00 歓迎会
- 3日 セミナー
- 4日 13:00-16:00 表参道ヒルズ→表参道→明治神宮→竹下通り
19:00-20:30 花火大会
- 5日 12:00-15:00 代官山で昼食の後、ショッピング
- 6日 10:00-17:00 研究発表会参加
- 7日 9:00-20:00 バスツアー (昼食→関所→恩賜公園→フェリー)

【総括】

第4回日韓大学生国際交流セミナーから見た 国際交流の様相と今後の方向性*

－韓国側参加者の感想文を通して－

申恩浄(お茶の水女子大学大学院)

1. はじめに

今年度で4回目を迎えた日韓大学生国際交流セミナーは、今までの経験に基づいて交流行事の内容と進行形式に変化を加えたセミナーであった。今までは、まず、韓日両国の文化に対する研究主題で発表を行い、異文化についての理論的な理解を経て野外実習が行われてきたが、今回のお茶の水女子大学主催のセミナーでは、既存の流れと異なり、プログラムの最初に民族衣装の試着、茶道、狂言、日本舞踊など、日本の伝統的な文化を直接体験できる時間が設けられた。その後、発表主題と関連のある野外実習をし、野外実習に対する総括的な評価と感想をセミナー発表の際、付加的に行うことになった。このことは、セミナープログラムの進行形式の変化を通じて今後の国際交流セミナーの方向性について考察してみる機会を持ち、参加者たちが経験を共有することによって、より深く異文化を理解できるようにすることが趣旨であったと思う。

また、今回の国際交流セミナーは、同徳女子大学とお茶の水女子大学が各々セミナーの主催側として交際交流を経験してから、2回目に日本で行われるようになった行事であったため、これからの国際交流セミナーの方向性について再考することにおいても意義があった。

従って、本稿では、韓国側の参加者からの感想文を分析し、アシスタントとしての観察を通して国際交流の様相と今後の方向性について考察してみることにする。

2. 韓国側の参加者の特性

韓国側から参加した同徳女子大学の学生は、計14名であり、全員日本語を専攻している学生であった。(3年生・13名、4年生・1名)

今回のセミナーの場合、同徳女子大学の学生は、参加募集の段階から志願者の競争率が非常に高く、教授の面接を経て選ばれた学生によって構成されていた。日本語を専攻している関係からか、自分の勉強と関連のある言語が母語として使われている日本でのセミナーなので、多くの関心を寄せた結果と推測できる。このことは、参加志願段階から参加者の動機形成に多大な影響を与える要因であり、特に私費での参加であるだけに、セミナーの準備段階からとても意欲的で、積極的な姿を見せてくれた。また、外国語である日本語で発表しなければならない状況から大きい負担感を感じていたので、出発前まで、数回のリハーサルの時間を持ったようだ。

このような国際交流は、交流に対する参加者の目的と意図がはっきりしていることと、交流に対してある種の期待感を持って臨むということが特性であると言えるだろう。それに比べて、

* 本総括は、同徳女子大学、金榮敏先生より送られた韓国側学生の感想文のまとめをもとに分析を行ったものである。

お茶の水女子大学側からの学生は、学校の授業の一環として参加していたので、準備段階から多少異なる様相が見られた。今回の国際交流の観察から、このような参加動機の差異は、韓国側の学生たちに心理的な葛藤をもたらす一つの要因になっていたようである。もちろん、この問題は、日本文化の特性に起因していることもあるし、国際交流に参加した参加者の個性に起因することもあると思う。これについては、考察のところでさらに述べてみたい。

3. 感想文の分析

分析は、交流活動過程で個別に行われたインタビューの内容と、今回のセミナーに対する感想文に基づいて共通項目を抽出し、それについて参加者の意見を整理した。

分析は、下記のように大きく三つの側面から行った。

- 1) 国際交流セミナーの成果
- 2) 今回の国際交流セミナーの問題点及び反省点
- 3) 今後の国際交流セミナーに対する意見及び提案

3.1 国際交流セミナーの成果について

国際交流セミナーの成果に対する意見を大きくまとめると以下のようになる。

- ①日本人や日本文化を理解するいい機会になった
- ②日本語の学習への意欲が湧いてきた
- ③その他

まず、①の「日本人や日本文化を理解するいい機会になった」という意見の中には、日本の多様な文化を実体験できたことに対する満足度が高かった。特に、今回新たに加わった、日本文化系の部やサークルの友情参加によって実現した企画によるところが大きい。「日本舞踊や狂言を見たり、浴衣などを試着したりした経験がとてもよかった」という意見が最も多く(6名)、「それらの体験を通じて日本文化に対する理解が深まった」という意見も多かった(4名)。

これを見ると、何かを直接体験できる機会が設けられたという点で、何より国際交流活動を企画したことが有意義であった。

また、今まで講義形式の授業を通じ、皮相的なイメージだけを持ちあわせていた学生にとって、両国の文化を直接体験することでより自分なりに新しいイメージを構築し、それをさらに拡大し、修正して行くことが可能となった。そうした過程の中で、「直接体験してみる」ということの重要性が分かる。

②に関しては、「日本語の学習への意欲がさらに湧いた」(9名)という意見が圧倒的に多く、参加者の2/3に及んだ。これは、日本語を専攻している学生であったため、セミナーに参加している間、数多くの言語的な入力と出力を直接モニタリングできる機会を持つことによって、日本語学習への意欲が増進したものと思われる。また、来日する前までは、「長時間セミナーの発表を準備することを通じて、自分の日本語の実力が向上した」(3名)という意見もあった。このことは、交流前の段階で付随的に得られた肯定的な結果と言えるであろう。その他、「今回のセミナーにとっても満足している。」「日本側の配慮に感謝する」(5名)という意見や、日本人の友達ができたことへの喜びを表した意見も多かった(4名)。また、「自分の力で何かをやり遂げたという達成感を持った」(2名)という意見もあったが、これは、特に準備期間から続いていた発表の負担感から開放されて、一つの過程を完遂した満足感に起因すると思われる。

3.2 第4回交際国流セミナーの問題点及び反省点について

以上のように、日韓国際交流セミナーに参加しての感想は非常に肯定的なものであり、有意義なものであったことを窺い知ることができるが、問題点や反省点がなかったわけではない。大別すると以下のような項目に分類される。

- ①セミナーに臨む姿勢に関して
- ②主題発表と討論に関して
- ③日程に関して
- ④日本人の学生との交流に関して

①のセミナーに臨む姿勢に関しては、「お茶の水女子大学の学生と同徳女子大学の学生とでセミナーに臨む姿勢が違う」(6名)という意見が多かった。特にこの項目と関連する意見として、「日本人の学生は韓国の文化などについて知ろうとする姿勢があまり見られなかった」という意見が少なからず見られた。発表グループによっては、日本側の学生は発表準備に追われ、野外実習が十分にできなかったという報告もあった。日本側の参加学生は、韓国語の講座を聞いたり、韓国の歌の練習をしたりするなど、事前活動をしていたので、セミナーに積極的に参加すると予想されていた。しかし、自国での開催ということもあり、実質的には単位をとる授業の一環として参加するといった消極的な姿勢の学生もおり、そのような学生においては交流に対する内的動機が弱く、交流の意義や必要性に対する理解が不足していたことも事実である。

②の主題発表と討論に関しては、発表が順調に進められたのに比べ、「議論や討論があまり活発に行えなかった」(4名)という反省の意見が多かった。これに対しては、「発表の形式を工夫し、できるだけ、討議が中心になる発表になるようにしたらよい」という意見もあった。この問題は、昨年韓国で行われた第3回セミナーに、筆者がアシスタントとして参加した際にも感じたことである。今回の交流セミナーでは、この問題を改善するため、セミナー参加者がまずもってお互いに親しくなれるように、歓迎会を設けたり、セミナー初日に伝統文化体験を行ったり、野外実習などを先に実施し発表する時間を最後に設けるなどの日程調整を行い、議論が活発化するように工夫が凝らされた。しかし、思うような成果に至らなかったと言えるだろう。この問題は、議論することが、韓国側の参加者にとって、非常に深層的な問題を外国語である日本語で討論をしたり、意見交換をしたりしなければならないことでもあるため、意見を日本語でうまく表現できない自信の欠如に起因することとも思われる。

それを解決するために、両国の言語ができる通訳の担当を設けることによって、参加者の意思疎通の負担を減らすことも一つの方法だと思う。また、発表は必ず全員が日本語ですることというセミナーの規定に変化を与えることもいい方法ではなかろうかと思う。特に、今回のセミナーの場合は、今までとは異なり「発表の時間がセミナープログラムの後半に設定されていて発表が終わるまで、かなりの負担感があった」という意見が多かった。この問題は、今後、再考していく必要があるであろう。

③の日程に関しては、「一般的に日程があまりにもハードなので、ついて行くことが非常に大変だった」という意見があった(4名)。外国でのスケジュールを消化することは、どうしても一種の緊張感を伴うので、疲れやすくなる。それにもまして、何より、発表が最後であるということも負担が大きかった原因となっていたと思う。

その他、日本人の学生との交流については、「他のグループの日本人の学生と交流があまりできなかった」(2名)という意見や、「日本の学生と一緒にできるプログラムが少なかった」(2名)などの意見もあった。このことは、「一緒に交流活動に参加しながらも、日本人の学生たちと積極的な交流ができなかった」ということの感想である。この点は日本側の感想文を見るとかなり積極的に交流を行っている様子が示されており、対人関係に積極的な韓国人の目には、日本

人の姿勢が消極的に見えたものと思われる。

3.3 今後の国際交流セミナーのための意見及び提案

次の国際セミナーに向けての提案としては、以下のような意見があった。

- セミナーが始まる前にお互いに連絡を取り合って、前もって野外実習などの計画を立てる（2名）
- 前もってメール交換などをしてより親しくなってからセミナーに参加する。
- 発表主題を決める段階から（早い段階から）お互いの学生の意見を反映させる。
- セミナー期間中は交流だけに集中できるよう、発表の準備はセミナー前に終える。
- 今回はとても暑かったため、セミナーの実施時期の再考。
- 発表時にレジюмеなどを用意したほうが発表の内容を理解しやすい。
- 発表の準備だけではなく、討論の準備もやった方がいい。
- 民族衣装を試着してみる時間はとてもおもしろかったが、韓国側の準備が十分でなかった。
来年からは少なくとも人数分の衣装は用意できるようにしたい。（2名）
- 伝統衣装の試着など一緒に体験できるプログラムをもっと増やす。

国際交流セミナーの場合、ホームステイや団体合宿を通じた交流ではない限り、お互いに親しくなるまで多少の時間がかかる。それゆえ、短い時間の中で多くのスケジュールを消化する今回のようなセミナーでは、親しくなれる余裕が持ちにくいかもしれない。

従って、このような問題を解決するために、インターネットなどを通じて、事前準備の段階から、グループ別に情報交換や、討論主題について意見を交換することが必要だと思う。

4. 考察

感想文の分析を通して、交流の種類と様々な様相が浮かび上がった。日韓大学生国際交流セミナーは、教育的目的に基づいて企画された交流であり、特に日本語を専攻している韓国側の参加者は、外国語（日本語）学習の実践の場であり、その目的と動機を持って交流に臨んでいるので、交流に対する期待感が非常に大きい。このような交流への期待感は肯定的な結果への期待につながるのであるが、結果が予想できないのが、交流の特性であるため、いつも肯定的な結果が得られるとは言えない。それゆえ、交流の結果を踏まえ、参加者自身、どのように生かして行くかがもっとも重要であると思う。また、考えと行動の異なりがどんな文化の背景から生じてくるかを体験し、理解していく過程で、相手が自分と同じく積極的でないと感じたことについては、韓国人の情意的な特性に起因しているものか、交流という過程での異文化に対する理解不足に起因しているものかを考察する必要があると思う。交流の結果は多角的に考えてみる必要がある。

また、韓日交流というのは、両国が共有している歴史的な特殊性によって、単に異文化に接するという次元を超えて、相手の国に対する先入観や偏見を再構築していく、もう一つの段階が求められていると思う。従って、韓日交流は、短時間のうちに理解の土台が築けるとは限らない。これは、「交流」の持っている一般的な特性であると同時に、韓日交流の特殊性かも知れない。

従って、これからは、交流をする前に、国際交流が持つ両面性について前もって考えてみる必要があると思う。交流は、始めることにより生命力を持つことになるので、グローバル時代の私たちは絶えずに交流の場に臨まなければならない。

5. 最後に

国際交流は、数多くの修正過程を経て、「異なり」に対する理解を深めることである。これは、ただ異文化交流だけに限られているのではなく、現代人の生活の原理とも類似する部分が多々あると思われる。そのような観点から、第4回の日韓大学生国際交流セミナーに参加した学生たちは、交流の第一歩を踏み出したということに意味があると思う。

最後に、このような交流の場は、何よりも、お茶の水女子大学と同徳女子大学の先生方の交流の必要性に対する強い信念なしには持ち得なかったと思う。この報告書を通じて、心から感謝の言葉を申し上げたい。

日韓の交流が我々に教えてくれたこと

—第4回日韓大学生国際交流セミナーをふりかえって—

森山新（お茶の水女子大）

1. はじめに

第4回日韓大学生国際交流セミナーも成功裏に終えた。本稿では主に日本側の参加学生の感想文を分析しつつ、その意義や反省点についてまとめてみたい。

2. 国際理解教育の場としてのセミナーの意義について

昨年の韓国でのセミナー、今年の日本でのセミナーの両方に参加した学生からの感想を見ると、温かい歓迎をしてくれた昨年の強い印象に比べると、日本側の歓迎の姿勢が十分であったか自信がないという反省がある。確かに積極的で、人間関係も親密で、とりわけ来客に対しては持てる力の全てを捧げてもてなそうとする韓国の考え方と、歓迎もほどほど、つまり、相手に負担をかけすぎないように、と考えてしまう日本の考え方の違いを考えると、その学生も語っているが、文化の差であるとも言える。しかし日本が私たちの属するアジアや隣国韓国に対し、あまりに関心であったという点も日本の学生の何人かが指摘しており、見逃すことはできないであろう。

また、韓国側は日本語、日本文化が専攻であり、日本に対してかなりの知識を持ち合わせているのに比べ、日本側の学生の専攻は韓国語や韓国文化ではないため、そのギャップから、日本側の韓国への知識が表面的だったり、関心が弱かったりする側面は否定できない。特に今回は日本開催ということもあり、韓国に対する知識や関心は相対的に弱いものとならざるを得ない。そういった要因も、韓国側に寂しい気持ちをもたらす要因にもなる。事前学習においてももう少し韓国に対する知識を深め、関心を高めておく必要があったと反省している。昨年に続き今回が2度目のある参加者は、前回は一人一人との交流から得たものがそのまま韓国として理解してしまった側面があったが、1年間韓国についての知識を深めてきたことにより、一人一人の韓国人を個人として認識できるようになり、韓国の多様性に目が行くようにもなったと語っている。

また多くの日本人学生の韓国についての印象が大きく変わったことも特筆すべきであろう。学生の多くは入学前、もしくはセミナー参加前までは、韓国についての関心はそれほど強くはなく、十分な知識も持ち合わせているとは言えない状態であったが、1週間の間、韓国の学生と行動の全てを共にすることで、隣国韓国についてそのよさを発見したり、認識を新たにしたりした学生は少なくなかった。ある学生は人を大事にする熱い思いを発見し、見習うべきだと述べ、ある学生は、韓国の学生は表情がとても豊かで、話しているうちに自分のほうも表情豊かになっていったとしている（この学生は、最終日韓国の学生がリムジンに乗って池袋を離れるまで韓国の学生とすべての行動を共にし、バスが見えなくなる最後の最後まで見送っていたのを今でも覚えている）。

日本人学生の多くは日頃留学生と接しており、韓国人学生とのふれあいは日常的に体験している。しかし数日間にわたり行動を共にすることは初めての経験で、それにより生活の何気ない一場面や会話の中に、互いの文化の相違に気づかされるのが新鮮で楽しかった、多文化社

会や異文化理解については授業でも学んでいたが、実際に他国の人と触れ合うとはどのようなことか、どのような課題があるかなどを知る機会が得られ視野が広がった、などと語っている。

韓国の学生については、外見など、似ていると感じる側面、行動様式や率直さなど、違うと感じる側面の両面があったが、国籍は違っても、同じ年頃で同じような関心や考えを持った女の子なのだといった一体感を感じた学生のほうが多かったようである。また韓国人一人一人の中に多様性を発見した学生もいた。

異文化、とりわけ好感の持てない文化に出会ったとき、なぜそのような文化を持つに至ったのかについて考えてみることの重要性を知り、そのような体験を通じ、相手の文化を尊敬できるようになったと語った学生もいた。その学生は異文化を越えて互いが仲良くなれたのは、相手を知り、思いやり、理解し、尊敬しようとする視点を常に両者が持ち合わせていたからだと言っている。

日本での開催、そして海外で日本を専攻としている学生との触れ合いは、日本の学生に、自身の国（日本）とその文化についていかに無知であったかということを考える契機ともなったようだ。日本の文化をうまく伝えられずもどかしさを感じたケースもあった。逆に日本の文化について韓国の学生から教えられるケースもあり、日本文化に対し、もっと学でおくべきだといった感想もあった。文化の相違点を見出す面白さや、それを通じて日本人の姿が見えてくる面白さを異文化交流に見出した学生もいた。

韓国の学生との交流を通じ、自分自身の世界の狭さに気づき、広く世界に目を向けていくべきだと痛感する学生もいた。

ヴァッサーとの交流を経験している学生の中には、アメリカの学生と親しくなるために相当の時間を必要としたのに比べ、韓国の学生とはあっという間に親密になれて驚いたと言っている学生もいた。その学生はその理由として、相手の日本語力や日本理解の高さ、同じ女性同士であったことなどを挙げている。

3. 外国語によるコミュニケーション能力の向上と拡大について

韓国の学生の日本語力の高さには一同驚いていた。そしてそれが今回、彼らのフレンドリーさとあいまって、親密な交流へとつながったことを指摘する学生が多く、国際交流において外国語学習が重要であることを多くの学生が痛感していた。また自分自身が韓国語を話せないことへの反省や、自身の外国語（英語）によるコミュニケーション能力の不足を改めて感じる学生もいた。

さらに日本はこれまで、英語などの学習は力を入れてきたが、韓国語など近隣諸国の言葉の学習を軽視してきたこと、近隣諸国の言語を学ぶ必要性に触れた学生もいた。

4. 第三の視点

今回のセミナーには2名、中国からの留学生が参加していた。いずれも中国人という第三の立場から日韓両国の文化と人間関係の異同を体験することになったが、日韓の違いや東アジア交流の重要性などを考える上でとても役に立ったと言っている。

一人の学生は対人関係の積極性、人間関係の距離感などで日韓の間にはかなりの相違があることを発見している。

もう一人は、日本との歴史問題に関し中国は韓国と同様な立場にあり、日本という国が、似ている面もあるが理解しがたい国でもあると言っている。しかしながら、日韓中三国の平和と発展はアジアのみならず世界にとって重要であり、そのためには日韓だけでなく、日韓中三国

の留学生が交流していく必要があると語っている。

5. 運営面での検討事項

最後に今後のセミナーのさらなる発展のために、運営面についてふり返ることにしたい。

初日の寮での自家製の歓迎会は、アイスブレイキングの場ともなり、初対面の緊張感をほぐしてくれるよき場となったことは評価してよいであろう。また2日目には国際教育センターによる民族衣装体験や日本文化系部・サークルの友情出演による文化体験の時間が持たれたが、これが韓国の学生にとっては日本文化に直接触れ合い、親しむ場として非常に好評であった。同じ大学生の演出でありかつ体験が可能であったことで、知識としてのみ学んでいた日本文化について考えを深める場にもなった。日本の学生たちにとっても、このような場は日本文化を改めて考えさせられる場として、高い評価であった。

今回は研究発表を5日目にまわしたが、それについては、日本語に慣れ、交流も進んだ上での発表であったため、和やかな雰囲気の中で発表ができたという点ではよかったが、発表の準備のために交流の時間が犠牲になってしまった感があったのは残念であった。とりわけ日本側は直前まで期末試験があり、発表の準備がセミナー期間中にずれ込んでしまったグループがあったことから、韓国側の学生に、交流より発表（授業）を優先しているのではないかという印象を与えてしまった点は反省すべきであろう。しかし両国学生の実習や交流の中で、自身のテーマについての答えを見出したケースもあり、研究発表をどこに置くかは今後さらに検討していきたいと思う。

また日本側は研究発表も行う実習3・4の受講者とセミナーだけに参加する実習4のみの受講者とがあり、セミナーに対する参加の度合いに微妙な差が出てしまい、その点についても今後検討していく必要がある。

討論が十分に煮詰まらなかったという意見も見られた。特に講演会や研究発表会での質疑応答が十分でなかった点や、表面的な対立を回避するなどの理由から議論が深まらなかった点、一部の学生に集中し、一部の学生はセミナー中一度も質疑応答をしなかったという点などを反省点として挙げるができる。この点については、韓国側は日本語で語るというハンディを担っていることを考えれば、日本側がもう少し積極的であってもよかったと思う。また、質疑応答の時間を十分にとったり、司会のほうで全員が討論に加わることができるよう、うまく質疑応答を導いたりするなど、討論を円滑化するための運営面での改善も必要と思われる。今回セミナーで来日した韓国の学生より、本学で学び日本語での討論に慣れている留学生が韓国側の意見を語ったり代弁したりする場が多く、来日した学生たちが討論に加わりにくくなってしまったという反省もある。

今回は歓迎会や講演会、文化体験、研究発表会の司会は学生たちに任せた。この点はとてもよかったが、学生たちがより主体的、積極的にセミナーに取り組み、自ら作り上げていく側面を強化することが交流への積極性を高め、深めることにつながると思われる。今後の課題としたい。

前回日本で開催された第2回セミナーは、学期中の6月下旬から7月上旬に開催されたが、お茶大側の学生は総じてまじめなため、交流期間中と言えども他の授業を休むことには抵抗があり、そのような反省をふまえ、今回は学期の授業が終わった直後の8月に開催することとなった。しかし今年の夏は猛暑日が続き、学生たちには過酷であった。もう少し快適な時期を模索したいが、両国のカリキュラムなどの日程上、変更は難しいかもしれない。

6. おわりに

韓国の学生は日本の学生に比べ、気さくで親密な人間関係を志向することから、短期間のセミナーにも関わらず、親密な交友関係が生まれ、今でもメール交換などの交流を続けている学生や、来年は韓国でのセミナーにぜひ参加したいと述べる学生も多い。人間関係の積極性については韓国側より日本側のほうが下であることは否定できない。この点は文化の違いと言って済ませることもできるが、その一方でこうした壁をいかに打破し、積極的な人間関係を築くかということは、グローバルな社会にあって国を越えた交流の担い手となるために日本の学生が解決していかなければならない課題であるともいえるだろう。

日本は明治維新以降、脱亜入欧を志向し、アジアには背を向けてきた。過去のわだかまりは今日かなり解消されてきてはいるものの、アジアに対する無関心は今なお多くの日本人に残された課題である。これまで国際交流というと欧米との交流を想起し、外国語の学習というと英語など欧米語の学習を想起することが多かったが、このようなアジアとの交流やアジアの言語の学習もまた重要であり、忘れてはならない。ある学生は、今回のような個と個が触れ合う相互交流の機会が増えれば、互いの文化への尊敬心や理解が深まり、日韓の間に存在する外交上の溝は克服できると語っていたが、こうした交流の機会をさらに充実させることを通じ、日本が自らの反省と努力で過去を克服し、世界の共生と共栄に貢献できればと思う。

再会を期して...



グローバル時代における日韓の重要性を考える
～2007年第4回日韓大学生国際交流セミナー報告書～

発行年月日 2008年1月31日

発行 お茶の水女子大学国際教育センター・文教育学部グローバル文化学環

住所 〒112-8610 東京都文京区大塚2-1-1

電話&FAX 03-5978-5691

<http://jsl.li.ocha.ac.jp/>

発行協力 同徳女子大学外国語学部日本語学科

住所 〒136-714 ソウル特別市城北区月谷洞23-1

電話 02-940-4370 FAX 02-940-4191

編集 森山新（お茶の水女子大学）

印刷 よしみ工産



第4回日韓大学生国際交流セミナー